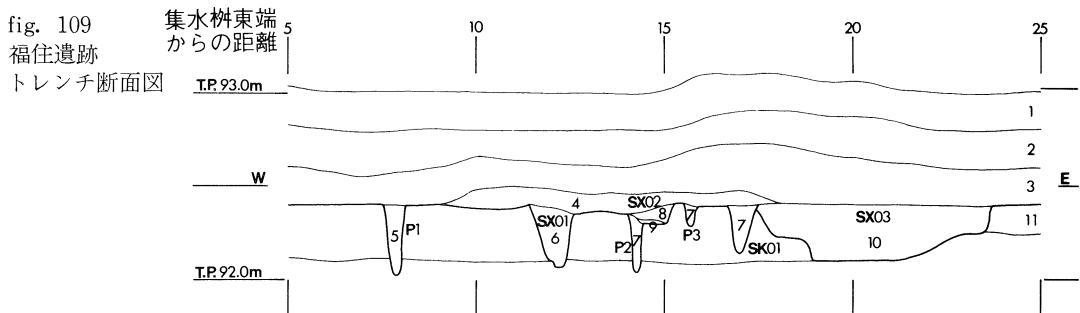


m、深さ0.1mを測る。SK01は、全長0.75m以上、深さ0.25mを測る。

SX01は、豊穴状の落ち込みで、全長1.2m以上、深さ0.5mを測る。SX02は、豊穴状の落ち込みで、全長1.1m以上、深さ0.1mを測る。SX03は、豊穴状の落ち込みで、全長6.2m以上、深さ0.3mを測る。

なお、SX01埋土からは、鎌倉時代前半の須恵器壺、土師器皿・壺の他、青磁碗などが出土している。



4. 出土遺物 出土遺物は確認できた遺構内埋土のものが大半を占める。その中でも、まとまった遺物が出土したSX01の土師器・須恵器・磁器について述べる。

土師器

土師器は量的に最も多く、法量より皿（口径8cm）と壺（口径12cm）の2類に分けられ、さらにそれぞれの形態・技法より皿は4類、壺は2類に細分できる。

皿a類（1～6） 口縁部は斜め上方に延び、一段ナデによって仕上げられる。底部外面は指頭圧痕、底部内面はヨコナデのものと一定方向ナデのものがある。

皿b類（7～11） 口縁部が一段ナデによって斜め上方に短くつまみ上げられて終わるもので、口縁部と底部の境が鈍い稜を形成する。底部外面は指頭圧痕、底部内面は概して一定方向ナデで仕上げる。

皿c類（12） 口縁部が短く内湾するもので、一段ナデで仕上げる。底部外面は指頭圧痕、内面は一定方向ナデで仕上げる。

皿d類（24・25） 平底の底部と斜め上方に延びる短い口縁部から成る。底部外面は回転糸切り未調整、その他は回転ナデである。

壺a類（13～23） 丸みをもつ底部と斜め上方に延びる口縁部から成る。口縁部は一段ないしは二段ナデによって仕上げる。底部外面はナデ及び指頭圧痕、底部内面は不整ナデで仕上げる。

壺b類（26～28） 外面が回転糸切り未調整の底部と斜め上方に延びる口縁部から成る。口縁部と底部内面は回転ナデ調整である。

なお、土器洗浄中に壺の中から漆製品を確認している。

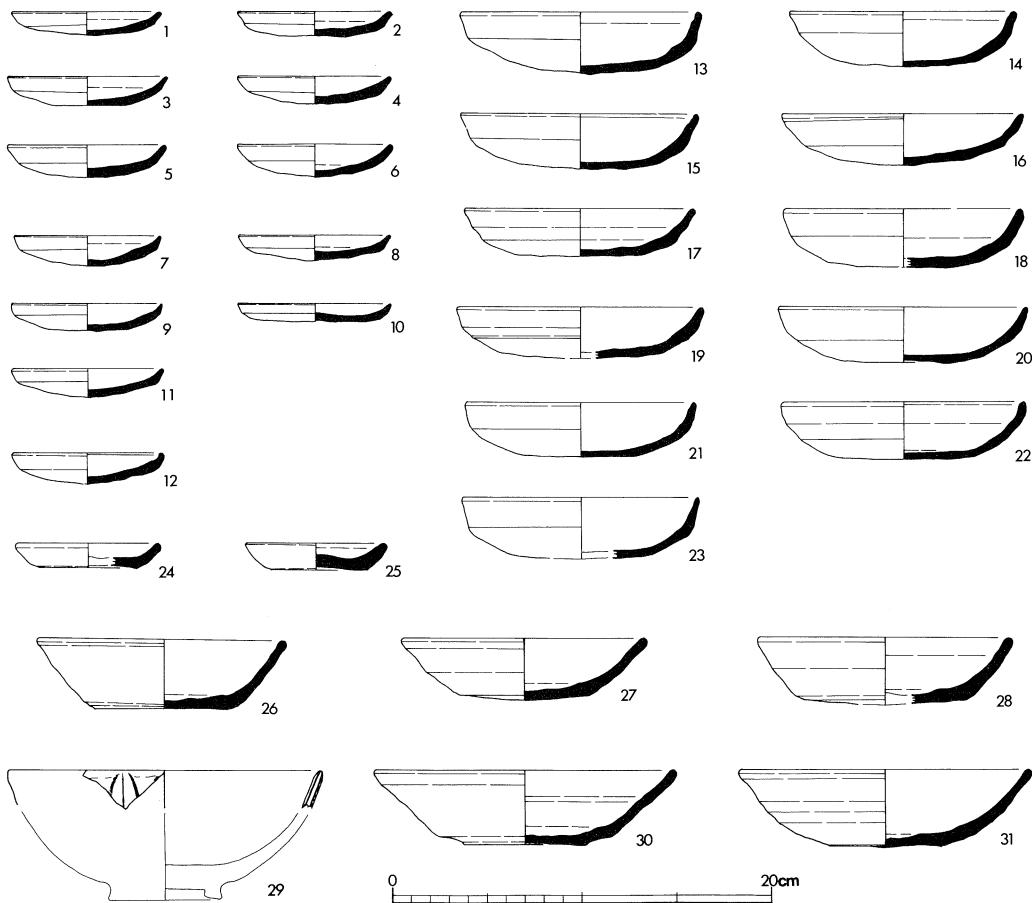


fig. 110 福住遺跡 SX01出土遺物実測図

須恵器 須恵器は土師器に比べて極めて少量で、塊（30・31）があるだけで他の器種は全く確認できない。いずれも底部外面が回転糸切り未調整で、底部内面にナデを施す他は回転ナデ仕上げである。口径約15cm、器高約4cmを測る。

磁 器 磁器は図示した青磁碗1点（29）を確認したにとどまる。小片であるが、龍泉窯系碗I類一5に分類できる鎬を削り出した蓮弁文を有するものである。釉の発色は濁った黄緑色である。

5. まとめ 今回の調査は埋蔵文化財調査の難しさを如実に物語る結果となったが、多量の遺物を採集できたのは不幸中の幸いであった。各遺構の性格については断面観察であったため明らかにできないが、SX01を中心検出した遺物はその特徴より鎌倉時代前半に比定できるものと考えている。特に、土師器の出土量が他を凌いで傑出しておらず、当該期の集落における土器組成の一端を知り得る資料と言えよう。

今まで集落の実態が把握されていない明石川上流域の歴史を知る上で、今回の調査は今後大きな意味を持つであろう。

まい こ こ ふんぐんひがしいち が さか
10. 舞子古墳群東市ヶ坂3号墳

1. はじめに 東市ヶ坂3号墳は、舞子古墳群の西端に所在する東市ヶ坂支群中の古墳である。舞子古墳群は、舞子丘陵上に存在する後期古墳の総称で、かつては100基以上の古墳が存在したと思われるが、現状では約20基を残すのみとなっている。

2. 調査経過 東市ヶ坂3号墳の南半部は民間企業の所有地で、北半部は神戸市有地となっている。昭和58年度に南半部が宅地造成されることになり、工事に先立ち発掘調査を実施した。調査の結果、直径約16mの円墳で、横穴式石室を内部主体とする後期古墳であることが判明した。墳丘はほとんど削平されていた。石室の保存について協議を行っていたところ、北半部の墳丘についても神戸市水道局が水道施設の工事を計画中であることを知った。このため水道局と協議を行い、古墳の規模と性格を明らかにするため発掘調査を実施することになった。

3. 既往の調査 昭和39年度に尼ヶ谷支群3基、52年度に東市ヶ坂支群2基、55・56年度に西石ヶ谷支群6基、57年度に東石ヶ谷支群1基を調査している。その他に舞子丘陵では、弥生式土器片・石器等も採集されている。また東石ヶ谷1号墳発掘調査時には、弥生時代後期の住居址等の遺構が発見されている。

4. 古墳の立地 東市ヶ坂3号墳は、旧舞子浄水場内南東端に存在する。浄水場造成の際に地形はかなり改変されたようであるが、古い地図等から復元すると東南へ延びる70m前後の尾根上に存在したと思われる。東市ヶ坂1・2号墳は、この尾根のさらに先端に存在していた。



fig. 111 東市ヶ坂3号墳位置図

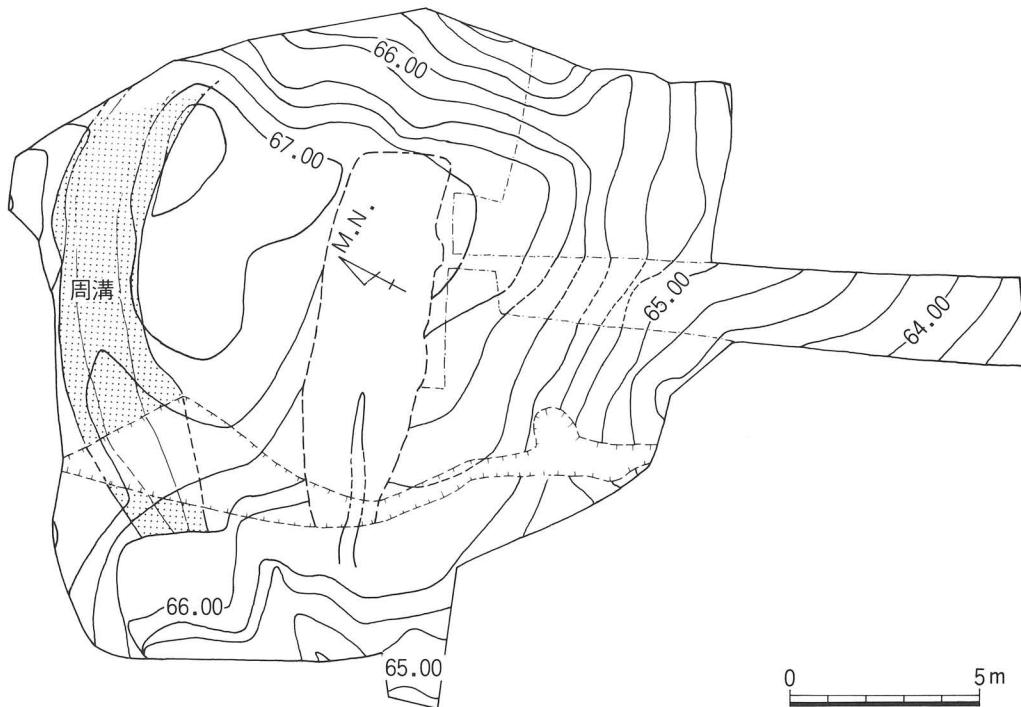


fig. 112 東市ヶ坂3号墳墳丘測量図

5. 古墳の形 古墳は、石室北側で検出された周溝の形状より、直径16mの円墳と推定されると規模する。しかしながら、古墳は後世の造成等により相当削平されてしまい、古墳の盛土及び石室の上半部は、ほとんど残存しない状況である。

6. 石室の形 古墳の内部主体は、右片袖の横穴式石室である。石材の積み方は、袖石が縦積みで、その他の石材は横積みとなっている。石室には、持ち送りが見られ、石室の残存高は、床面より約1mであった。さらに石室羨道部から石室外へと排水溝が掘られている。石室の平面形は、石室左側（南側）が、ほぼ直線的に石積みがなされているのに対し、右側（北側）は、胴張りが見られる。

7. 石室内部 石室内には、天井石や側壁の崩れ落ちた石材と土砂が流入していた。また、**の状態** 側壁や奥壁が後世にこわされ、盗掘を受けたと思われる箇所も検出された。

玄室の右側壁に沿って、玄室床面よりさらに高く、石の面をそろえ、羨道側に石障を配置する石敷棺床が検出された。また、この石敷棺床の左側（南側）にも礫群が検出されている。同様の石敷棺床が壊されたものか、性格づけは困難である。玄室床面は、赤褐色粘質土を地山に貼っている。羨道にはこの粘質土は見られず、羨道と玄室では段がつくられている。

石室内出土遺物は、盗掘をうけたようで、原位置をとどめるものはなかった。玄室内床上面より、須恵器壺蓋1・壺身2・高壺脚部・壺底部等が出土した。

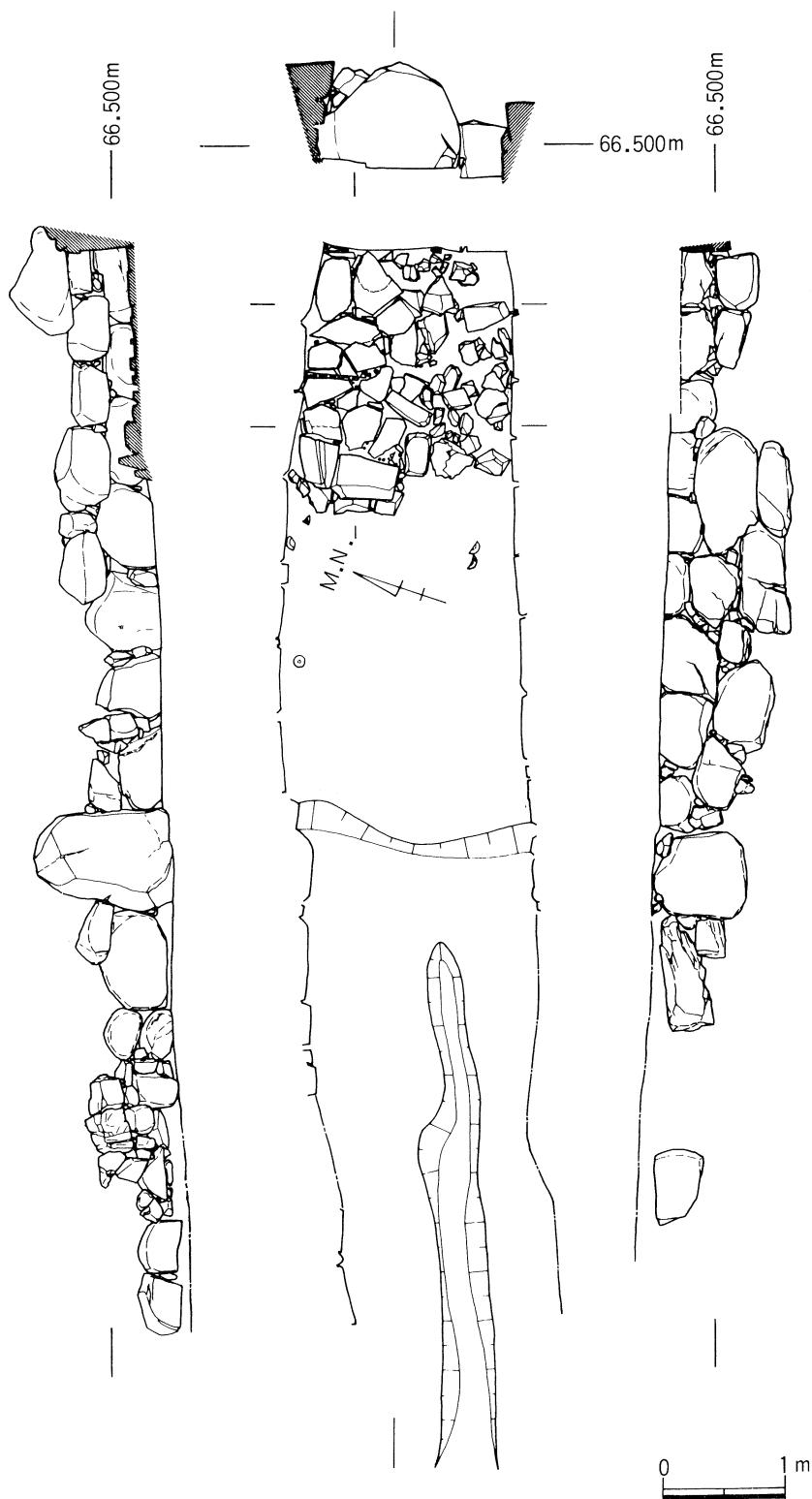


fig. 113 東市ヶ坂3号墳石室実測図

fig. 114 玄室内石敷棺床
と羨道閉塞石



fig. 115 周溝内須恵器
出土状況

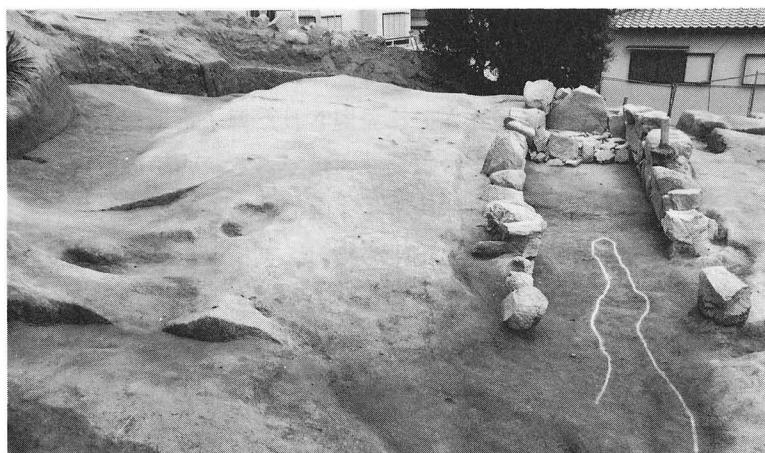


fig. 116 石室と排水溝



羨道部では、刀子片と思われる
もの1、羨道入口で墳1が出土
した。

8. 周溝 石室北側で、一部攪乱を受け
ているが、石室を弧状にめぐる
長さ約12mの周溝が検出された。
幅約2m、深さ約0.3mである。

また周溝内より多くの遺物が
出土している。土器類では、須

恵器甕、壺、壺等である。他に金環2・不明環状品2・石製管玉1・ガラス玉
7・ガラス片28が出土している。出土状況は、周溝にいったん土が堆積した後、
遺物が堆積し、さらに周溝内に土が堆積したと考えられる。

須恵器類は、小破片が散乱していることから、土器を意識的に割り、廃棄し
たと考えられる。

ただし、石室内で通常出土すると考えられる金環やガラス玉が周溝内で甕片
等と出土する点は、今後の検討課題である。

9. まとめ 東市ヶ坂3号墳は直径16mの円墳で、内部主体は右片袖式横穴石室である。
さらに現在までに発掘された舞子古墳群内の古墳では、はじめての石敷棺床を
持つ稀少かつ重要な古墳である。古墳の築造時期は、出土遺物、石室の構造等
により6世紀後半～末頃であると考えられる。今後石敷棺床の類例研究、周溝
内特殊遺物の出土の検討、東市ヶ坂3号墳の位置づけ等数多くの課題は残すが
今後の検討に待ちたい。



fig. 117 玄室内石敷棺床細部

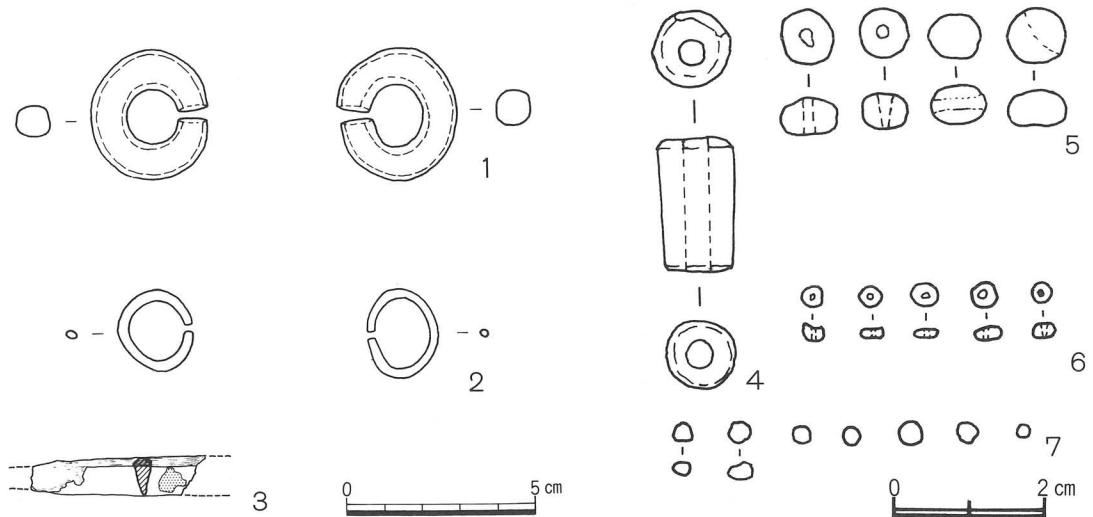
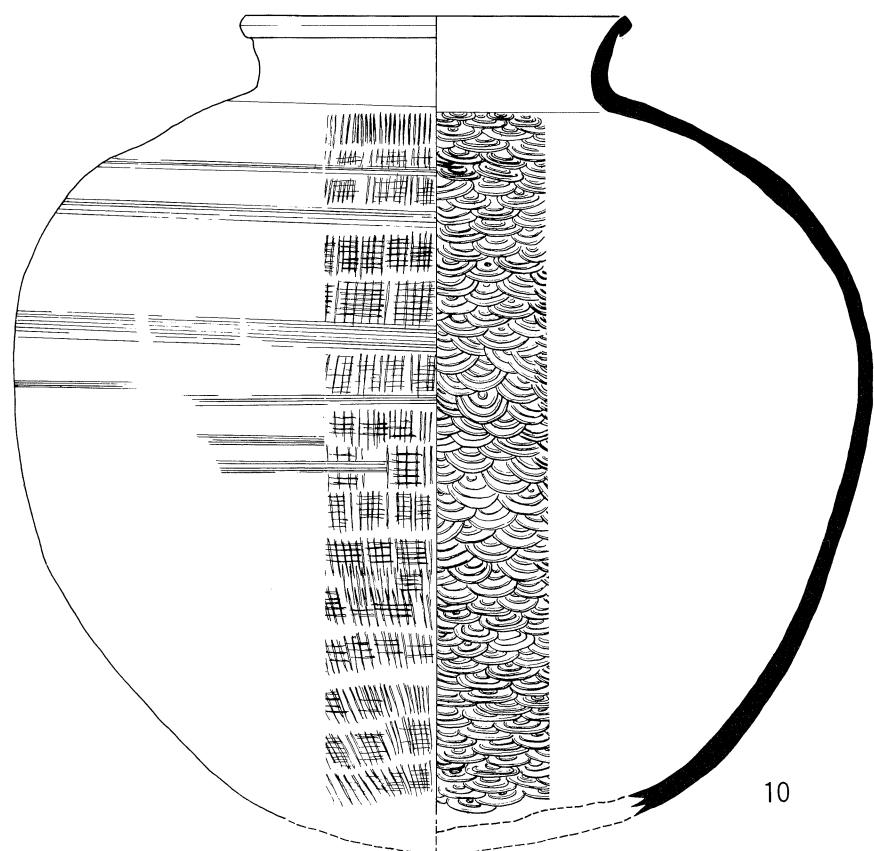
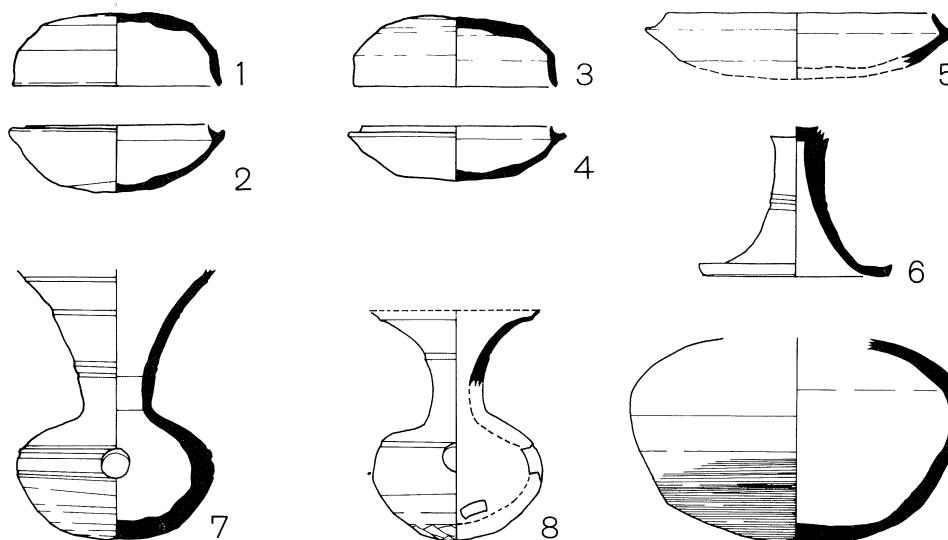


fig. 118 出土遺物実測図 1. 耳環 2. 不明環状品 3. 刀子 4. 石製管玉 5~7. ガラス玉



0 10cm

fig. 119 東市ヶ坂3号墳出土須恵器実測図

まい こひがいし がたに
11. 舞子東石ヶ谷遺跡

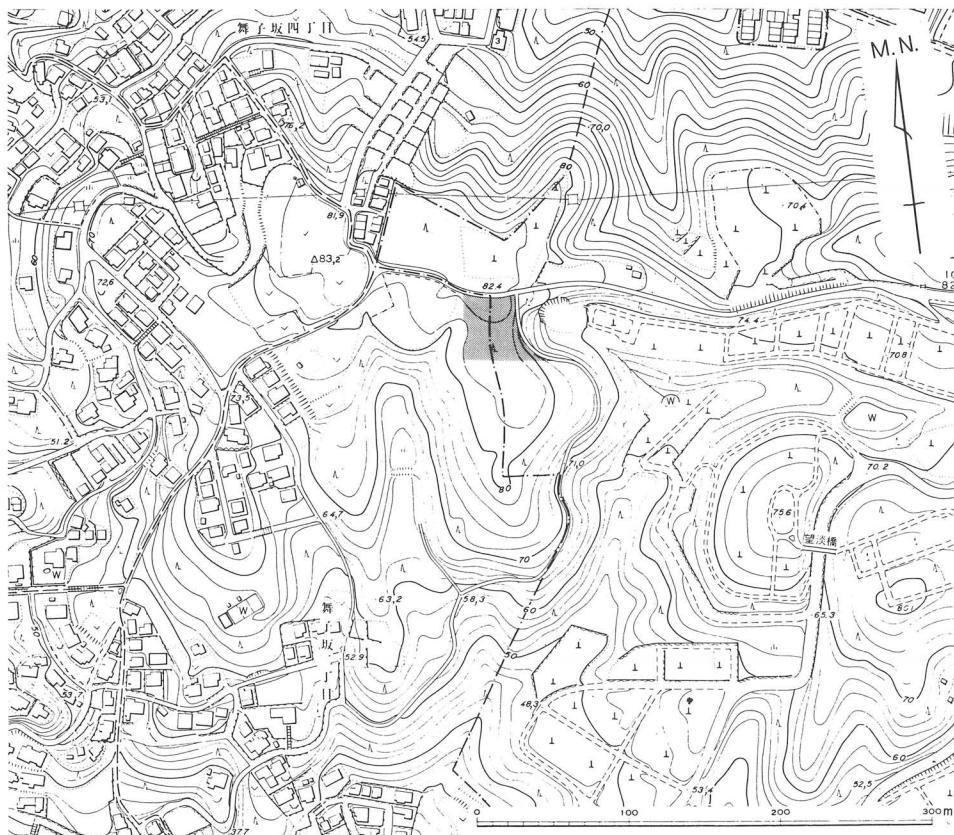
1. はじめに 舞子東石ヶ谷遺跡は、舞子浜から 1.5km 程北へ入った神戸市垂水区舞子陵に所在し、標高83mを測る舞子丘陵の主尾根から南へのびる比較的平坦な支尾根上に存在する遺跡である。

舞子丘陵上に弥生時代の遺跡が存在することは、すでに昭和40年代前半から知られており、舞子台、尼ヶ谷、毘沙門、西石ヶ谷、東石ヶ谷の各尾根上から弥生土器（後期）や石鏃が採集されている。今回調査した東石ヶ谷遺跡は昭和45年ごろ、尾根上が重機によって掘り起こされた直後、多量の弥生土器片が出土し、発見の端緒となった。

2. 山田川流 山田川流域では、これまで10か所の弥生時代遺跡の存在が知られている。

域の弥生 弥生時代前期（新段階）から中期（中葉、後葉）、後期にかけて継続して集落時代遺跡が存在したと考えられる大歳山遺跡は、山田川流域の拠点的な集落遺跡と考えられる。狩口台きつね塚古墳丘盛土内から、石庵丁や中期中葉の弥生土器片が多数出土しており、中期（中葉）には、多聞丘陵上に新たに集落が形成されたと考えられる。また、この時期のものとして投上で袈裟襷文の扁平紐式銅鐸

fig. 120
調査区
位置図



が出土している。

中期後葉に形成される遺跡として西石ヶ谷遺跡周辺地区がある。弥生土器は2次堆積土内からの出土であり、遺跡本体は東市ヶ坂尾根上に存在していた可能性がある。

後期に入ると遺跡数は増大し、西岡橋、東谷公園、帝釈、舞子台、尼ヶ谷、東石ヶ谷、毘沙門などの各遺跡が形成される。なお、時期は不明であるが西舞子の六神社境内からは石鏃が採集されている。

3. 調査経過 舞子墓園造成工事事業に伴い、昭和57年に実施した東石ヶ谷1号墳発掘調査で、新たに弥生時代後期の円形住居址が2棟発見された。従って尾根の北半にも弥生時代の集落址が存在すると考えられたため、墓園造成工事予定区域内、 $2,360\text{m}^2$ について、発掘調査を実施した。

4. 調査概要 今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居址3棟（S B01～03）、短辺に突出部のある炭の入った長方形土壙2基（S K01、02）、土壙32、ピット91である。

竪穴住居址 北から南へのびる尾根が中ほどでやや膨らみ、拡がりを見せるが、3棟の竪穴住居址は膨らんだ尾根の尾根筋よりも東よりのところで発見された。

S B01 一辺 $6.4\text{m} \times 6.8\text{m}$ の方形の竪穴住居址である。4本柱の建物であるが一度建て替えが行われ拡張されている。柱間寸法は建て替え前が一辺 $3.1\text{m} \times 2.8\text{m}$ 、建て替え後が一辺 $3.7\text{m} \times 3.2\text{m}$ である。柱穴の大きさは建て替え前が径 $0.2\sim 0.25\text{m}$ 、建て替え後が径 $0.25\sim 0.3\text{m}$ である。住居址の谷側にのぞむ北東側と南東側の壁は灰と褐色土を交互に混じえた盛土で築かれている。

fig. 121
調査区全景
(北から)



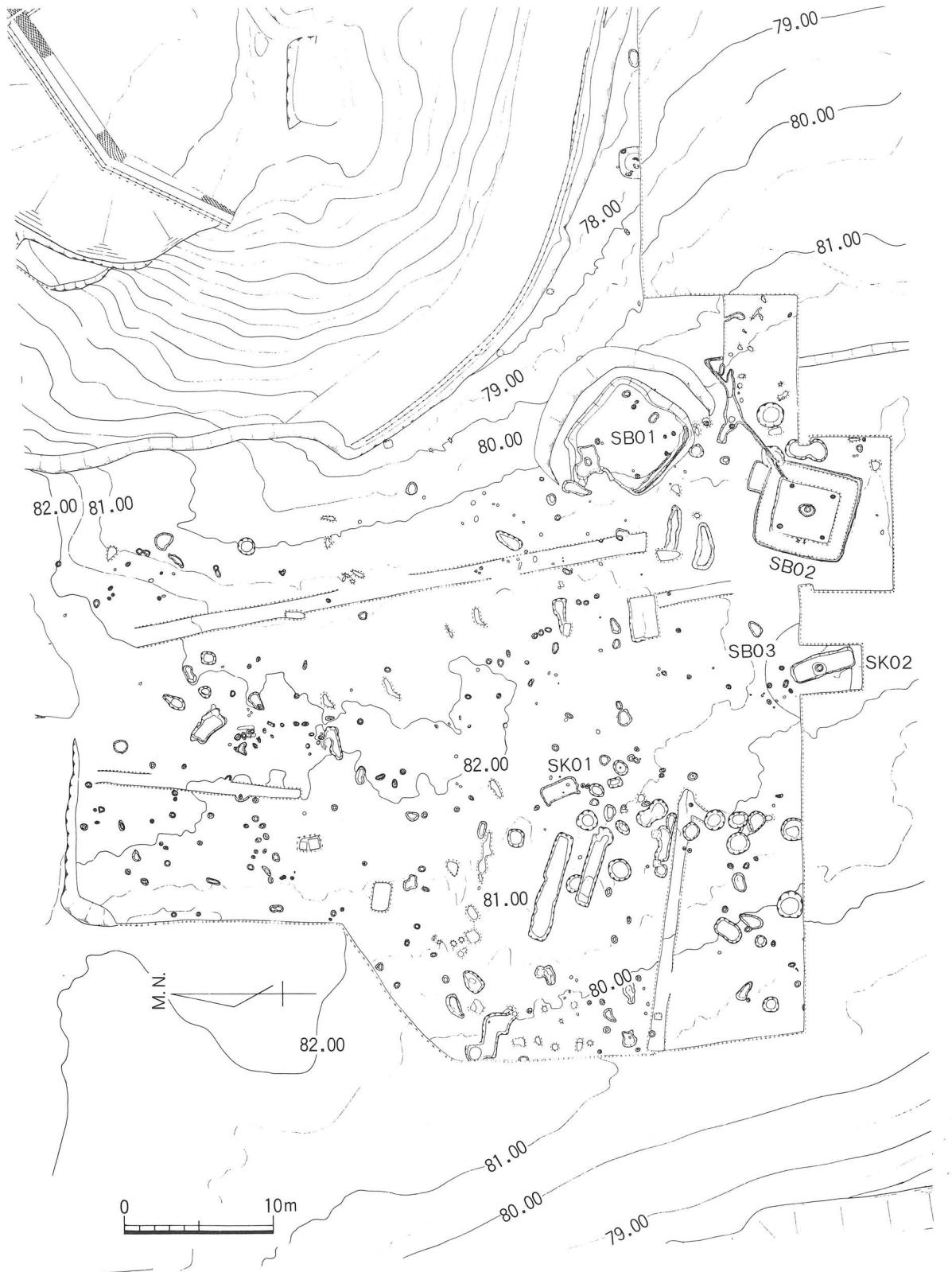


fig. 122 調査区全図

fig. 123
S B01

住居址の北西には、入口と思われる突出部がある。床面を 0.1m 堀り込み、幅 0.5m で屋外へ 0.7m 程突出している。住居址の南東側柱通りの中央に壺を据えつけた瓢形のピット（径 0.8m、深さ 0.1m）があり、また住居の北東隅には、径 0.5m、深さ 0.3m のピットが存在した。

住居址内の埋土からは弥生土器、石鏸や砥石が出土しているが、床面からの出土遺物は殆どみられなかった。住居址の北東側、南東側の斜面からは多数の弥生土器片が出土している。

S B02 S B01から南へ 6 m 隔たったところに位置する東西 5.9m、南北 6.2m の方形の竪穴住居址である。北壁の東へ偏った位置に、入口と思われる東西 2 m、南北 1 m の張り出しがある。住居址内には幅 0.15m、深さ 0.15m の周壁溝が巡らされており、この溝は住居の北西隅で屋外へのびる排水溝にとりついている。溝の内側には、幅 0.9m、高さ 0.2m の高床部があり、その内側に 4 本の柱と中央土壙が存在している。柱間は東西、南北とも 2.8m、柱穴は径 0.25m、深さ 0.3m、中央土壙は長径 1.1m、短径 0.8m、深さ 0.8m である。

住居址内の埋土からはおびただしい数の弥生土器が出土した。恐らく投棄されたものと思われる。

S B03 S B02から西へ 5 m 隔たったところにある直径 6 m の円形住居址である。

S B02は S K02 に切られており、S K02 の床面で S B03 の中央土壙が発見された。中央土壙は長径 0.9m、短径 0.7m、深さ 0.5m で土壙内には灰が堆積しており弥生土器が出土した。S B03は保存されることになったため範囲の確認をしたのみで完掘はしていない。従って柱数などは不明である。

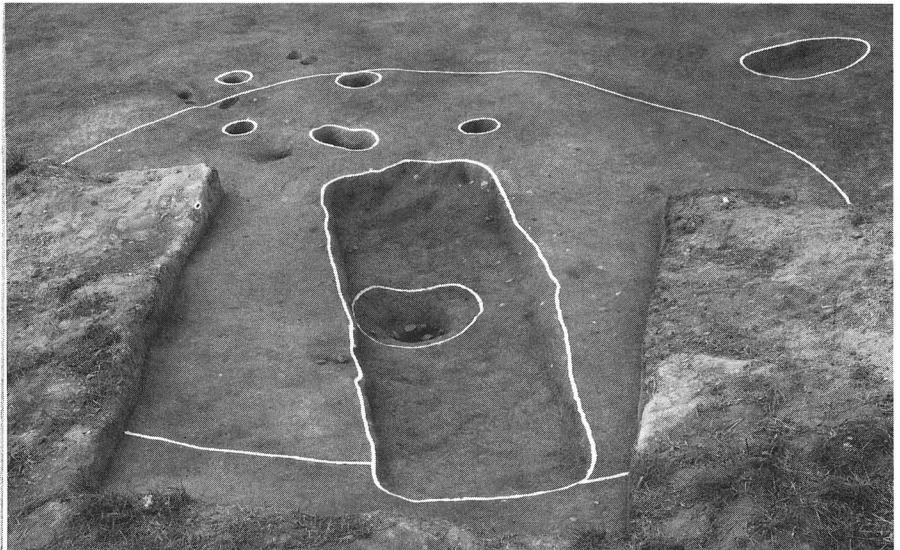
fig. 124 S B02
遺物出土狀況



fig. 125 S B02
(手前)
と S B01



fig. 126 S B03、
S K02



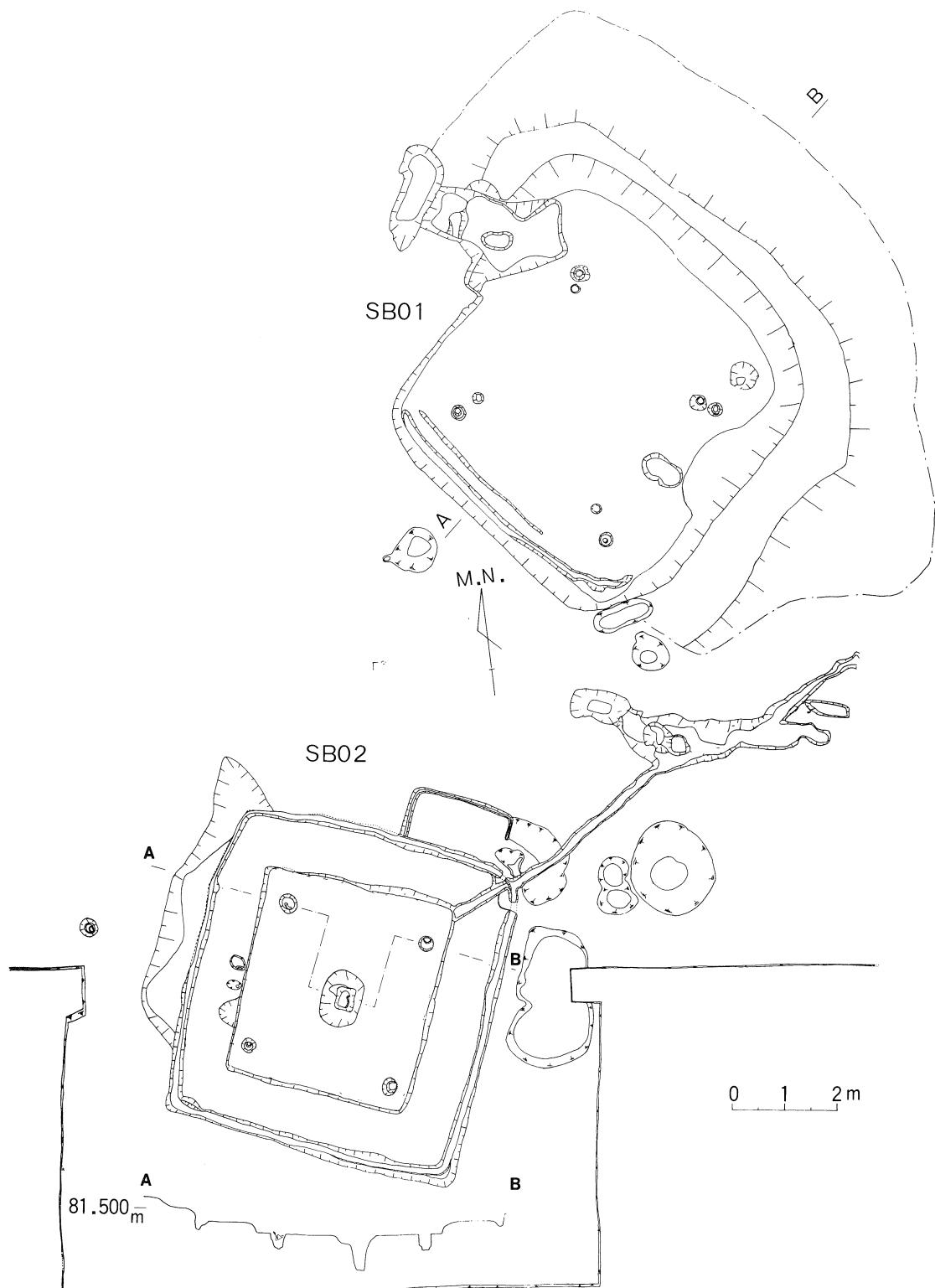


fig. 127 S B01、S B02実測図

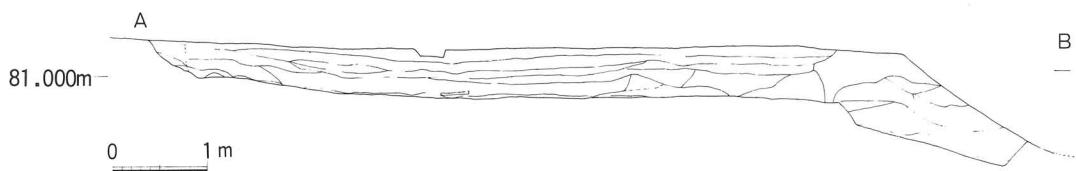


fig. 128 SB01土層堆積状況実測図

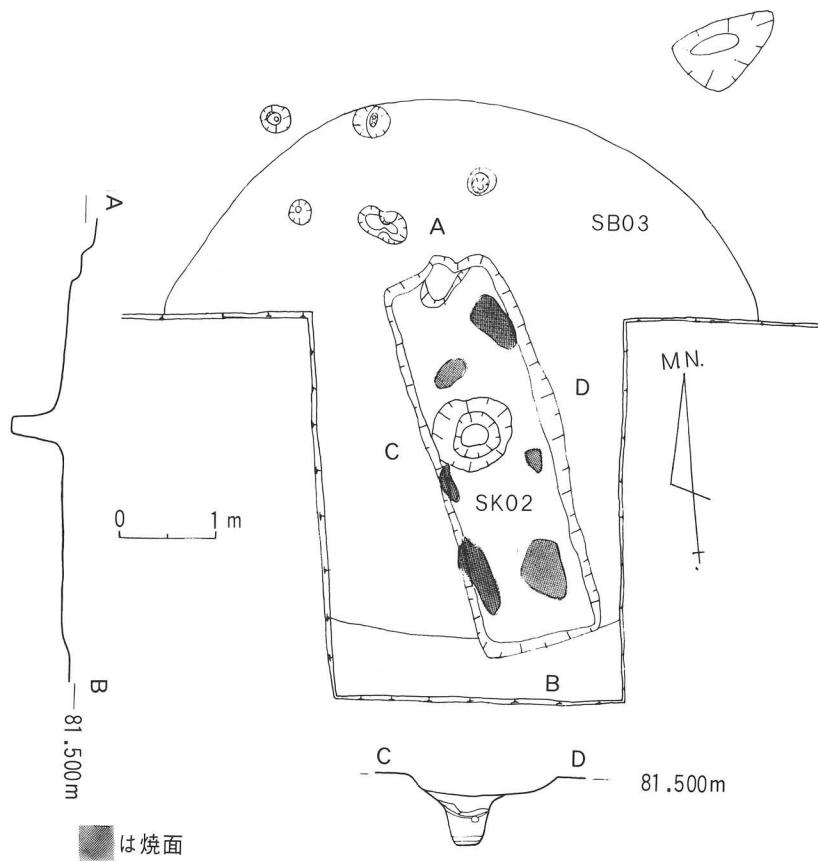


fig. 129 SB03、SK02実測図

SK01 SK01は尾根の中央部で検出された長さ2.3m、幅1.1m、深さ3cmの土壙である。短辺の一方に出部があり、土壙内は炭で充満しており、床面は焼けていた。炭にまじって弥生土器片が出土した。

SK02 SK02は長さ4.1m、幅1.3m、深さ0.2mでSK01同様床面は焼けており、内部には炭がつまっていた。炭の中から弥生土器片が出土した。

5. 出土遺物 今回の調査では、弥生土器と若干の石製品が出土している。

弥生土器 弥生土器は弥生時代後期のもので、S B01埋土、S B01南東側斜面、S B01北東壁中、S B02埋土、S B03中央ピット、S X02から出土しているが、特にS B02からは住居内に投棄されたと考えられる多量の土器片が出土している。器種には壺、甕、高坏、鉢、器台、甑などがみられる。

S B01出土の弥生土器は、胎土も良好で色調は明褐色を呈する壺、甕、高坏、鉢などの器種がみられ、弥生時代後期前半～後半にかけての時期の遺物が主流を占めている。

一方S B02出土弥生土器の胎土は、厚手で砂粒を比較的多く含み、色調は暗赤褐色を呈する。壺、甕、高坏、甑などの器種が見られ、弥生時代後期後半の時期に属する。

S B03出土弥生土器には、広口壺、無頸壺、甕などが見られる。弥生時代後期前半～後半にかけての時期と考えられる。

石製品 主としてS B01・S B02から出土している。S B01表土から、叩き石（閃緑岩製、長径9cm、短径6cm）1点、同埋土から石鏃（サヌカイト製）1点、砥石（砂岩製長さ12cm、幅3cm）1点、石核（サヌカイト製長さ10.5cm、幅4.5cm）1点出土している。またS B01南東側斜面土器溜りから石鏃（サヌカイト製）3点が出土している。

S B02埋土からは叩き石（閃緑岩製）、砥石（凝灰質砂岩製）、台石（花崗岩製）が出土している。

砥石の存在から鉄の使用は明らかであるが、今回の調査では鉄製品は出土していない。

6. まとめ 東石ヶ谷遺跡の立地する尾根は、南北90m、東西70m程の規模をもつが、今回発見された3棟と、昭和57年度に発見された2棟をあわせて、これまでに5棟の弥生時代後期の住居址が発見されている。しかし、まだ未調査の部分が約2,500m²あり、それを考慮すると、この尾根上に存在する住居址の数はさらに増加するものと考えられる。

これまでの調査によれば、尾根の南側には円形住居址、北側には方形住居址が存在するという傾向が認められる。

円形住居址は弥生時代後期前半代、方形住居址は後期後半代に築造されたと考えられる。中でもS B02は、昭和48年度に大歳山遺跡で発見された住居址と規模や高床部を持つ構造の点でよく似通っている。また入口と思われる突出部を持つという点では播磨・長越遺跡住居址6（庄内期）（註1）、播磨大中遺跡4号・6号・8号の各住居址や第1土器群下部弥生住居址と類似している（註2）。特に播磨大中遺跡第1土器群下部住居址では、廃棄された住居址の窪みに多量

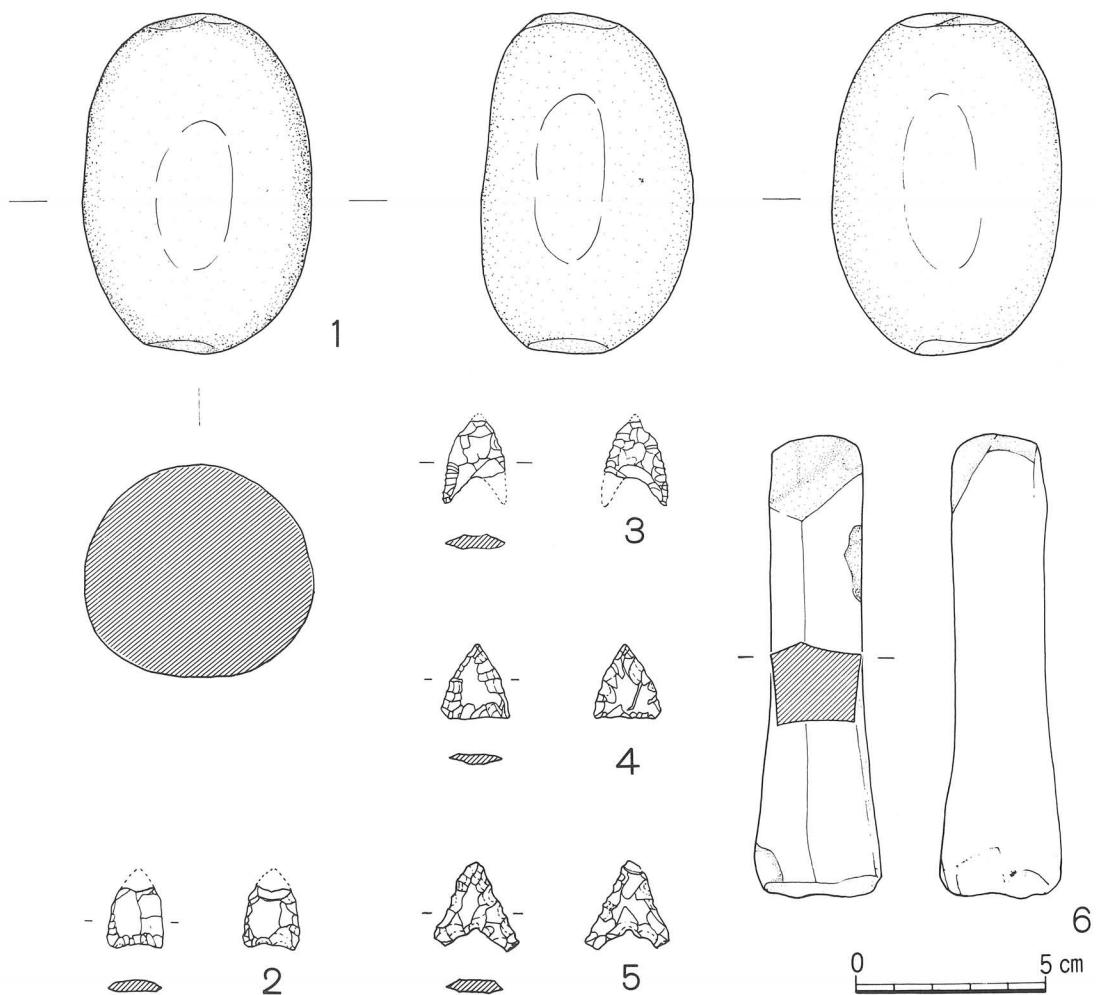


fig. 130 石器実測図

1. 叩き石 2~5. 石鎌、6. 砥石 (1 包含層、2~6 SB01)

の土器が投棄された状態で検出されており、本遺跡のSB02検出状況と極めて類似している。

これらの例をみると、高床部と入口と考えられる張り出し部をもつ住居址が盛んに築かれるのは弥生時代後期後半から庄内式の時期にかけてのことと考えられる。

同じく3世紀代に形成された東石ヶ谷遺跡も播磨の他の集落との有機的な関連の下で存在していたと考えられる。

(註1) 兵庫県教育委員会「播磨・長越遺跡」1978。

(註2) 兵庫県加古郡播磨町教育委員会「播磨大中」1965。

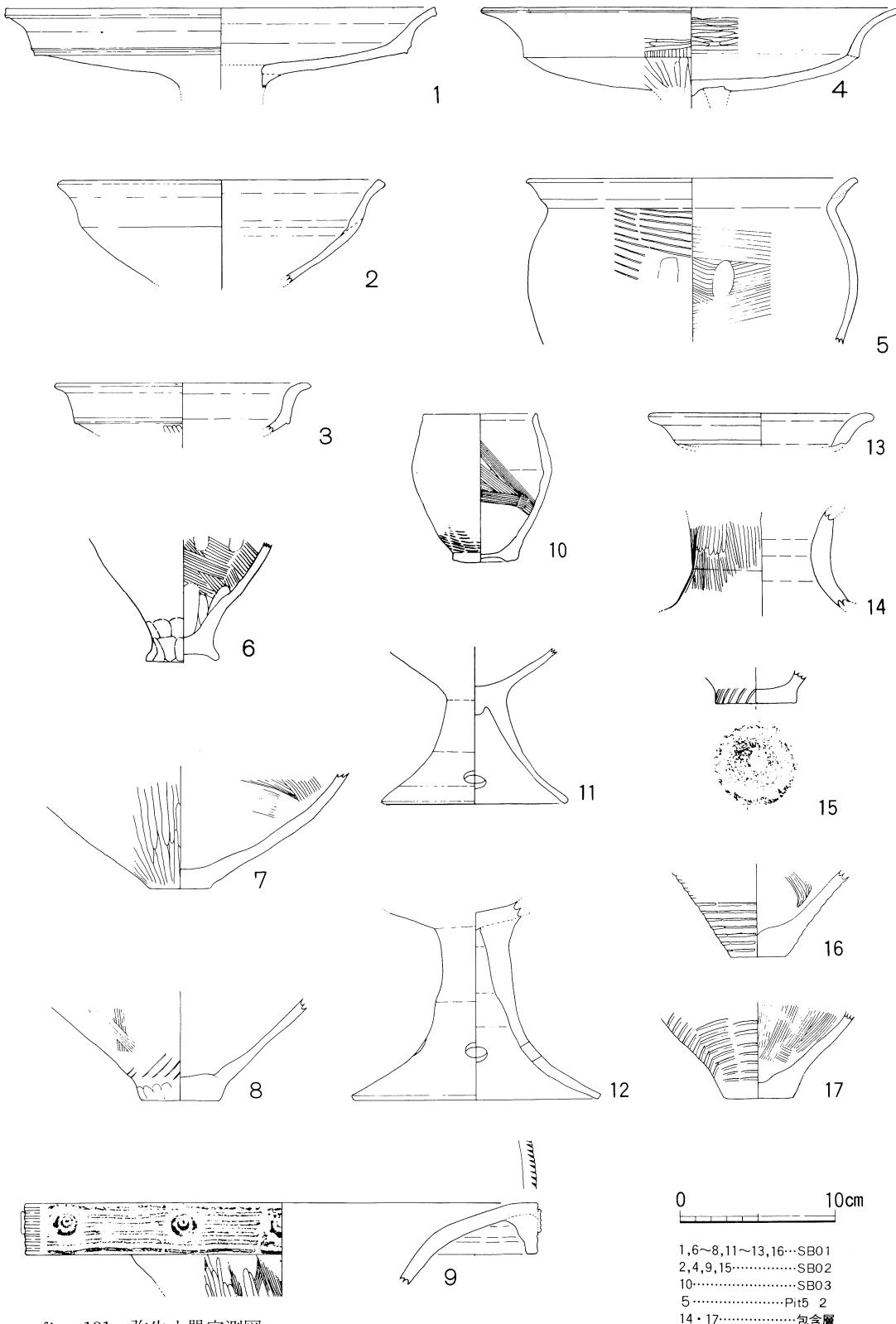


fig. 131 弥生土器実測図

しせき ごしきづか こふん こつぼ こふん
12. 史跡五色塚古墳・小壺古墳

1. 位置と歴史的環境 五色塚古墳は、大正10年3月に国の史跡に指定され、昭和40年から10年の歳月をかけて復元整備され、現在に至っている。地理的にみれば、五色塚古墳は、大阪湾から播磨灘へかけての海岸線が最も南へ突出した垂水丘陵南麓の台地突端に築かれている。墳丘長は194mで、4世紀末から5世紀前半に築造されたと考えられる兵庫県下最大の前方後円墳である。

五色塚古墳と接して西側に小壺古墳が存在するが、その西方約500mのところには、かつて歌敷山東古墳・西古墳が存在していた。いずれも埴輪をもつ直径20~25mの円墳で粘土櫛に割竹形木棺を収めていた。さらに西方300mの舞子浜からは、埴輪円筒棺が2基発見されている。このように五色塚古墳と時期的に近接する遺跡は、海岸沿いに存在するという特徴がみられる。

一方、北西2kmのところには、大歳山遺跡があり、前期古墳や6世紀前半代の前方後円墳の存在が知られている。その東の舞子丘陵上には、6世紀後半代の古墳が多数存在している。

2. 調査概要 五色塚古墳の北側に位置する神戸市営北五色山・西五色山住宅の建て替えに先立ち、五色塚古墳の外縁施設を確認するため、昭和58年3月試掘調査を実施したところ、小壺古墳の周濠をはじめ、五色塚古墳の外堤上の埴輪や周溝が検出された。従って、試掘調査の結果をもとに小壺古墳の周濠の規模や五色塚古墳外堤埴輪列の有無、五色塚古墳周溝の形状や性格などを究明する目的で、調

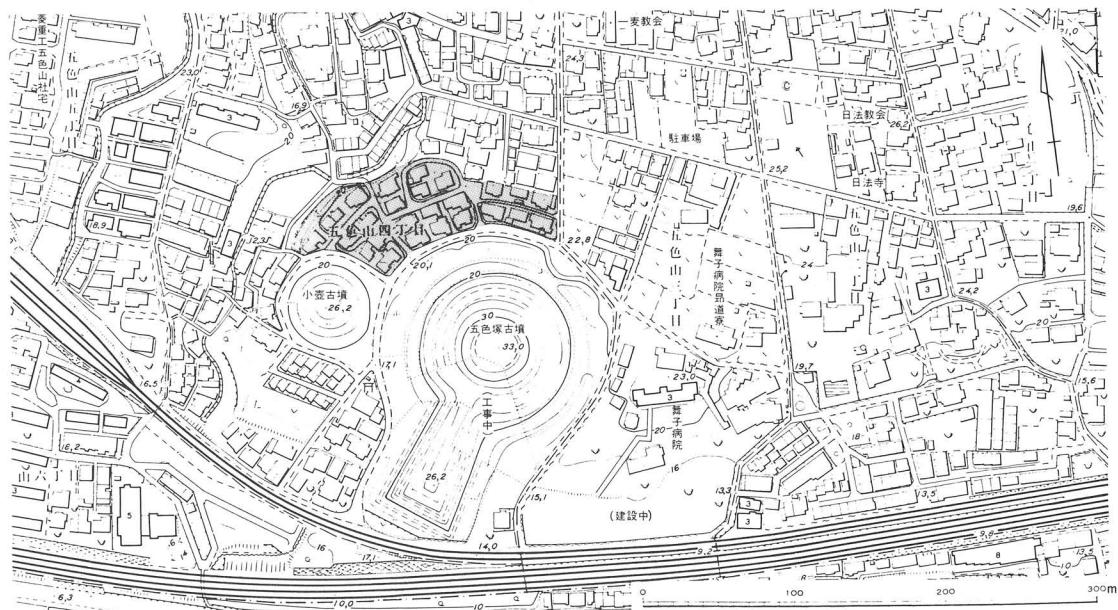


fig. 132 調査地位置図

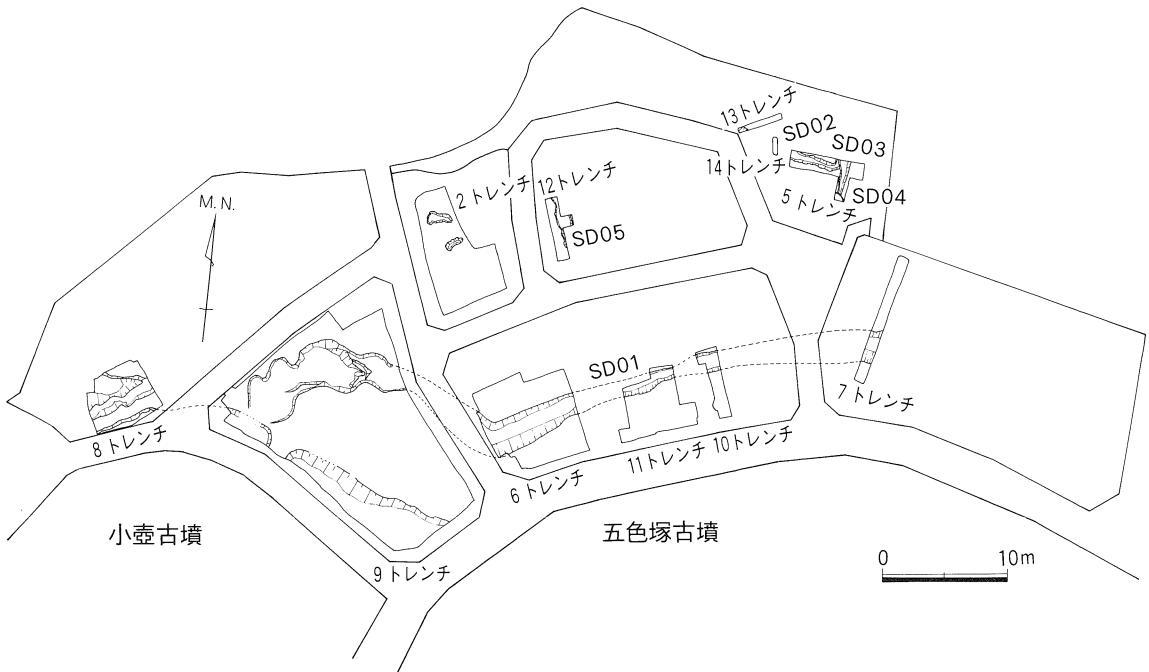


fig. 133 トレンチ配置図

査を実施することになった。調査は基本的にトレンチ調査とし、調査対象地内に14本のトレンチを設定して実施した。

五色塚古墳 五色塚古墳後円部周濠に沿って巡る溝で、幅2~5.5m、深さ0.2~0.55mを周溝(SD01)測る。溝は、7トレンチより西へ向かって、徐々に傾斜し、6トレンチから9トレンチの間で北西に折れまがり、小壺古墳の周濠にとりつくと考えられる。溝内からは、意図的に破碎されたと考えられる須恵器甕(10トレンチ)や土師器(6トレンチ)、結晶片岩(6,9トレンチ)、埴輪(6,7トレンチ)、中世陶器(6トレンチ)が出土した。

6トレンチでは、溝底に径0.8m、深さ0.15mの炭の入った円形の土壙が存在した。土壙内から土師器小片が出土している。溝底に0.2~0.3mの土が堆積した後(6世紀後半以降)、結晶片岩が敷かれている。結晶片岩は、溝内の長さ10m、幅1.5mの範囲に敷かれているが、トレンチ中央より西側の密度が高い。なお、結晶片岩にまじって川原石もみられる。

五色塚古墳の周濠との距離は、8~12mである。濠の外側に埴輪が立っていたと考えられ、埴輪の小片や埴輪の抜き取り穴と思われる径0.6mのピットが2箇所検出されている。



fig. 134 6 トレンチ、SD01内結晶片岩実測図

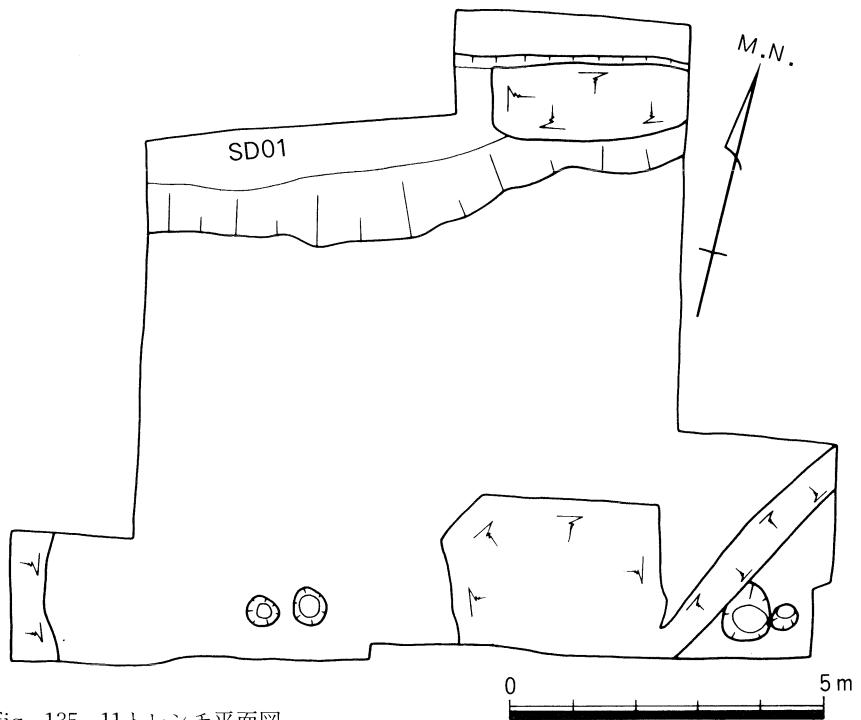


fig. 135 11 トレンチ平面図

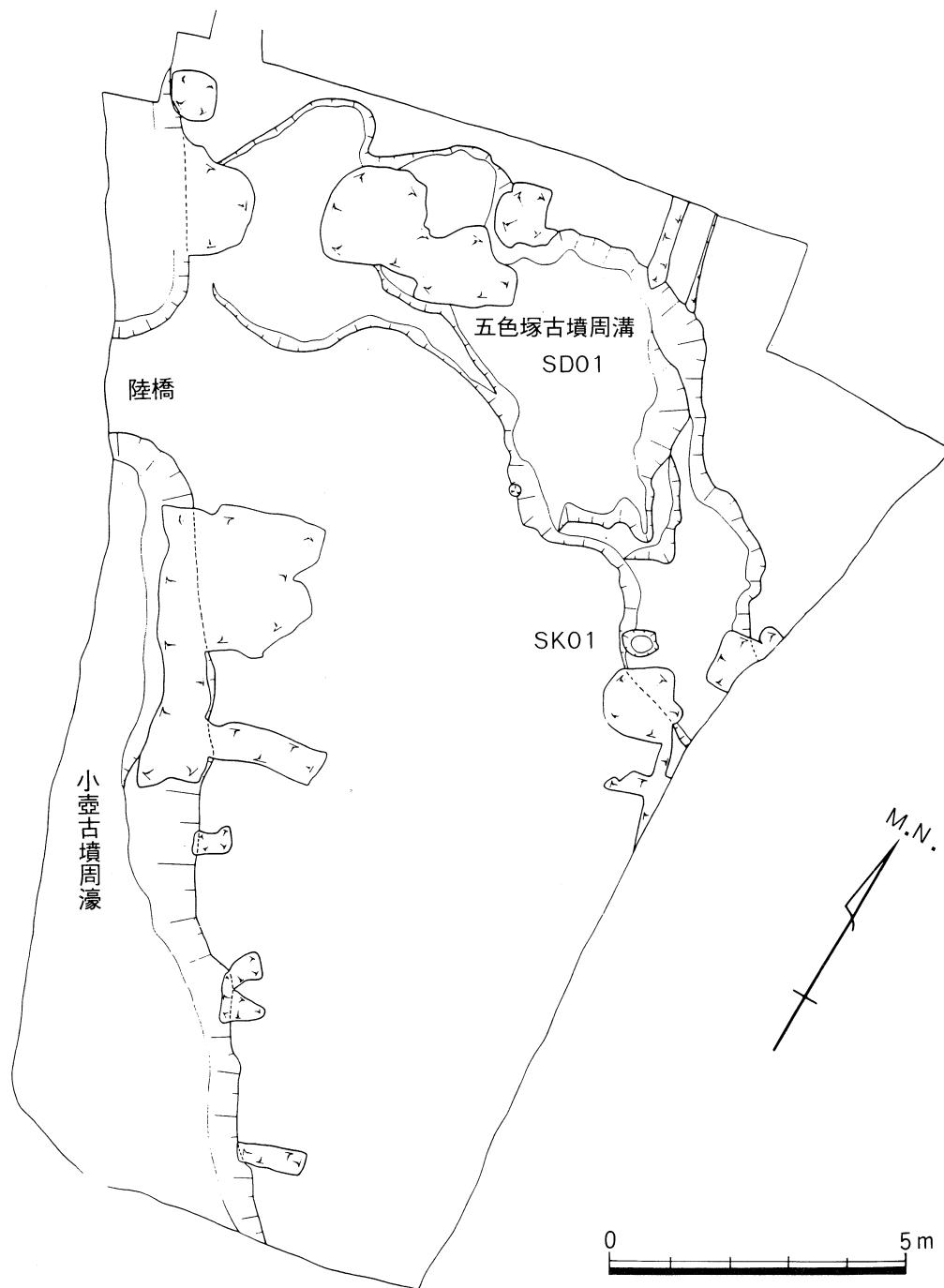


fig. 136 9 トレンチ平面図

fig. 137 S D01、
6 トレンチ



fig. 138 S D01と
埴輪抜き取り痕
11 トレンチ



fig. 139 S D01、
7 トレンチ



小壺古墳 小壺古墳の周濠は、古墳の北側から東側にかけてやや折れ曲がり、さらに東へ行くに従って外へ開き、五色塚古墳の周濠と接続していると考えられる。濠底は、西から東へ緩やかに傾斜している。濠底東端の標高17.2mであり、五色塚古墳濠底との比高差は2mである。

周濠内には陸橋が存在している。陸橋は撥形を呈し、礫層の地山を掘り残し、南側は、一部盛土してつくられている。上部幅は外堤側で5.5m、古墳側で3m、底部幅は外堤側6.5m、古墳側4.5m、高さ0.8mである。

周濠は、北側で幅2m（検出幅）、深さ1.1m、東側で幅10m（検出幅）、深さ1.5mを測る。

周濠内からは、埴輪や須恵器片、結晶片岩などが出土している。

ピット 2トレンチ南端付近で、ピットが3箇所検出された。直径0.3m、深さ0.2mで、層位的にみれば、五色塚古墳と関連する時期の遺溝と考えられるが、建物のような施設にはならず、性格は不明である。

fig. 140 小壺古墳
周濠、陸橋



fig. 141 陸橋



土 壤

S K01

9トレンチ内を大きく弧を描きながら、小壺古墳周濠へとりつくS D01が埋まつた後でつくられた楕円形の土壙である。規模は長径1.2m、短径0.9m、深さ0.2mで、壁面が火熱を受けて赤変している。土壙内上層から上半部を欠く平安時代前期の須恵器短頸壺が1点出土した。

S K02・03

2トレンチ北半に存在する。東西に長い不定形の土壙である。S K02は長さ3m、幅1m、深さ0.3m。S K03は長さ3.5m、幅1.5m、深さ0.15mで、いずれも中に焼土を含んでいた。形状が類似することから、同種の遺溝と考えられるが、時期・性格は不明である。

溝

5トレンチからは、3条の溝（S D02～04）が検出された。

S D02

幅1.4m、深さ0.1mの東西にのびる溝である（検出長7m）。東端で北へ折れ、S D03によって切られている。溝内からは、須恵器壊・高壊の破片が出土している。時期は6世紀後半である。

S D03

幅1.6m、深さ0.15mの南北にのびる溝（検出長5.5m）で、南端をS D04によって切られている。溝内からは、須恵器片口鉢破片が出土しており、時期は12世紀と考えられる。

S D04

幅1m以上、深さ0.1mの東西溝と考えられる。

S D05

12トレンチで検出された幅2.2m、深さ0.15mの南北にのびる溝（検出長8m）である。溝内からは、土師器小片が出土している。

3. 出土遺物

A. 増輪

増輪は、五色塚古墳の濠の外側や周溝、小壺古墳周濠から出土している。いずれも小破片のみで出土量は少ない。ただし、五色塚古墳の濠の外側からは、原位置を保つ増輪が1点出土している。出土増輪には、円筒増輪と朝顔形増輪がみられる。円筒増輪は復元すると直径約30cm、第1段凸帯までの高さが約30cmの鰐をもつタイプのもので、外面には、縦方向のハケ目を施している。

須恵質の増輪は1点も含まれていない。

B. 須恵器

須恵器は、S D01、S D02、S D03、S K01と小壺古墳周濠から出土している。S D01から出土した須恵器は、胴部内部には平行叩きの後、カキ目を施し、内面には青海波文を残す。6世紀後半の甕である。

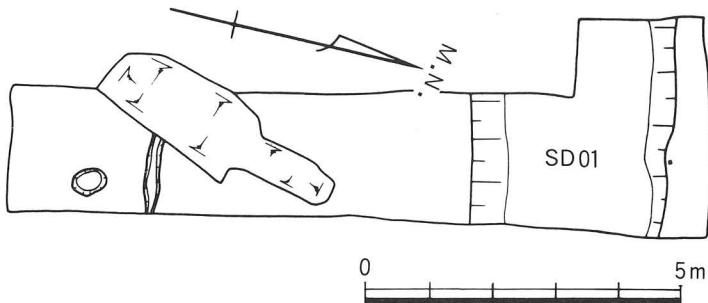
なお、S D01内からは、須恵器片口鉢片も出土している。

S D02からは、6世紀初頭（TK47）の高壊脚部片と6世紀後半（TK209）の壊身片、それにS D01出土甕と接合する甕破片が出土している。

S D03からは、須恵器片口鉢片が出土している。S D01出土のものと同時期と考えられる。

小壺古墳周濠からは、甕と短頸壺の破片が出土している。時期は6世紀後半

fig. 142 10トレンチ平面図

fig. 143 10トレンチ
SD 01内須恵器出土状況

である。

S K 01からは、付け高台をもつ短頸壺の底部が出土している。時期は9世紀と考えられる。

C. 結晶片岩 五色塚古墳周溝 S D01及び小壺古墳周濠から、和歌山県紀ノ川から、徳島県吉野川に至る構造帯で産出したと思われる変成岩が出土した。特に6トレンチからは130点を超す数の変成岩が出土している。種類は紅簾片岩、絹雲母片岩、緑泥片岩などである。

D. その他 6トレンチ S D01上層から、中世土鍋の破片が出土している。

4.まとめ 今回の調査によって明らかになったことを列記してまとめとしたい。

- (1) 五色塚古墳の外堤上には、埴輪が樹立されていたと考えられる。ただし、埴輪片の出土状況から墳丘小段のように密に並べられていたとは考えられない。埴輪の位置を外堤の肩とすれば、五色塚古墳の周濠幅は、後円部背後で約20mになると推定される。
- (2) 五色塚古墳の濠の外側に周溝が巡らされていたことが明らかになった。この周溝は、6世紀後半まで存続していたと考えられる。
- (3) 五色塚古墳と小壺古墳は、小壺古墳の東側で周濠を共有していることが判明した。
- (4) 五色塚古墳と小壺古墳の築造時期は、小壺古墳が五色塚古墳と同時期か、または後に築造されたと考えられる。

え げ やま に ほんまつ こ ぶん
13. 会下山二本松古墳

1. 調査経過 会下山二本松古墳は、昭和2年10月に中層配水池建築工事に際し、その存在が知られ埋葬施設の発掘調査が行われた。

内部にベンガラを塗布した竪穴式石室は既に南部を破壊されていたが、現長5.80m、最大幅1.13m、高さ1.08mを測り、内部の粘土棺床上の北半部より銅鏡1、滑石製琴柱形石製品1、直刀3以上、剣身2、刀子2以上、鉄鎌2、鉄斧2等が少量の朱と共に検出された。

墳丘については、直径約20m内外で、段築、周濠、葺石ともに存在しないとされた。封土は竪穴式石室底面より約0.3m北方に、ほぼ水平に一線を画して上下の土色が異なることと、上層が下層に比して軟弱であることから、上層を盛土とし、その高さは約2mと推定された。

今回、配水池改築工事に伴い、墳丘残存の有無を確認するため配水池の周囲にトレーニングを設け、調査を行った。

2. 調査結果 配水池北東部に設定したトレーニングでは、表土下1.4~1.6mの盛土の直下は地山面となっており、古墳の墳丘は検出されなかった。

配水池南西部に入れたトレーニングでは、墳丘下縁に巡る葺石の基石と考えられる石列が発掘され、この性格を明確にするため発掘区域を拡張した。その結果、

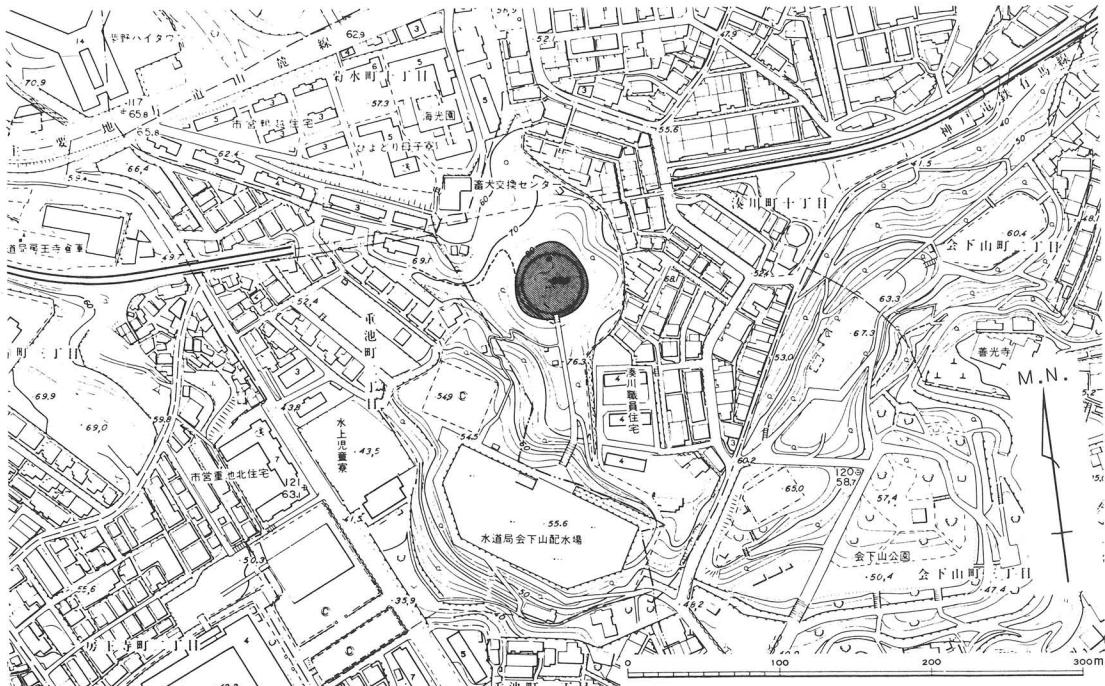


fig. 144 位置図

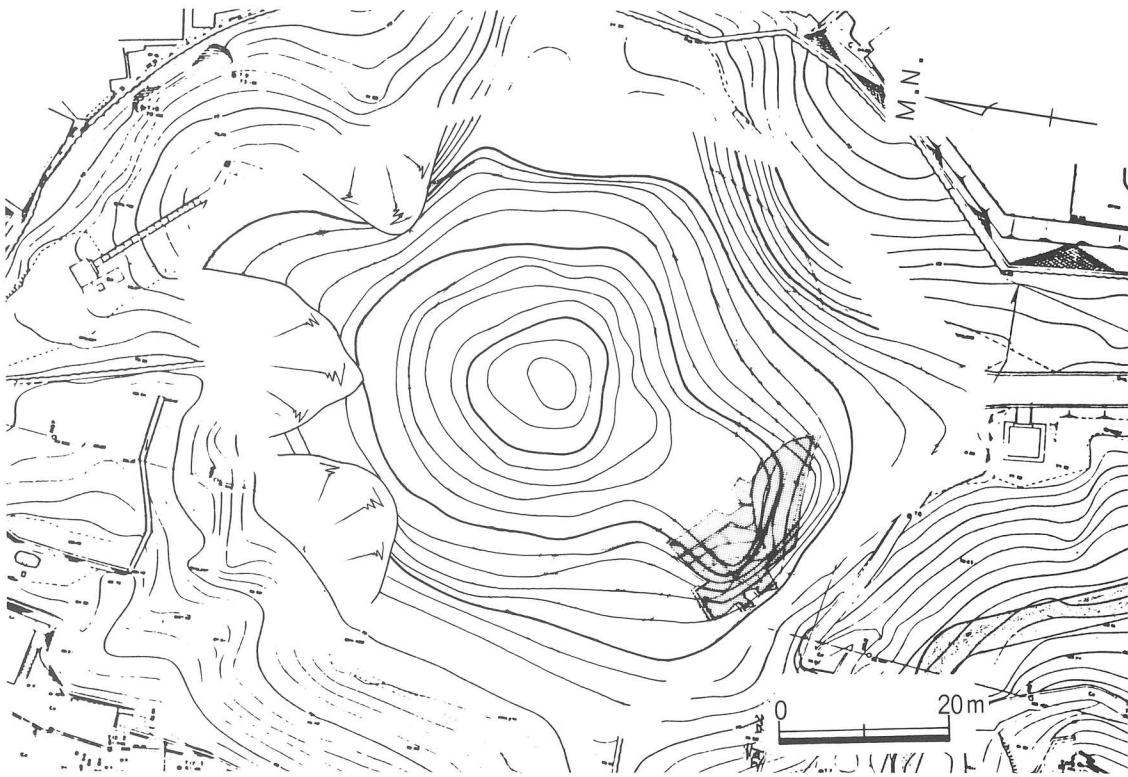


fig. 145 地形測量図（墳丘は昭和2年度の測量）

石列より約2m西の地点で墳丘の段築部と葺石と考えられる遺構を検出した。これより墳丘の一部が残存していることが明らかとなり、さらに葺石の基石が直線的にのびることにより、残存部は前方部の一部と判明した。また墳丘残存範囲と墳丘の構築法を明らかにするため、北西～南東方向のたちわりを行った。

a. 墳丘盛土 墳丘北部は配水池及び配・排水管埋置により、既に破壊されていた。南部に

の状態 関しても調査前より平坦面を成しており、削平を受けていた。墳丘は、この結果、北西～南東方向約18m、北東～南西方向約7mの範囲に遺存していた。墳丘は全て盛土により構築されており、残存高は約1.8mを測る。

盛土は、西から東へ下がる地山面上に礫を多く含む硬い灰白色の凝灰質砂層が約0.2mの厚さで先ず置かれ、この直上より積み上げられている。この層は葺石が残る墳丘部の北側断面でも観察され、東端より西基石に至るまで一面にあるものと思われる。また、『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯の図版第1として所載する後円部墳丘東西断面の写真でも、石室底面より若干上方で東西にほぼ直線的に走る白色に写る土層が確認でき、灰白色の凝灰質砂層が後円部にも存在した可能性がある。この層は、墳丘を構築する以前に施されたものと考えられ、さらに今回の工事に伴う配水池周囲のボーリング調査でこの層が検出されなかったことは、同層が古墳築造に伴うものであることを裏づけ

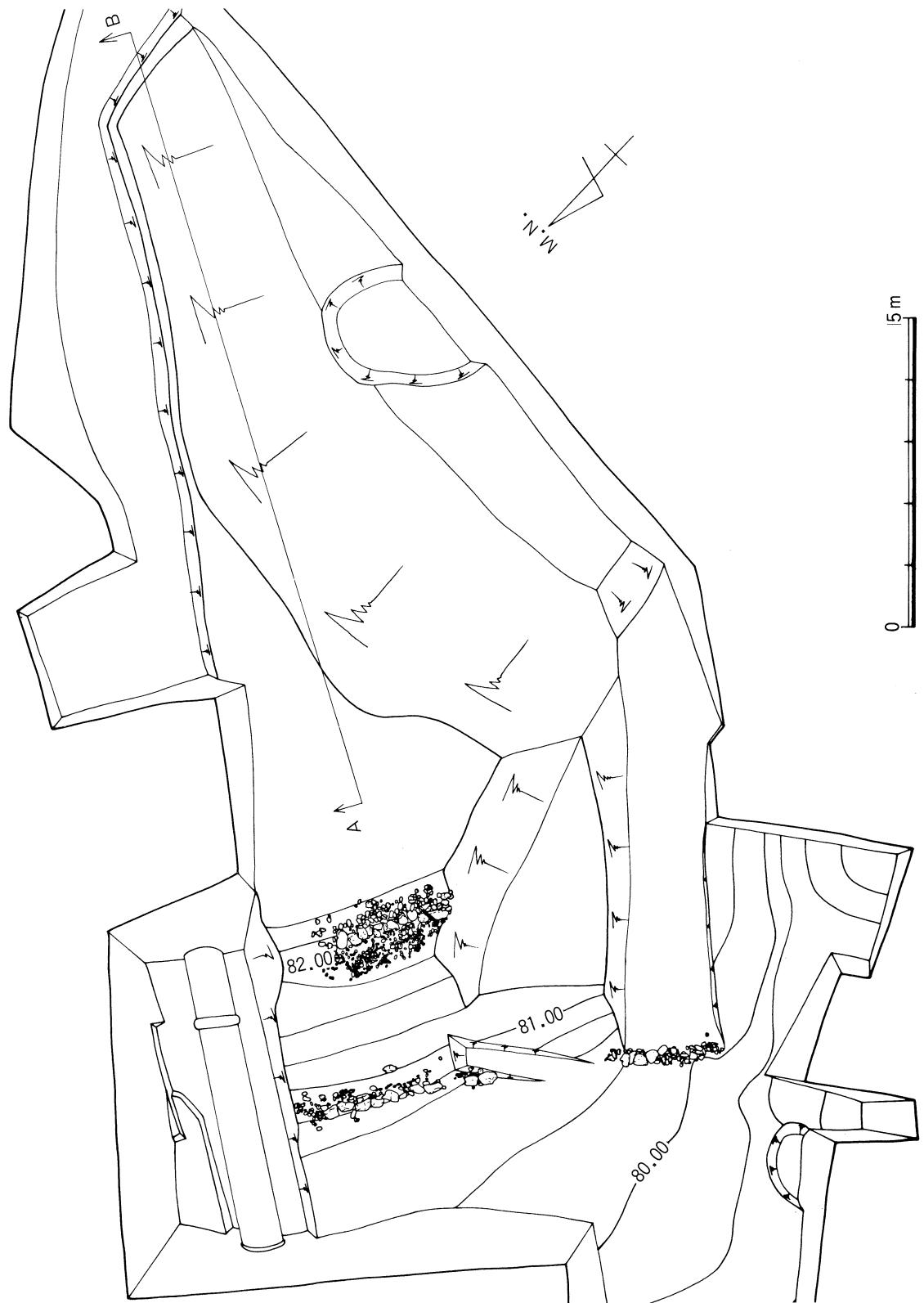


fig. 146 調査区平面図

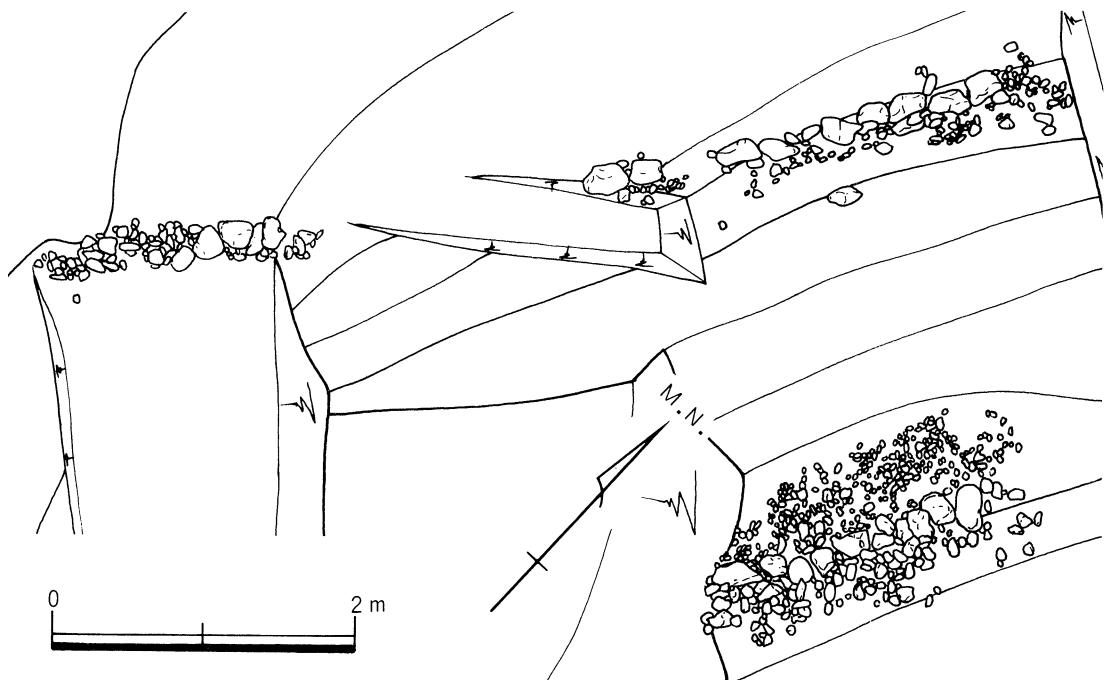


fig. 147 葦石平面図

ている。これと同様の盛土の構築法は、東灘区御影町処女塚古墳、垂水区五色山五色塚古墳でも確認されている。

盛土は、墳丘表面側が高く内側に向かって低くなるように積み上げ、中央附近に残った凹部を最後に埋める方法を探っている。前方部断面の観察では、凹部を挟んでその東西では盛土の方法が異なり、西側では土の小ブロックを細かく積んでいくのに対し、東側では1ブロックがそれに比してかなり大きい。このような中心部に内傾する盛土の方法は、五色塚古墳や豊中市大塚古墳、高槻市弁天山C1号墳でも確認されている。

b. 段築 前方部は、段築部が検出されたことより少なくとも二段築成であることがわかった。下段の傾斜角は約 27° 、上段は約 35° を測る。墳丘下縁の基石より上段下縁を巡るテラスまでの高さは約1.0mである。テラスの幅は約0.5mを測る。

c. 葦石 下段の葦石は殆ど全てが転落しており、基石の上部にわずかに残る程度で、裏ごめ土の状態も不明である。墳丘下縁には長さ0.2~0.3m、厚さ0.15m前後の河原石を長軸と平行させ基石として並べている。基石はその据置に際し、何らの作業も施さず、地山面上に直接置いている。基石列の検出長は約7mで、その方向はほぼN $36^{\circ}30' E$ を示す。

上段の葦石は長さ約2.4m、幅約1.0mの範囲で検出された。上段下縁にも下段同様基石が置かれている。使用する石は同じく河原石で、ほぼ同大だが、上段のそれは長軸を下縁方向に直角の位置に配するものが多い。基石の方向はほ

fig. 148 墳丘と上段、
下段の葺石



fig. 149 下段葺石列



fig. 150 上段葺石
と小段



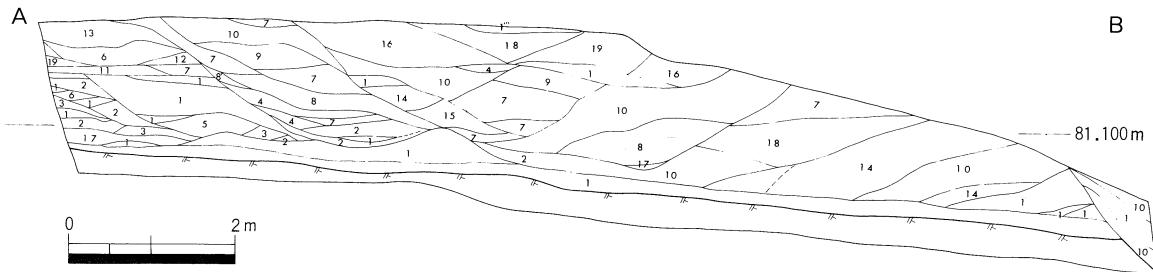


fig. 151 墳丘土層断面図

ぼN30° Eを示す。

葺石は長さ約10cm、厚さ約5cmの河原石を使用する。残存状態が悪く、細部は明らかでないが、一部小口積みと思われる個所がある。

下縁を巡るテラス面にも径約5～10cm大的河原石を敷いている。この様なテラス面に小石敷を施すものは、神戸市域では確認されていないが、豊中市大石塚古墳にその例がある。

d. 遺物 墳丘残存部東端の流土中より円筒埴輪の基底部片が1点出土した。小片かつ磨滅が激しいため、直徑及び調整等は不明である。

3.まとめ 会下山二本松古墳は昭和2年度の調査以来、直径約20mの円墳であるとされていた。しかし今回の発掘調査により前方部が検出され、前方後円墳であることが明らかとなった。さらに段築、葺石が検出され、封土の構築法も明確となった。埴輪はわずか1点が出土したにとどまるが、その存在が確認されたことは重要である。

古墳の規模については、その主要部が既に破壊されていることから確定はできなかった。しかし昭和2年度の工事に際し作成された地形図が、検出した葺石、基石の位置と考えあわせて、墳丘測量図としてある程度信頼をおくものであることがわかり、この図より推定すれば、全長55m前後、後円径35m前後とすることができる。また前方部幅も残存部から推して約20m前後であると判断される。前方部端も地形より推考すれば、検出された基石端より大きく南西へ出るとは思われない。墳丘主軸方向も確定は出来ないが、ほぼN27° Eを示すものと思われる。

以上より、この古墳は南北にのびる丘陵々線に平行に主軸を置き、これを利用して前方部を築造するものではなく、前方部を南西の谷部に向けて作られたものであることがわかった。盛土のみによる前方部は、これによるものと考えられる。丘陵上に位置する前期古墳が築造に際し、丘陵を最大限に利用する場合が多いことと比較すれば、当古墳はやや異例のものと言える。

尚、発掘された前方部の断面については、土層剥ぎ取り、写真測量を行った。

かぐらいせき
14. 神楽遺跡

1. はじめに 神楽遺跡は神戸市長田区神楽町に所在しており、新湊川（苅藻川）の下流西岸に位置している。この付近は六甲山系を水源として北から南へと流れる妙法寺川、苅藻川などの河川によって形成された扇状地である。遺跡はこの扇状地の中の標高約4mの微高地上に立地している。

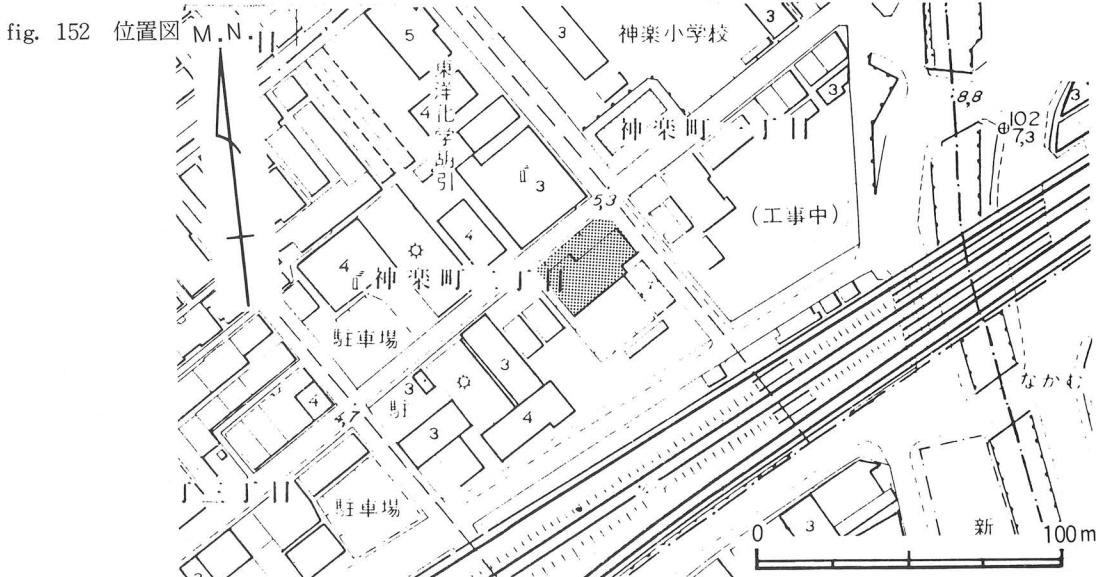
神楽遺跡周辺は、はやくから市街地化され、遺跡の存在については明らかでなかったが、ここ数年来、地下鉄建設や都市再開発などの工事に伴い、遺跡の発見が相次ぎ、発掘調査が実施されるようになった。

2. 調査経過 神楽遺跡は、昭和54年に神戸市高速鉄道（地下鉄）建設工事に先立つ遺跡確認調査で発見された。

この地下鉄建設工事に伴う発掘調査では、弥生時代後期の溝1条、平安時代中期の溝1条、古墳時代中期と平安時代中期の土壙・ピットを多数検出した。また平安時代の溝からは、須恵器・土師器・黒色土器の他、緑釉陶器、灰釉陶器などの施釉陶器が出土し、これらの土器の中には「東福」と書かれた墨書き土器が数点あった。

昭和58年には神戸市立神楽保育所の改築工事に先立ち、昭和54年度調査区の北隣の約400m²を対象に発掘調査を実施した。

この調査で発見された遺構は、弥生時代の溝1条、古墳時代後期の竪穴住居址5棟、溝2条、土壙9か所、平安時代の溝1条の他、古墳時代後期及び平安時代のピットを多数検出した。



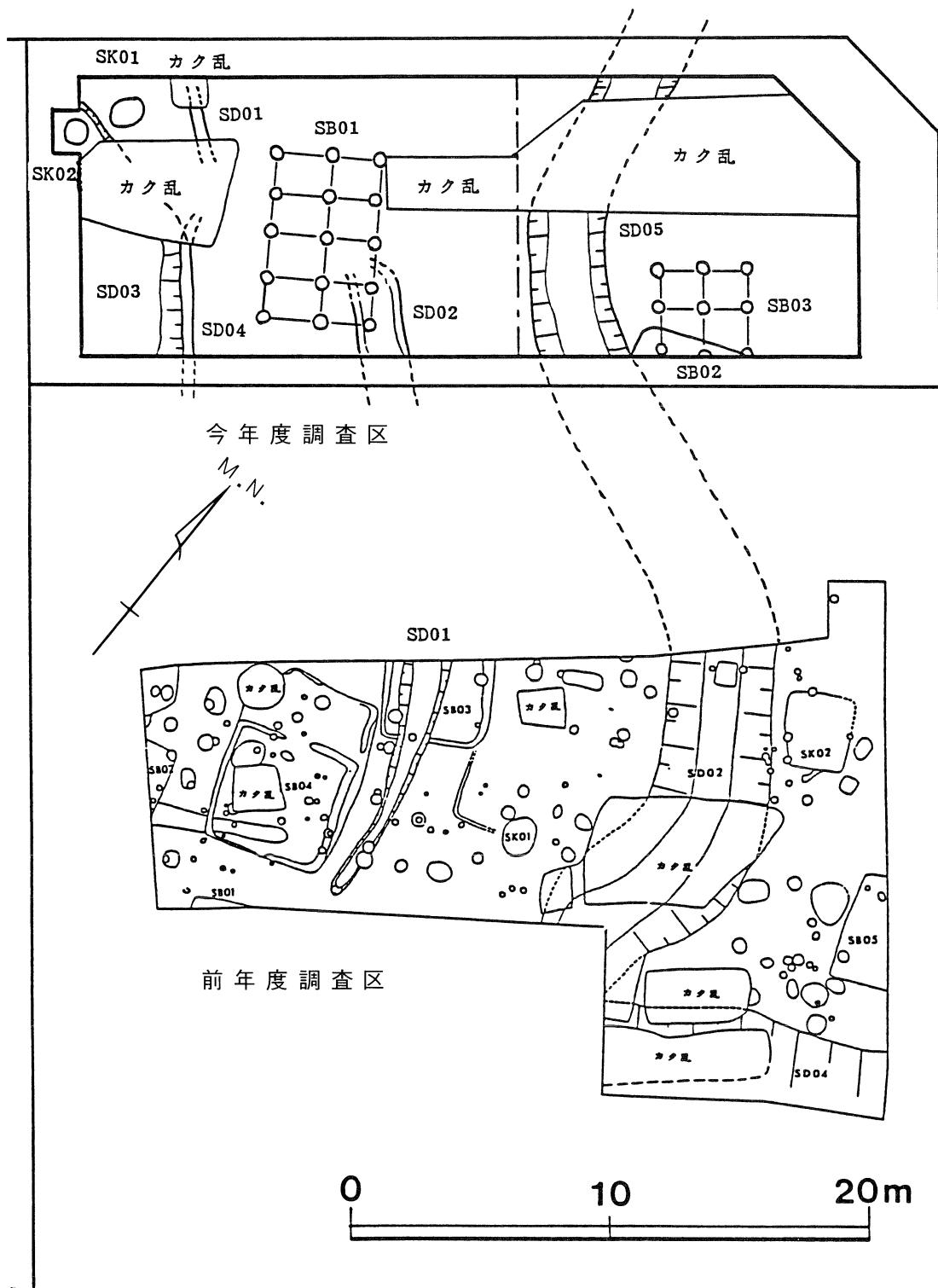


fig. 153 検出遺構平面図

今年度は、前年度調査区の北側、南北11m、東西30mの約330m²について発掘調査を実施した。

3. 調査概要

a. 基本層序 今年度調査区の基本層序は、第Ⅰ層現代盛土・第Ⅱ層旧耕土・第Ⅲ層旧床土・第Ⅳ層灰褐色粘質土・第Ⅴ層灰茶褐色粘質土・第Ⅵ層暗褐色粘質土・第Ⅶ層黒褐色粘質土・第Ⅷ層淡灰褐色シルト・第Ⅸ層茶褐色シルト・第Ⅹ層淡褐色シルト（地山）となっている。

第Ⅵ層は、5世紀後半～8世紀ごろの須恵器、土師器等の遺物包含層で、第Ⅶ層は5世紀前半ごろの土師器等の遺物包含層である。また、第Ⅸ層は、若干の土師器を包含するが、第Ⅹ層はほとんど遺物を包含しない。

土層は、南北方向にはほぼ水平に堆積している。

東西方向では、調査区西側の方が若干層位が低くなり、第Ⅶ層の上に5世紀後半ごろの遺物包含層である第Ⅺ層黒色粘質土が堆積している。

b. 検出遺構 今回の調査で検出された遺構は、弥生時代中期後半～後期の溝1条、古墳時代中期後半～中期末の掘立柱建物1棟・竪穴住居址1棟・溝1条・土壙2基・古墳時代後期以降の掘立柱建物1棟・溝7条・土壙16基・ピット多数などである。

(1) 弥生時代中期後半～後期の遺構

S D05 調査区の中央よりやや東側で検出された南北方向に流れる自然流路で、全長11.4m以上、幅2.5～3.5m、深さ0.5～0.7mを測る。弥生時代中期後半～後期の壺・甕・高壺・鉢や結晶片岩製の紡錘車が出土している。

(2) 古墳時代中期後半～中期末（5世紀後半～5世紀末）の遺構

S B01 調査区西側で検出された南北6.9m以上、東西4.2mを測る4間以上×2間の総柱の掘立柱建物である。柱穴内より須恵器壺・甕・器台・土師器甕・製塩土器・蛸壺形土器の他、韓式系土器片が出土している。

S B02 調査区東側の南端で検出された南北1.8m以上、東西4.4m以上、壁高0.1mを測る方形の竪穴住居址である。周壁溝は検出されなかった。住居址の北西隅において焼土塊が検出され、焼土の中から、須恵器高壺が倒立した状態で出土した。埋土から、須恵器壺・甕・土師器甕・製塩土器などが出土している。

S D03 調査区西端で検出された南北10m以上、東西4.6m以上、深さ0.3～0.6mを測る遺構である。現状では水が流れている形跡はなく、“溝”というよりはむしろ“溜り”または“窪地”であった可能性が高い。特に南側において遺物が集中して出土した。出土遺物は、須恵器壺蓋・壺身・高壺・大甕・甕・大形聰・壺・長頸壺・器台・土師器壺・甕・高壺・甕・製塩土器・蛸壺形土器・手捏ね土器・土錐・滑石製紡錘車・滑石製装身具・韓式系土器片・獸骨などが出土している。

fig. 154
調査区全景
(東から)



fig. 155
S B01全景
(北から)

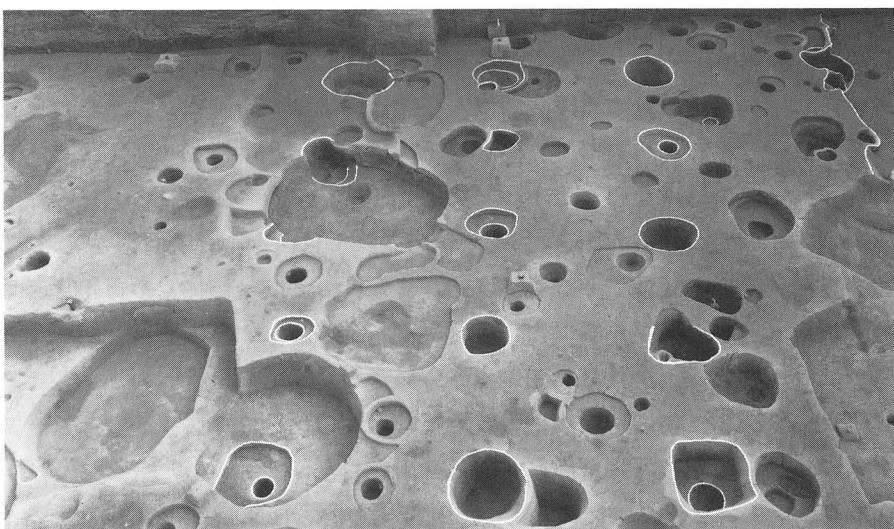


fig. 156
S B02全景
(南から)

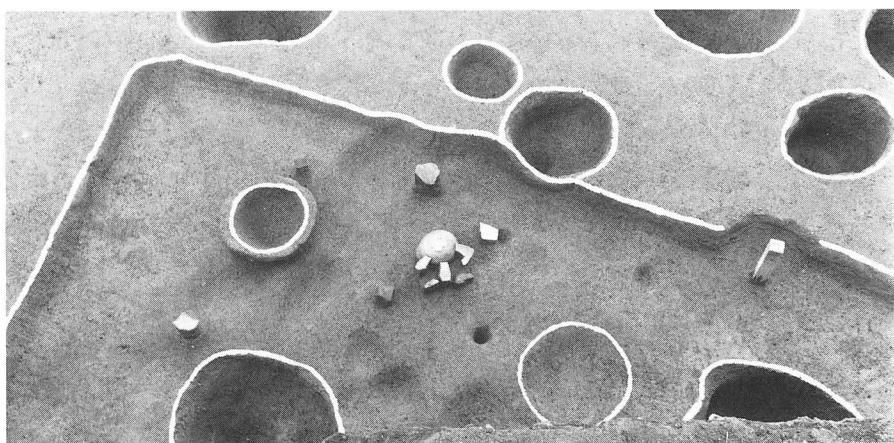
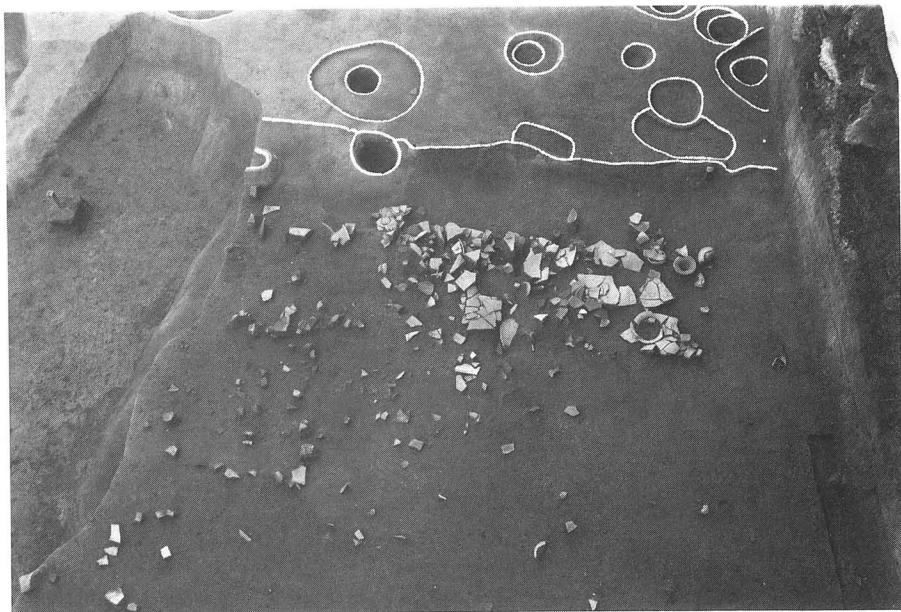


fig. 157
S D03全景
(西から)



- S K01** 調査区北西隅で検出された長径1.8m、短径1.3m、深さ1.11mを測る楕円形の土壙である。土壙内から須恵器大甕が破碎後、投棄された状態で出土した。その他須恵器壺蓋・壺身・高壺・塼・土師器甕・甌・土錘・製塩土器・韓式系土器片などが出土している。
- S K02** S K01の西方0.6mで検出された長径2m、短径1.4m、深さ0.7mを測る楕円形の土壙である。土壙内からS K01と同一個体である須恵器大甕が出土した。その他須恵器壺蓋・壺身・甕・土師器甕・甌・土錘・製塩土器などが出土している。またS K02の上方の包含層から滑石製管玉が出土している。
- (3) 古墳時代後期（6世紀）以降の遺構
- S B03** 調査区南東隅において検出された南北3.6m以上、東西3.8mを測る2間以上×2間の総柱の掘立柱建物である。柱穴内より須恵器壺蓋・壺身・甕・高壺・土師器甕・製塩土器などが出土している。南端の柱穴とS B02の埋土の重複関係から、S B02よりもS B03の方が新しいことが判明した。
- S D01** 調査区北西部で検出された南北方向にのびる溝で全長1.2m以上、幅0.4~0.6m、深さ0.2mを測る。埋土中より須恵器壺・土師器などが出土した。
- S D02** 調査区西侧において検出された南北方向にのびる溝で、全長3.4m以上、幅約2m、深さ0.2mを測る。埋土中より須恵器甕・土師器高壺などが出土している。S B01の南東側の柱穴を切っており、S B01よりも新しいことがわかる。
- S D04** S D03の東側の肩を切って掘り込まれており、全長約4.0m以上、幅0.6m、深さ0.1mを測る。埋土中より須恵器高壺脚部・土師器などが出土した。

fig. 158 S K01、S K02
(西から)



S D 06 調査区南東部で検出された南北方向にのびる溝で、全長1.2m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。S B03よりも新しい。埋土中より須恵器甕・土師器・製塙土器などが出土した。

S D 07 調査区南東部で検出された南北方向にのびる溝で、全長1m、幅0.25m、深さ0.1mを測る。埋土中より製塙土器が出土した。

S D 08 調査区東端で検出された東西方向にのびる溝で全長1.6m、幅0.25~0.55m、深さ0.1~0.15mを測る。すぐ南側のS D09を切っている。埋土中より須恵器・土師器・製塙土器が出土している。

S D 09 S D08のすぐ南側で検出された東西方向にのびる溝で全長1.8m、幅0.2~0.45m、深さ0.1~0.25mを測る。S D08よりも古い。出土遺物はなかった。

S K 03~18 長径0.8~1.8m、短径0.25~1.4m、深さ0.05~0.8mを測る。いずれも楕円形あるいは長円形の土壙である。

c. 出土遺物 今回の調査では、S D05より弥生時代中期後半～後期後半の弥生土器が多量に出土し、S K01・S K02・S D03より5世紀後半～5世紀末の須恵器、土師器が多量に出土した。その他、溝・土壙・ピットなどから6世紀以後の須恵器、製塙土器が出土している。

弥生土器は壺・甕・高坏・鉢などがあるが、いずれも器面がかなり磨滅しているものが多く、また、埋土の堆積状況などから見ても、北方の上流域から流入してきた可能性が高い。

須恵器は5世紀後半～5世紀末のものが最も多く、坏蓋・坏身・高坏・大甕・甕・器台・大形罐・塊・長頸壺などがある。いずれも胎土が精良で、焼成も

良好である。色調は内外面が暗灰色または青灰色で、断面が紫褐色を呈するものが多い。

土師器も5世紀後半～5世紀末のものが多く、壺・甕・高坏・甑などがある。いずれも胎土が精良で、殆ど砂粒を含まない。焼成も良好である。

また、SB01・SK01・SD03及び包含層内から縄蓆文・格子目叩き・平行叩きを外面に施した陶質土器や格子目叩きを持つ軟質土器などのいわゆる「韓式系土器」が計56点出土している。

その他、断面形がソロバン玉形を呈し、外面に鋸歯文を施した滑石製紡錘車や結晶片岩製紡錘車、滑石製管玉、縦2.8cm×横1.75cm、厚さ0.3cm×0.4cmで長方形を呈し、その一端に径0.2cmの孔を穿っている滑石製品の他、土錘、蛸壺形土器、手捏ね土器などが出土している。

なお、それぞれの遺構内の埋土及び包含層内から多量の製塙土器片が出土している。

4.まとめ

a. 検出遺構 今回の調査区において検出された遺構は、SD05を除けば、殆どのものが古墳時代に属すると考えられる。その中で、5世紀後半～5世紀末の遺構としてSB01・SB02・SD03・SK01・SK02がある。

SB02は他のものよりやや新しい可能性があるが、SB01・SD03・SK01・SK02は出土遺物の接合関係から見て、ほぼ同時期のものと考えられる。ただし、SB01の場合、掘形埋土内に柱痕が検出できなかったため、おそらく柱を抜き取った後に埋まったものと考えられる。

すなわち5世紀後半～5世紀末頃にSB01が廃絶され、そこで使用していた土器類などをSK01・SK02・SD03に投棄した可能性が考えられる。

いずれにしても、SB01は神戸市内あるいは西摂地域においても最古の掘立柱建物であり、その周辺のみから「韓式系土器」がかなり出土していることなどから見ても、渡来人との関係を考えるうえにおいて非常に興味深い資料となるであろう。

b. 出土遺物 今回の調査で出土した遺物の中で特筆すべきものは、SK01・SK02・SD03などから出土した初期須恵器（TK208型式期～TK23型式期に属する）と「韓式系土器」である。

特に「韓式系土器」は神戸市内でも吉田南遺跡・吉田第4地点遺跡、念佛山古墳と3遺跡しか前例がなく、畿内周辺では約70遺跡から出土例が知られている。ところで、「韓式系土器」とは、「朝鮮半島からもたらされた土器、あるいはその影響下で渡来人及び在地の者が日本で製作した土器」をさす。

色調が青灰色を呈する硬質の「陶質土器」と赤褐色を呈する「軟質土器」、

黒灰色を呈する「瓦質土器」の3種類に大別でき、今回神楽遺跡において出土したのは、「陶質土器」が37点、「軟質土器」が19点で、「瓦質土器」は出土しなかった。

また「韓式系土器」の外面には、格子目叩き、平行叩き、縄蓆文などの叩き目を施している。

「韓式系土器」の所属時期は、弥生時代のものも数例あるが、その大半が5世紀代のものであり、特に5世紀中葉～後半頃が多い。

その分布範囲は、近畿地方周辺では、大阪湾沿岸に点在し、西は播磨平野から、南は紀ノ川流域、北は琵琶湖西岸、東は奈良盆地などから出土している。なかでも河内平野に集中している。

また、ソロバン玉形紡錘車は、八尾南遺跡（大阪府八尾市）、長原遺跡（大阪府大阪市）、陶邑・深田遺跡（大阪府堺市）、土師の里遺跡（大阪府藤井寺市）、宮山窯址（香川県）などからいずれも初期須恵器に共伴して出土しているが、すべて材質が須恵質であり、滑石製のものは現在のところ類例がない。

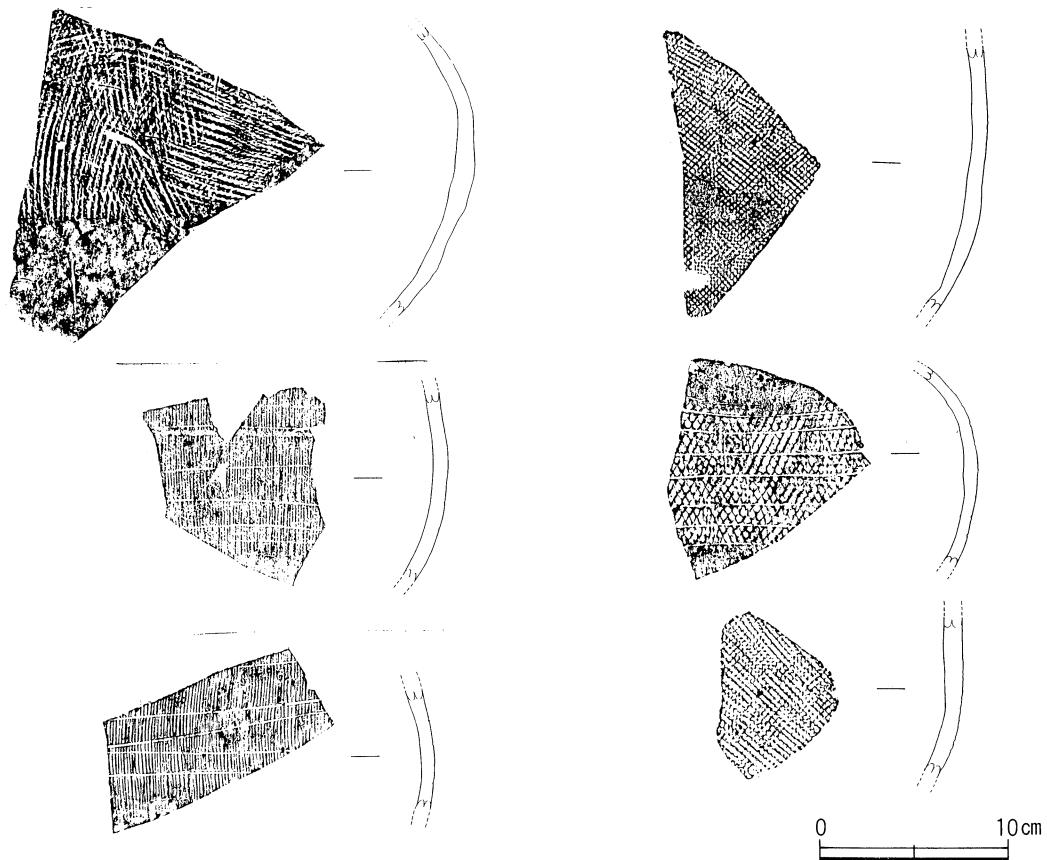


fig. 159 韓式系土器拓影

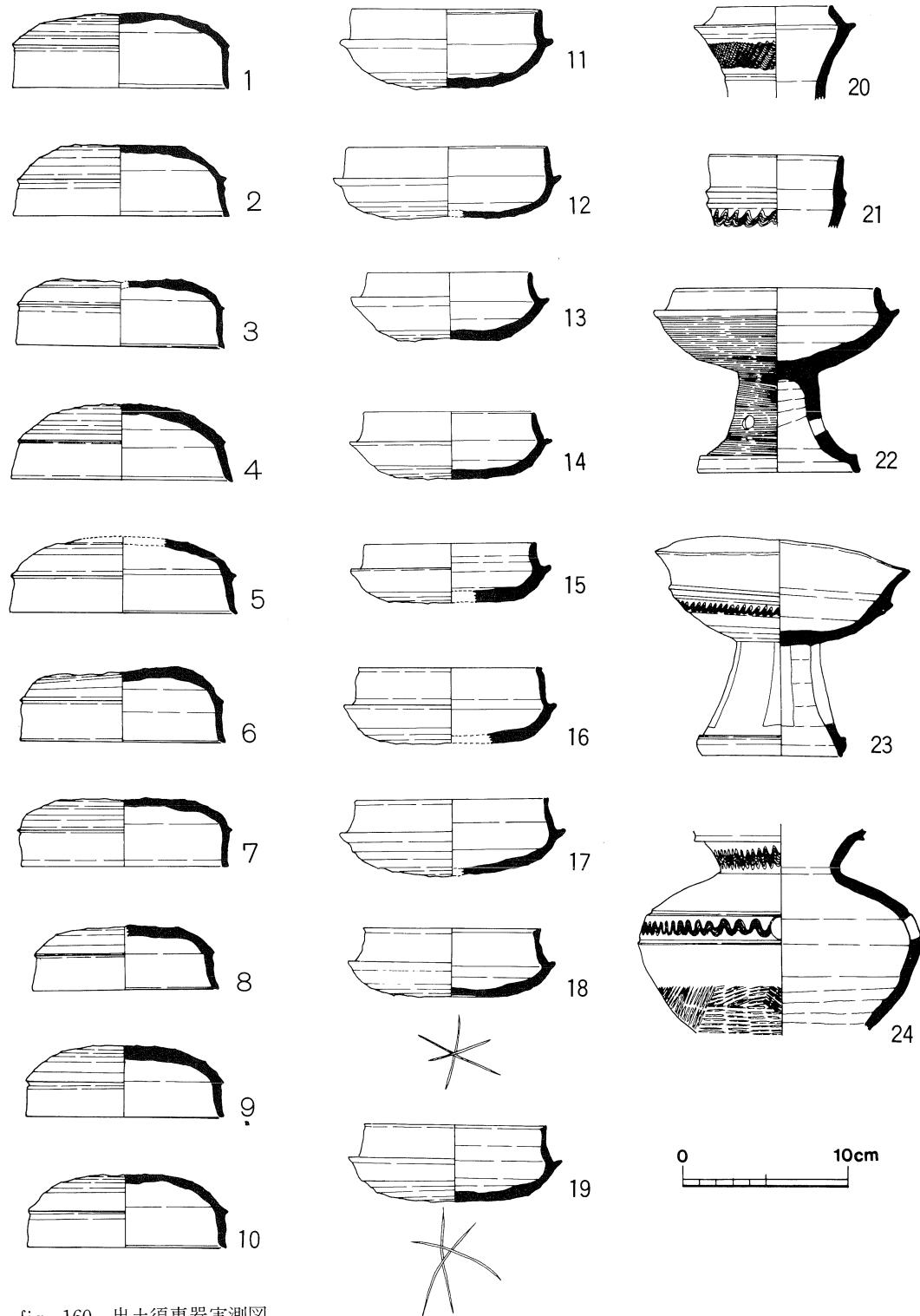


fig. 160 出土須恵器実測図

(1:S K01. S D03最下層、2~5.14.15.18:S K02. 6~10.16.17.20.24:S D03最下層)
(11.23:S B02. 12.13:S K01. 19:S K02. S D03最下層、21.22:ピット埋土内)

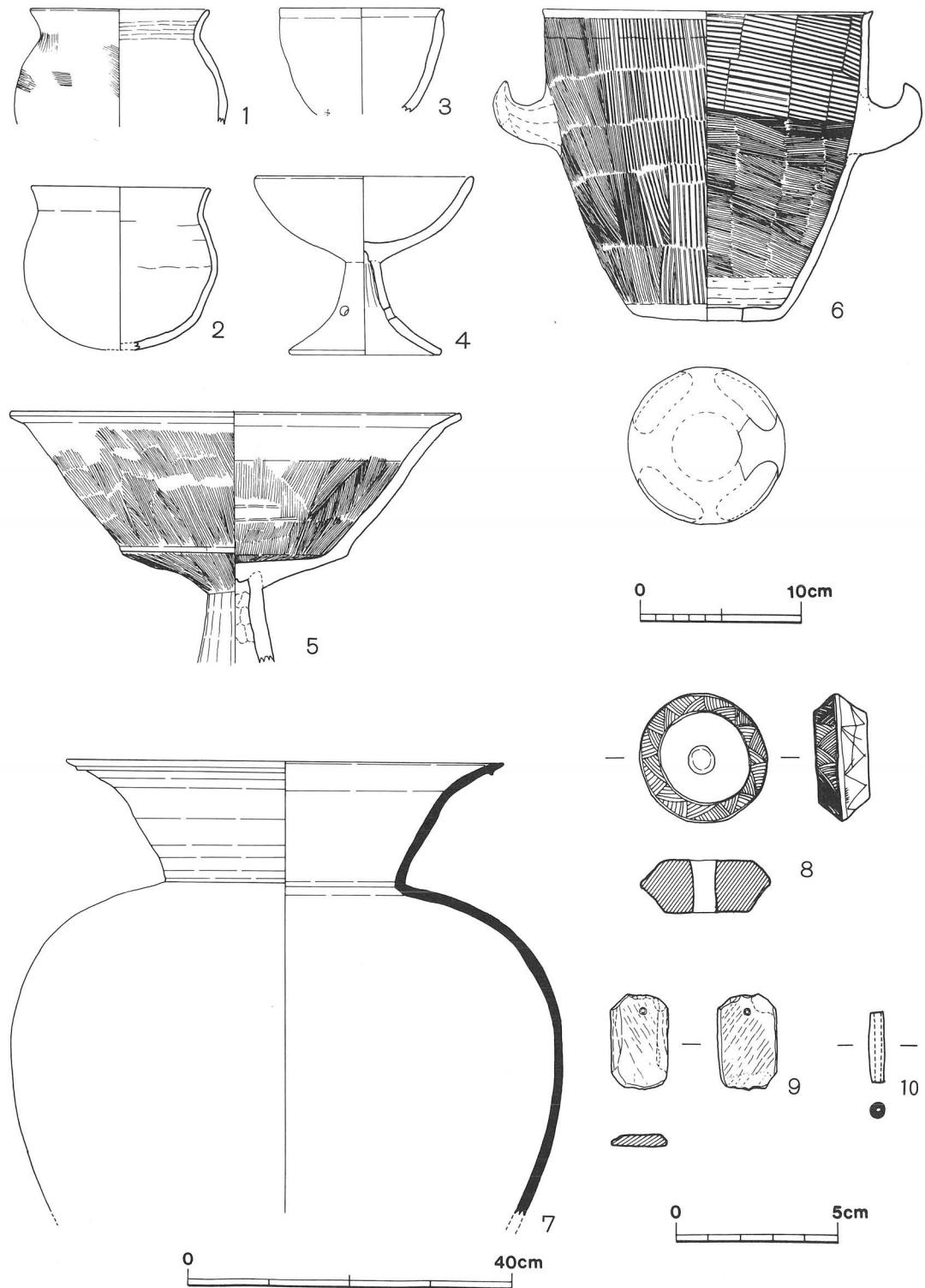


fig. 161 出土遺物実測図
 (1~5.8:S D03最下層、6:S K01. S D03最下層、7:S K01. SK02.)
 (S D03最下層、9:S D03上層、10:S K02)

15. 本山町東山遺跡

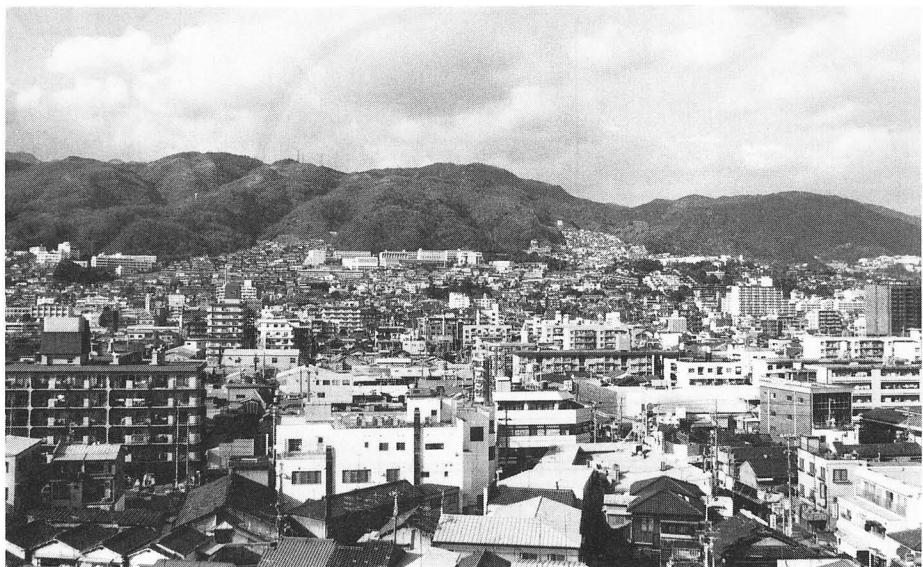
1. 調査経過 東山遺跡は昭和40年代の終り頃、靈園造成工事予定地として開発申請が提出された。昭和50年に神戸大学・多淵敏樹教授、東洋大学附属姫路高校・上田哲也教諭を中心とした調査団が編成され、開発予定区域内の試掘調査が実施され、弥生時代集落址の存在が確認された。昭和58年に前回調査の結果をもとに、遺跡が密集している地域を保存区域にした開発計画が提出された。そのため、正確な遺跡の分布範囲を把握するため、昭和59年度にトレーンチ掘りによる遺跡の範囲確認調査を実施した。

2. 立 地 東山遺跡は六甲山系の南麓、神戸市の東端に位置している。標高 100mから230mの細尾根が3本南に派生しており、字名で東山、西山と呼ばれている。本遺跡から直線距離で 2km 南は海岸線で、大阪湾から紀伊半島を指呼の間に見渡すことができる。

東側に隣接する芦屋市には標高 200m に弥生時代後期の高地性集落址会下山遺跡があり、西には金鳥山遺跡、荒神山遺跡、赤塚山遺跡と弥生時代の遺跡が連らなっている。南側の低地部には、近年市街地再開発が進み、遺跡の数も急激に増加しつつある。南麓裾には生駒銅鐸、森銅鐸が出土しており、本遺跡付近一帯は、弥生時代の遺跡が密集している。

調査地点東端の尾根は、東斜面がかなり削平され、防災措置で擁壁が造られている。西斜面と中尾根の東斜面はかなり急峻であるが、中尾根の西斜面と西尾根は、ゆるやかな斜面で続いている。

fig. 162
東山遺跡遠景
(南から)



3. 調査概要 今回の調査は、遺跡の範囲を明確にするために実施したもので、トレンチはすべて1m幅とし、総延長2,761mでトレンチ設定区域の草木を伐採することから始めた。トレンチ番号は南北ラインをA～Nまでとし、東西ラインを1～59までとした。

調査は開発予定区域内の東側を北から南へと下るかたちで、人力による掘削を開始した。昭和50年度の調査では、No.23・No.24ライン付近から遺物包含層が確認されていたが、今回の調査では、No.23・No.21・No.19およびDライン南端より須恵器片の小片が出土した。いずれもかなり磨耗しており、流れによる堆積と思われた。開発予定区域内は砂岩の比較的もろい岩盤で転石も多く、また、BラインのNo.9～No.5付近までは、東斜面の擁壁工事の際かなり荒されていた。しかし、Aライン地区、Bライン地区からは、遺物もほとんどなく、尾根上は細く、斜面地は急傾斜で遺構は存在しないと思われる。

第2次調査では、開発予定区域の中央部の尾根を、やはり北から南へと下るかたちで掘削した。中央部の尾根上に設定した南北トレンチはMラインで、幅1m、長さ347mを掘削し、約20m間隔でNo.43～No.28ラインのトレンチを東西に入れた。幅は1mで長さは延べ883mを掘削した。

Mライン地区からは、遺物包含層および遺構が多数検出された。

S B 01 トレンチ調査のため、全体の規模は不明であるが、現存で奥壁から3mのテ
(Mライン ラス状面を検出した。赤褐色の焼土が床面に広がっており、奥壁隅には、木炭
 No.42～No.41) が焼けのこって出土した。奥壁の現存高は0.6m、トレンチ内では周壁溝は確
 認されなかった。粗い叩き目の壺胴部、壺肩部、壺底部、甕口縁部、高环脚部
 などが出土している。

S B 02 No.38ラインのM軸のやや西寄
 (No.38) り、丘陵上で検出している。現
 存壁高は約0.4m、東西5.7mの
 円形ないし小判形の住居址と考
 えられる。S B 01同様、全体が
 焼けており、赤褐色の焼土がか
 なり厚く堆積していた。焼土を
 取り除くと壁に沿って周壁溝が
 巡り、奥壁に近い所では溝中に
 炭化材が約0.3m間隔で数本立
 ったままの状態で検出された。
 壁面に腰板として使用されてい
 た可能性が強い。



fig. 163 S B 02

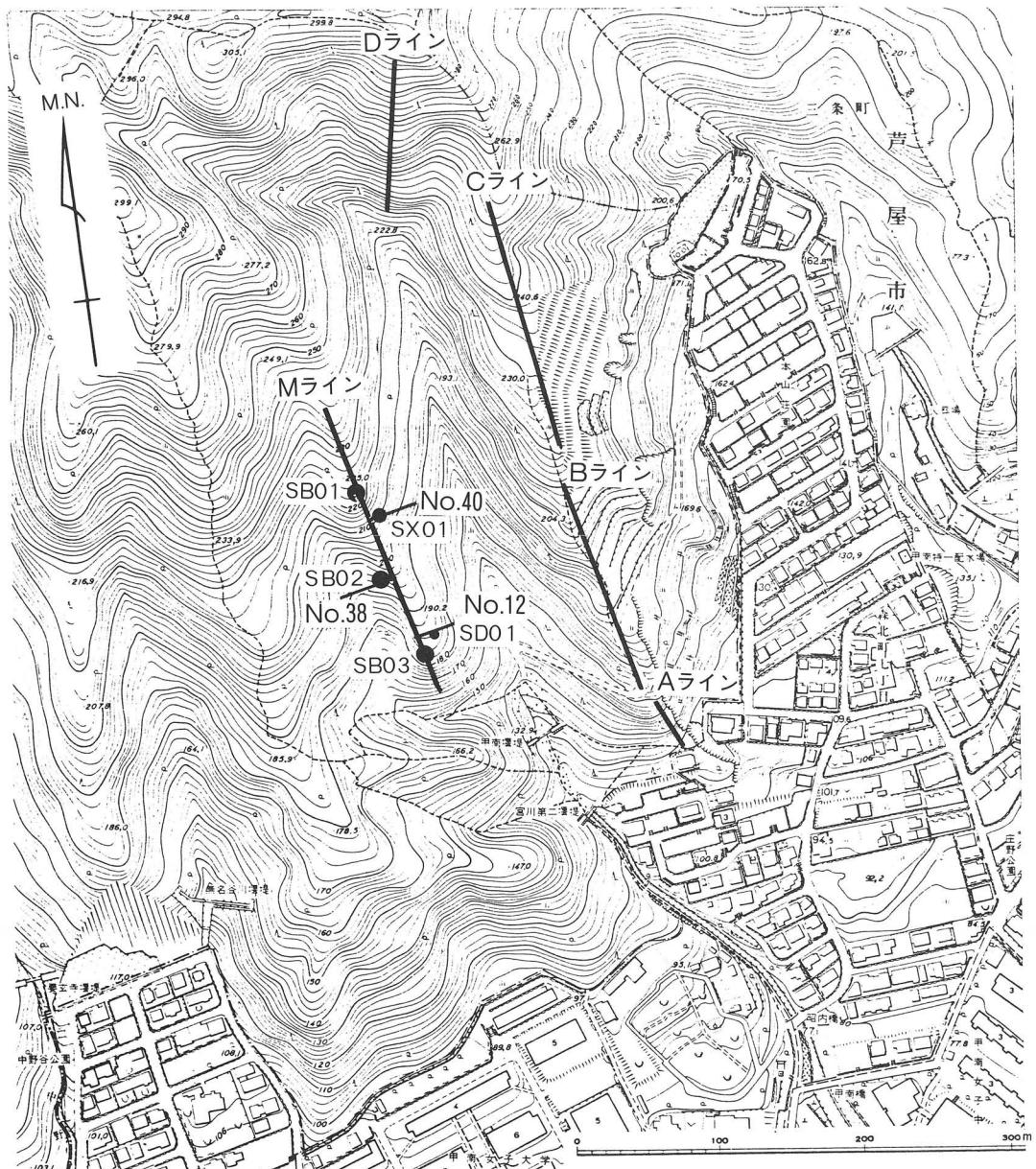


fig. 164 東山遺跡Mライン地区遺構位置図

この住居址の西側に一部地山面より一段低くなった張り出し部が検出された。トレンチを拡張していないので、細部については不明であるが、住居址に伴うものであれば入口の可能性もある。住居址内から出土遺物は少なく、壺底1点が西側周溝内に張りついていた他は、細片が上層で出土したのみである。

SB03 かなり上層より赤褐色の焼土層が確認された。残存奥壁高は0.4m、奥壁に(Mライン)沿って周壁溝と思われる溝状の落ち込みが見られたが、途中で終っている。またNo.12～No.35)床面は奥壁から3.7m残存しており円形と思われる。周辺部から土器はかな

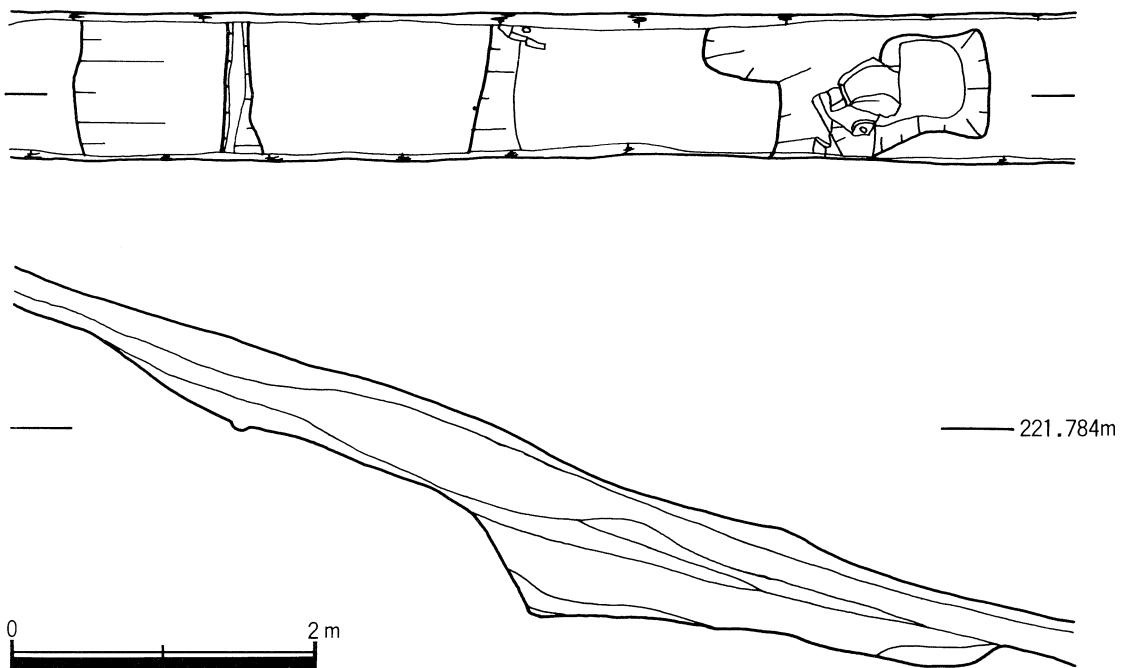


fig. 165 S B01実測図

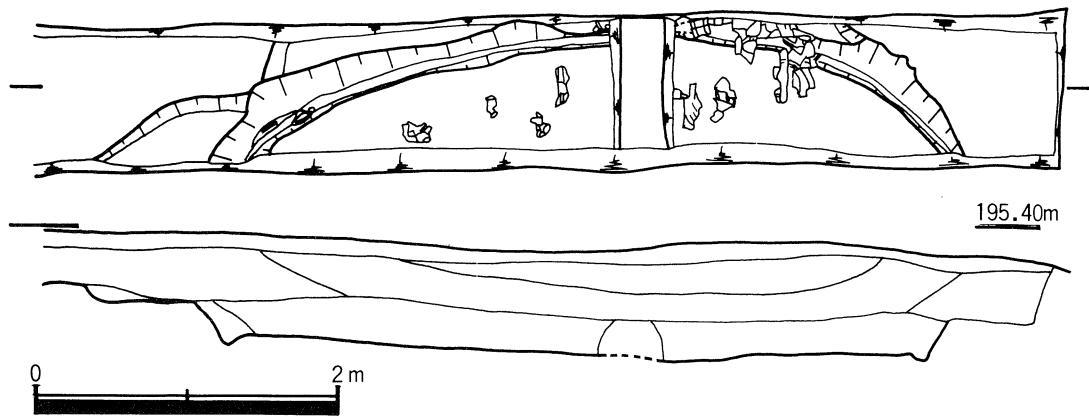


fig. 166 S B02実測図

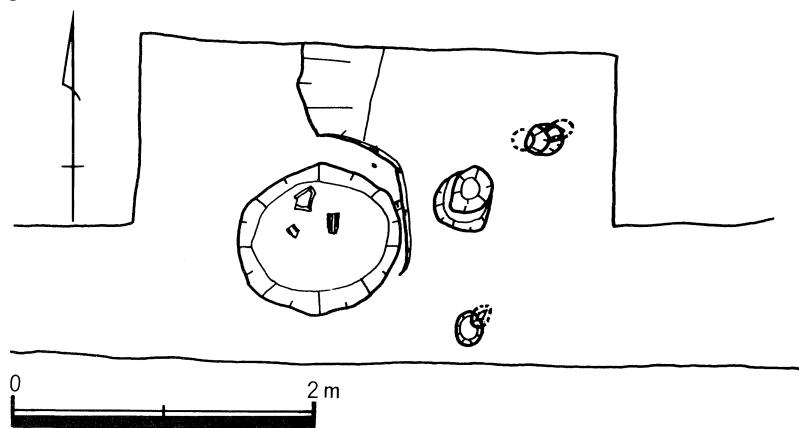


fig. 167 S X01 (焼土壙) 平面図

り出土しているが、住居址内の遺物は細片が少量出土したのみである。

S X01 No. 40でM軸より20m東へ下った斜面地に直径1m、深さ0.8mの焼土壙が検出された。壁はかなり火を受けたらしく、赤褐色に焼き締っていた。底では焼けた石と木炭が検出された。また底面より土器の細片が数点出土している。

斜面の傾斜角は約30度あり、かなり急斜面に作られているが、この焼土壙の用途は不明である。

S D01 No.12でM軸より5m東に、幅0.4m、深さ0.05mで南北方向の浅い溝状遺構が検出された。溝底より高壙の脚部2点と高壙の口縁部が出土している。かなり削平されており、この溝だけで性格はわからないが、おそらく周辺部に遺構が存在すると思われる。



fig. 168 S B02出土炭化材



fig. 169 S D01出土弥生土器

4. 出土遺物 1m幅の試掘トレンチとかなり急斜面な地形のため、復元できるものはほと

弥生土器 んどない。また遺構も少ないため、出土遺物は小さな破片が多い。判別できる器種は、甕、壺、有孔鉢、高壙である。これらは底部、脚部が多く、器高等はほとんど不明である。

壺 甕 底部以外では、頸部から肩部にかけて断面四角形貼付突帯をもつものが出土している。突帯の下には、櫛描きの波状文を施している。口縁部内面にも波状文が施されている。

細片が多く、壺か甕か不明の胴部もかなり出土している。これらのほとんどは、粗い叩き原体で成形が行われている。

高 壙 S D01の溝状遺構内より出土したもので、脚部と口縁端しか残存していない。復元すると、口縁部径27cm、高さ16.5cmになる。口縁は大きく外反し、脚部は裾で広がり、透しは円形透しが4カ所である。壙部と脚部の接合は円板充填手法を用いている。

有孔鉢 壺および甕の底部が多く出土しているが、その中に有孔鉢の底部が2点含まれている。底部は、やや突出したドーナツ状が多い。また、やや突出した平底や突出のない平底も数点認められた。

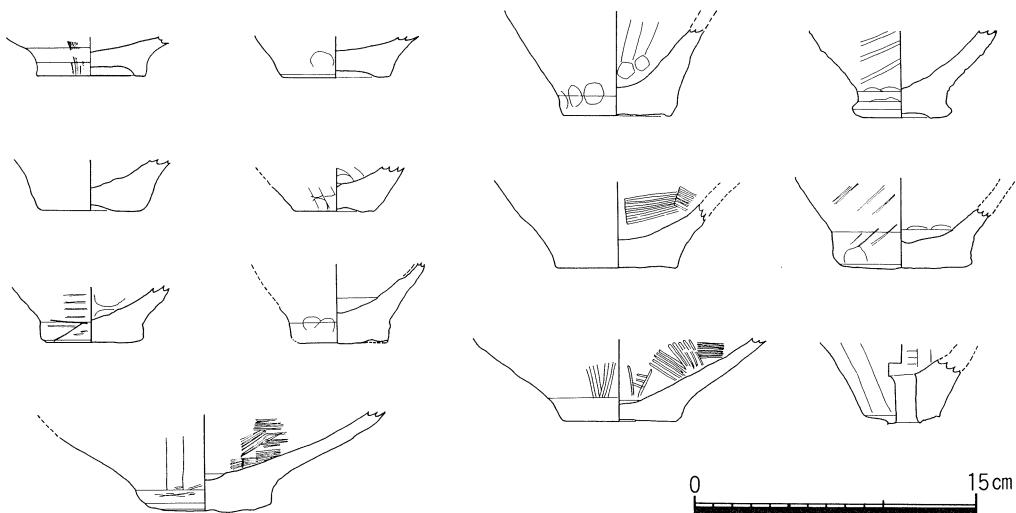


fig. 170 弥生土器実測図

石斧 M42トレンチから、先の折れた蛤刃型石斧の握り部が1点出土している。石材については、未鑑定であるが、かなりもろい石材を使用している。

5.まとめ 以上調査結果の概略を記したが、前述したとおり、調査は範囲確認で1m幅のトレンチ調査のため、遺構の規模・性格等については不明の点が多い。

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居址3、焼土壙1、溝状遺構1である。いずれも検出された住居址は火を受けている。特に注目すべきはS B02の住居址で、周溝に沿って約30cm間隔に柱材様の炭が立っており、板材と見られる炭が規則正しく床面に倒れていたが、本来、この板材は周壁柱で止められていた板壁と考えられる。

S X01の焼土壙も急斜面に作られ、周壁は赤褐色から灰褐色に焼け、かなり強い火を受けていたと見られるが、窯址とは考えにくく、用途不明である。

高地性集落特有とも言える遺物は少なく、石器も石斧を除いて1点も出土していない。埋土および流土中からもサヌカイト片が1点も出土していないことから、当時、すでに鉄器使用が普及していたと考えられる。

周辺の高地性集落遺跡は弥生時代中期後半のものが多く知られている。今回の調査地域から出土した遺物は、中期後半のものも数点出土しているが、遺構に伴って出土したのはすべて後期のものである。これらから当遺跡は、東隣りの芦屋市会下山遺跡同様、弥生時代後期の遺跡である。

調査の概要は2次調査までのものであるが、現在まで判明している遺跡の範囲は、昭和50年に試掘調査した時の遺跡予想範囲と大差ないと思われる。

ぐんげ しろまえ
16. 郡家遺跡（城の前地区第5・6・7・9・11次）

I. 位置と環境 郡家遺跡は神戸市東灘区御影町郡家、御影を中心に東は住吉川、西は石屋川、北は阪急電鉄神戸線、南は国道2号線まで及ぶと考えられる遺跡である。明治22年の陸地測量部の地形図によれば、石屋川と住吉川による広大な複合扇状地がひろがる水田地帯であった地域である。大正時代以後、市街地化が進行し住宅が増加した。当時の宅地化は地下に改変を與えることなく整地されたため、地下に眠る遺跡はそれほど大きく破壊を被ることなく、比較的良好な状態で残存しているものと考えられた。

近年、区画整理事業が阪急電鉄御影駅の南側を中心に実施され、その一環として、都市計画道路山手幹線・弓場線が、東西、南北に予定されたのを機に、昭和58年度より道路予定地内について発掘調査を実施している。

II. 城の前地区第5次調査

1. はじめに 昭和57年9月、郡家遺跡の北東部から南西部に貫流する都市小河川天神川の河川改修工事中に弥生土器が発見されたため調査を実施した。調査の結果、弥生時代～古墳時代にかけての自然河道及び弥生時代の溝を確認した。

今回の調査地点は、昭和57年度に調査を実施した地点の北側継続部分であり、都市計画道路山手幹線・弓場線の交差点に位置している。

調査面積は、当初予定地160m²、拡張部分24m²、計184m²である。

2. 調査概要 調査地は全体に北から南へ傾斜し、調査地北部では床土直下に遺物包含層がひろがり、地表下0.7mで赤褐色粘質土の地山となる。調査地南部では床土下に褐色砂が厚く堆積し、その下に遺物包含層がひろがり、地表下1.6mで地山となる。調査地の遺構面は、北部が地山面で、南部が遺物包含層上面と地山面であった。

3. 検出遺構

- 河道1** 調査地北西端で流路の東肩を検出した河道である。河道内には褐色砂礫層が堆積し、褐色砂礫層より中世土器片が出土した。
- 河道2** 調査地中央を東西に流れる河道である。河道内には褐色砂礫層が堆積し、中世陶器片、土師器羽釜片が出土している。幅2.4mを計測する。
- 河道3** 調査地中央を北西から南東に向かって流れる河道である。北側は河道2に切られる。河道内には白色砂礫層が堆積し、古墳時代須恵器、奈良時代須恵器が出土している。
- 河道5** 調査地中央を北西から南東に流れる河道である。北側を河道2・3によって

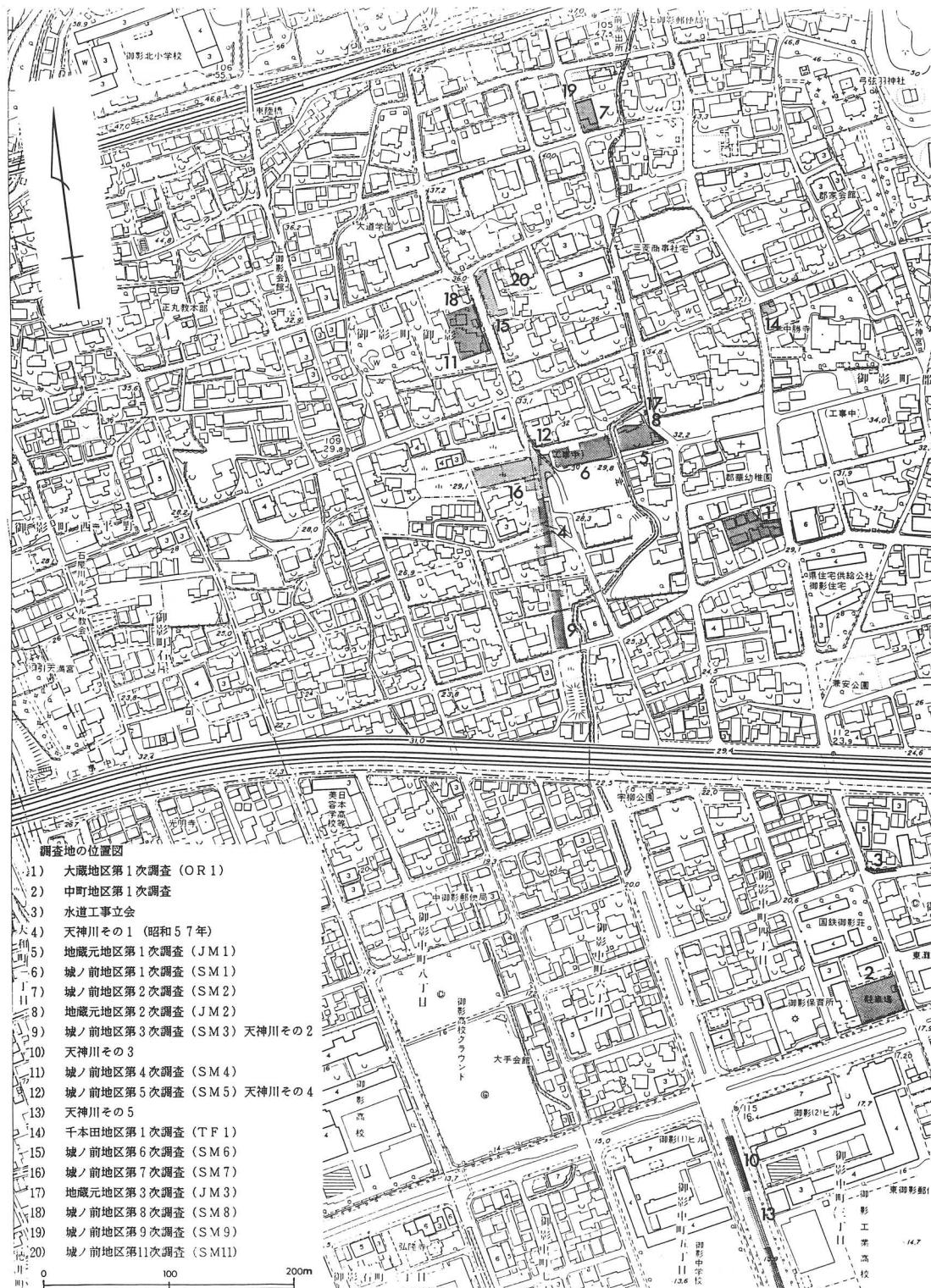


fig. 171 郡家遺跡調査地位置図



fig. 172 第1次遺構面平面図

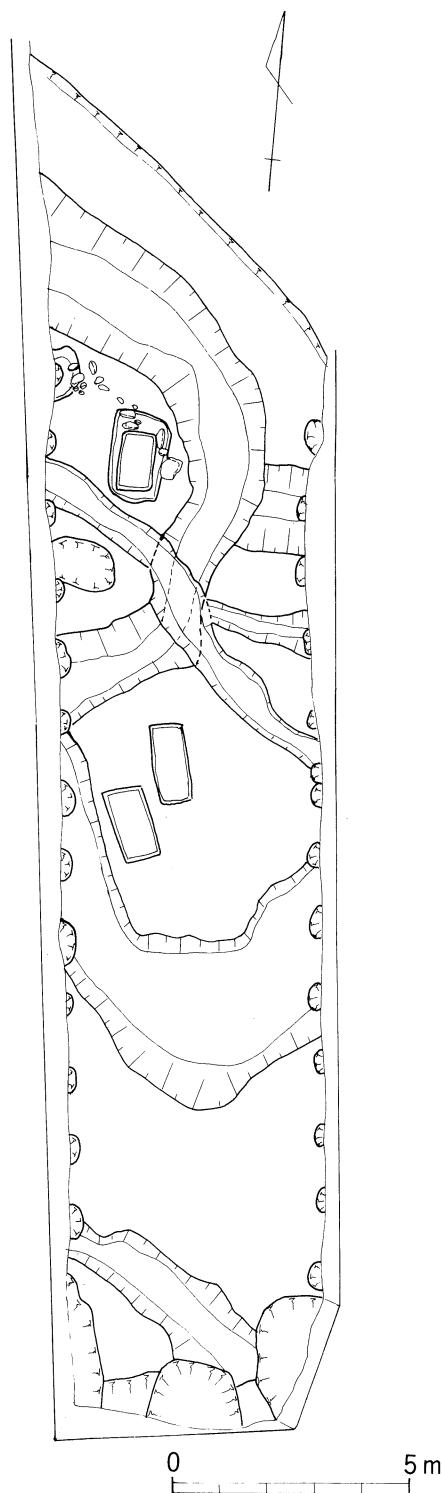
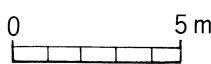


fig. 173 調査地南部第2次遺構面平面図

削られている。南側も立地する地形が南に傾斜しているため、明瞭な痕跡は検出できなかった。

河道6 調査区南端を北西から南東に流れる河道である。暗灰色粘性砂質土の遺物包含層を削り込んで流れる。幅1.6m、深さ0.3mを測る。河道内は淡褐色砂礫土が堆積し、埋土内から6世紀中葉の須恵器片が出土している。

河道7 調査地南部中央を北西から南東に流れる河道である。幅0.7m、深さ0.4m前後を測り、断面は逆台形状を呈する。河道内には淡褐色粗砂が堆積し、弥生時代後期の土器が多量に出土した。

河道8 第1次の遺構面で検出した河道6の下層を北西から南東に流れる河道である。幅1.3m、深さ0.3m前後で、埋土内より弥生土器片が出土している。

溝1 調査地南部北よりで検出した溝状の落ち込みである。幅2.3m～1.5m、深さ0.3m前後で弧状にめぐる。西側の溝肩は布留式土器を含む黒灰色土より切り込まれ、東側では地山より掘り込まれている。西側の溝肩となる黒灰色土上面からは古式土師器片の土器群を検出した。さらに黒灰色土を除去した結果、不明瞭な方形の土壙を検出した。

溝2 調査地中央で検出した、L字形に屈折した溝である。幅2.5m、深さ0.25m前後を計測する。埋土内より弥生土器片が出土している。

3.まとめ 今回の調査では、弥生時代後期～中世に至る河道を7条検出したが、住居址等の遺構を検出できなかった。しかしながら、河道内より、弥生時代から中世までの多量の遺物が出土した。このことから、調査地の北西側に遺跡が存在すると考えられる。



fig. 174 調査地南部全景

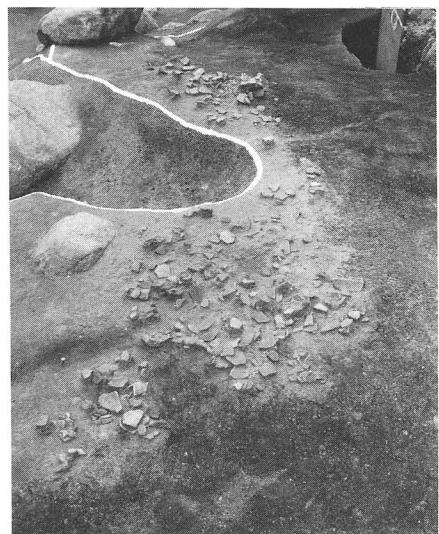


fig. 175 土器群

III. 城の前地区第6次調査

1. はじめに 調査地は、天神川によって形成された扇状地上に立地する。昨年度に実施した城の前地区第4次調査で、鎌倉時代の掘立柱建物1棟・井戸1基・土壙、平安時代後期の掘立柱建物1棟、古墳時代後期の竪穴住居址4棟（うち2棟から、滑石製紡錘車・滑石原石が出土）、弥生時代後期の円形周溝2基・土壙1基が発見された。今回の調査は、都市計画道路弓場線建設に伴うもので、対象面積は約307m²である。

2. 基本層序 層序は第Ⅰ層青灰色土、第Ⅱ層灰黄色土、第Ⅲ層灰色土、第Ⅳ層黄灰色土、第Ⅴ層黄褐色土、第Ⅵ層灰褐色土、第Ⅶ層淡褐色粗砂である。第Ⅶ層はトレーニングチ南端のみに見られる。層位は地形に沿って、南へ低くなっている。

第Ⅰ層は古墳時代・平安時代・鎌倉時代・近世、第Ⅱ層～第Ⅳ層は古墳時代・平安時代・鎌倉時代、第Ⅴ層は弥生時代～鎌倉時代、第Ⅵ層は弥生時代・古墳時代の遺物を含む包含層である。第Ⅶ層は遺物を含まない層であり、これが地山と考えられる。

3. 遺構と遺物

〈第1遺構面〉 第Ⅴ層上面と第Ⅵ層上面（トレーニングチ南端）で、土壙（SK01～03）と柱穴が検出遺構）見つかった。

柱穴群 柱穴の中には1列に並ぶものがあるが、建物にはならない。出土遺物には古墳時代のものも含まれるが、多くは平安時代～鎌倉時代の須恵器片、土師器片、瓦器片である。

SK01 東西1.18m、南北0.6m、深さ0.17mの長方形の土壙で、西側に突出部を持ち、その部分が深くなっている。底には粘土が貼られ、その上に薄い炭の層が堆積しており底と壁は焼けている。南肩にピットを持つ。

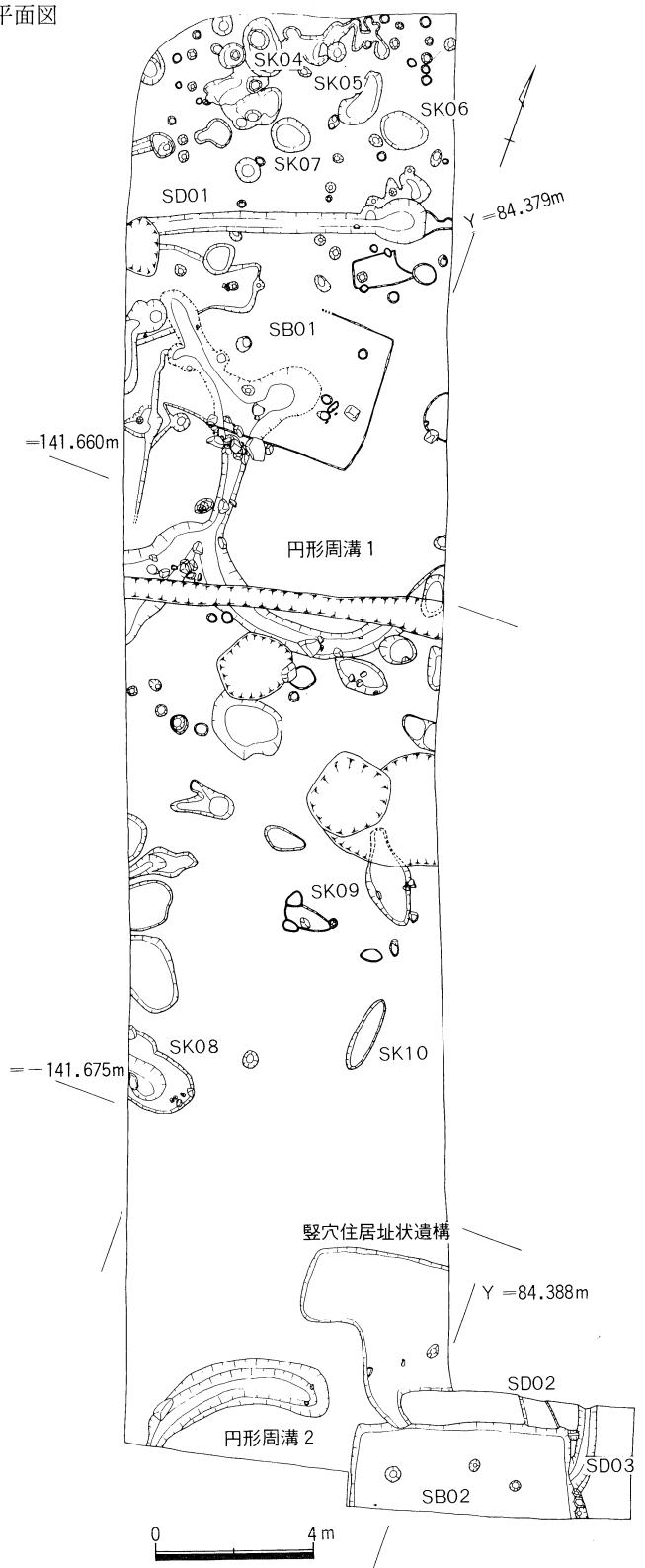
SK02 東西1.12m、南北0.63m、深さ0.16mの長方形の土壙で、突出部はないが、東端が深くなっている。

SK03 長さ1.72m、幅0.17mの浅い溝状のもので、南側にピットを持つ。中には炭が堆積しており、周辺は焼けている。その形状から、SK01・02と同様の土壙の上部が削られ、底だけが残ったものと考えられる。

SK01から須恵器片、土師器片、SK03から土師器片が出土している。いずれも小片で、これらの土壙の明確な時期は解らないが、平安時代～鎌倉時代のものと思われる。

〈第2遺構面〉 第Ⅶ層上面で検出された遺構である。平安時代の土壙・溝・柱穴、古墳時代後期の竪穴住居址・溝・土壙・柱穴、弥生時代後期の円形周溝・土壙などが同一面で発見された。

fig. 176 第2遺構面平面図



平安時代後期の遺構

- S K 04 長径約 1.5m、短径約 0.9mの楕円形の土壙である。深さは約 0.5mで、中には焼土が堆積し、土師器皿とともに北宋錢「至道元宝」が出土している。
- S K 05 最大径約 1.6mの不定形の土壙である。深さは約 0.3mで、焼土がブロック状に堆積しており、完形の土師器皿が出土した。
- S K 06 長径約 1.3m、短径約 1.0mの楕円形の土壙である。深さは約 0.2mで、埋土には炭が混っている。土師器片、須恵器片、瓦器片が出土している。
- S D 01 幅約 0.5mの東から西へ流れるU字状の溝である。深さは 0.2~0.26mで、溝中からは土師器、須恵器、瓦器、土錘が出土した。
- S K 07 長径約 1.0m、短径約 0.8mの楕円形の土壙である。深さは約 0.4mで、須恵器が出土している。

古墳時代後期の遺構

- S K 08 短径約 2.0m、長径は西端が調査区外にあるため不明であるが、楕円形の土壙と考えられる。深さは約 0.5mで、土師器壺・甕の口縁部が出土した。
- S B 01 約5.0m×3.5mの方形竪穴住居址で、主軸はほぼ北を指している。西側は他の遺構に切られており、北側は削られていて壁を検出することができなかった。壁は深い所でも 0.2mほどしか残っていない。住居址の南端部中央で 6 世紀初頭の須恵器壺・高壺、土師器甕口縁部がまとまって出土した。
- S B 02 東西方向約 5.5mを測る方形竪穴住居址である。南半は調査区外にあるため南北方向の規模は不明である。深い所で約0.5m、浅い所で約0.3m掘り込まれて作られている。6 世紀初頭の須恵器壺・甕口縁部、土師器高壺が出土した。
- 竪穴住居址状遺構 不定形の竪穴住居址状の落ち込みである。約0.35m掘り込まれており、中から 6 世紀初頭の須恵器壺・高壺、土師器甕、炭が検出された。
- S D 02 幅約 0.9m、深さ約 0.4mの溝で、S B 02を切っている。溝中からは須恵器、土師器片の他、有孔円板が出土した。有孔円板は約 3 分の 2 が残存しており、径 3.2cm、厚さ 0.2cmである。中央に 1 対の孔を持つが、1 方の孔は貫通していない。
- S D 03 S B 02を切り、S D 02に切られる溝である。幅約 0.5m、深さ約 0.2mで中から土師器片が出土した。

弥生時代後期の遺構

- S K 09 長さ約 2.3m、幅約 1.2mの細長い土壙で、北側は近代の攪乱によって削られている。第V様式の壺・鉢・甕がまとまって出土した。
- S K 10 長さ約 1.9m、幅約 0.6mの溝状の土壙である。第V様式の鉢・壺・甕が検出された。
- 円形周溝 1 周溝の一部を共有する円形周溝で、北部は S B 01の床をはずしたところで検

出された。東側、西側とも途中で途切れている。幅約0.5~0.2m、深さ約0.1~0.5m、平均0.3mほどで、西北のふたまたに分かれた部分が深くなっている。底から第V様式の丹塗りの小形壺が完形で出土した。東側の周溝内からも、同時期の丹塗りの壺が1個体分出土した。

円形周溝2 東側は切れており、西側は調査区外南に伸びる円形周溝である。幅約1.1m深さ約0.4mで、弥生土器片が出土している。

5.まとめ 円形周溝から出土した丹塗りの壺は、供献された土器と考えられる。すなわち、埋葬主体部は発見されなかったが、円形周溝墓である可能性が高い。

昨年度の調査に続いて、円形周溝墓、竪穴住居址が発見されたことによって、調査区周辺が、弥生時代後期には墓域、古墳時代後期には居住域であったことが明らかになった。



fig. 177 第2遺構面



fig. 178 S B02

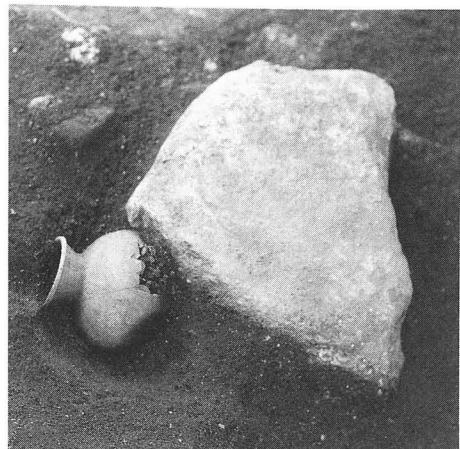


fig. 179 円形周溝1
小形壺出土状況

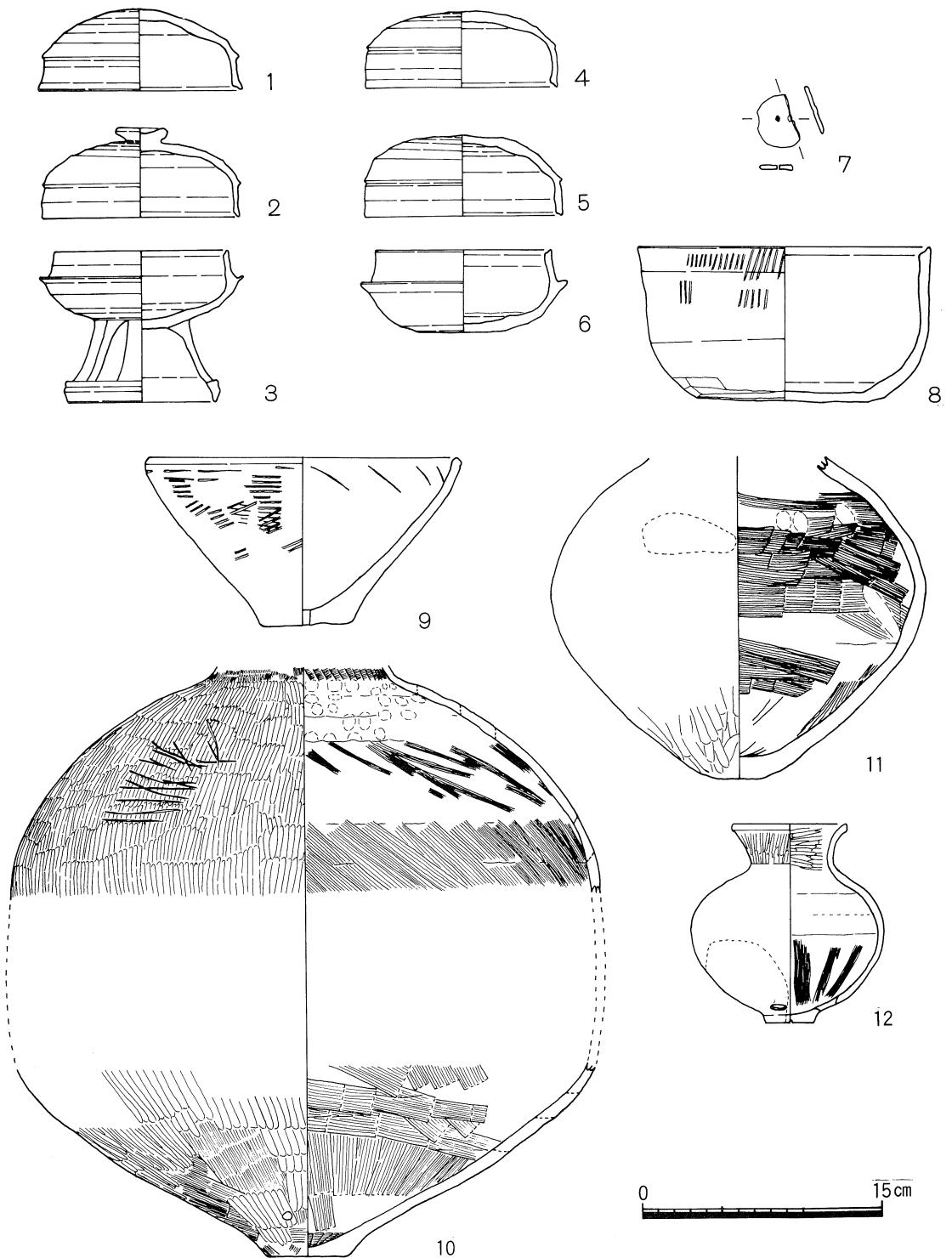


fig. 180 城の前地区第6次調査出土遺物実測図

(1~5 SB01、6.8 SB02、7 SD02、9 SK10)
(11 SK09、10.12 円形周溝1)

IV. 城の前地区第7次調査

A. 東1区 調査地北半部では、遺物包含層を除去した結果、赤褐色粘性砂質土を掘り込んで、竪穴住居址2棟、ピット等を検出した。

調査地南半部では、水田状遺構を確認した。水田の下層では溝状遺構2条、土壙1基を検出した。

S B 19 調査地北端で検出した方形の竪穴住居址である。西半分は土石流によって欠失していて東辺のみを検出した。東辺に東西1.2m、南北0.8mの楕円形のカマド状土壙がつくられている。土壙内には灰層・焼土が堆積し、土師器甕片が出土した。東壁沿いに幅15cm、深さ4cmの周壁溝が巡る。竪穴住居址に伴う柱穴は2か所確認した。南側の柱穴内より須恵器高坏が出土した。竪穴住居址の規模は東辺で4.5m以上を計測する。

S B 20 調査地中央部のやや北よりで検出した方形の竪穴住居址である。壁体は残りが良好な部分で、深さ8cmを計測する。規模は南北5.0m、東西3.8m以上を測る。周壁溝は検出されなかった。竪穴住居址に伴う柱穴は4か所検出した。柱穴は長径0.5m前後の楕円形で、深さは0.3~0.4mを測る。柱穴間の間隔は東壁沿いで2.1m、南壁沿いで1.8mを測る。

水田状遺構 弥生時代遺物包含層を基盤にし、黄褐色粘質土を貼り土し、その上から、幅0.8~0.5m、高さ0.2~0.3mの畦をつくっている。

畦に囲まれた一区画は幅2.2m~3.0mを測る。畦畔内は褐色粗砂が堆積し、須恵器片・鉄製鋤先が出土している。

B. 東2区 第1遺構面では、西2区へ続く河道が検出された。出土遺物は、弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器である。

第2遺構面では、トレチ北端に、北西から南東へ流出する河道があり、この河道の底で、細く直線的に伸びる同方向の流れが検出された。これらは、西3区で検出された河道に続くものであり、弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器が出土している。

トレチ北部において、北東から南西に流れる河道と土壙1基、ピット3個が、中央部では北西から南東に流れる浅い河道が、南部では、西から東に流れる河道が検出された。トレチ南部の河道は、西1区の河道の続きと考えられ、幅は1.5mほどあり、埋土は砂とシルトの互層になっている。これらの遺構からは、弥生土器が出土した。

C. 東3区 トレチ北部で、北西から南東へ流れる3重に切りあつた河道を、中央部で、西から東へ流れる河道を検出した。出土遺物は弥生土器である。ピットが4箇所で検出され、うち1つからは弥生土器が出土した。

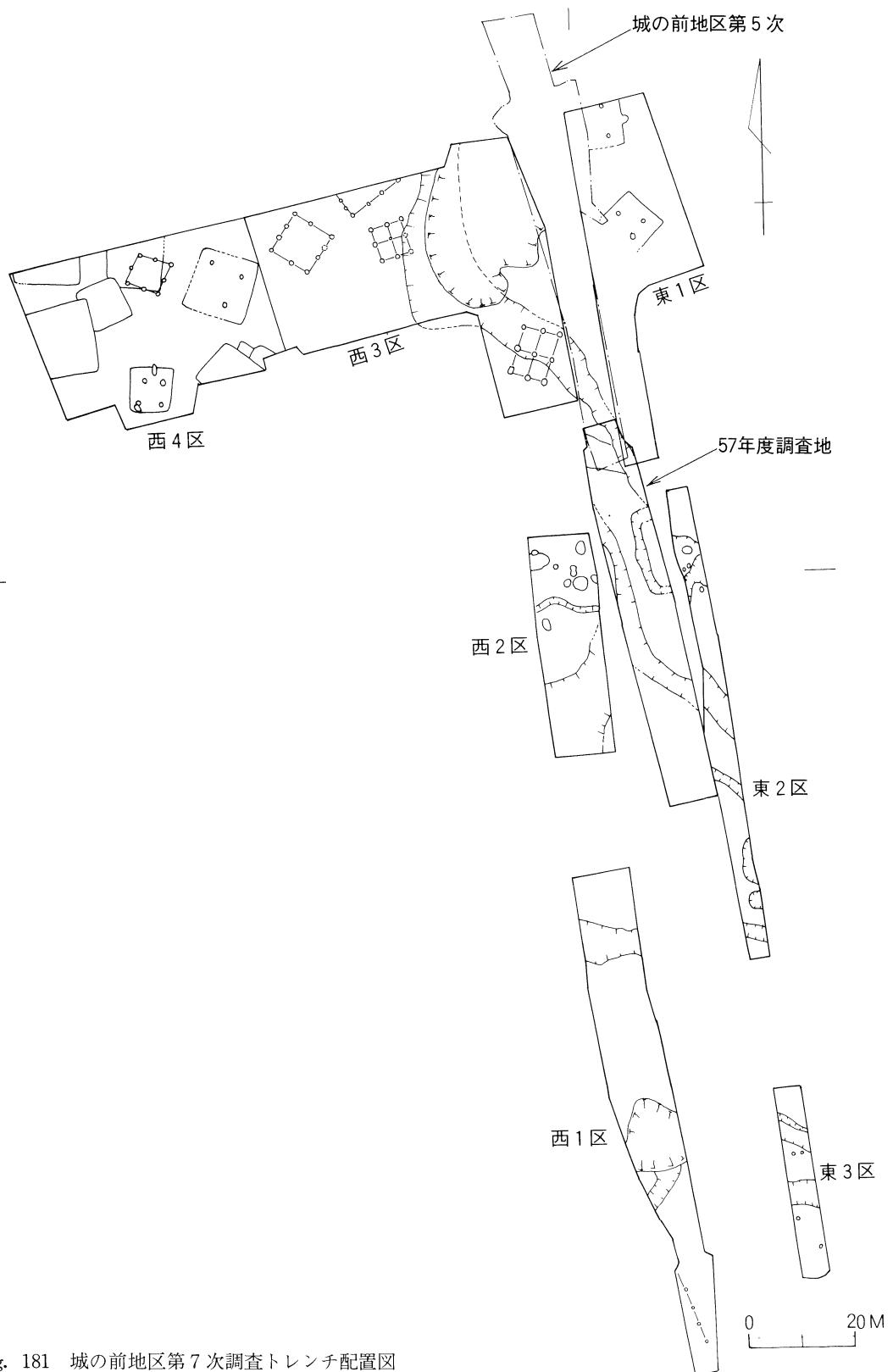


fig. 181 城の前地区第7次調査トレンチ配置図



fig. 182 東1区調査地全景



fig. 183 西3区調査地全景



fig. 184 西3区S B02



fig. 185 東1区水田内出土鋤先



fig. 186 西3区河道2内子持勾玉出土状況

D. 西1区 検出した遺構は、暗褐色砂質土を削り込んで西から東へ流れる河道1条とトレーニング南部で地山から掘り込まれた溝状遺構である。

河 道 中央部に攪乱壙があり、トレーニング西壁・東壁の一部で確認した。西壁で幅3.6m、東壁で幅2.5m、深さ1.0~0.8mを測る。溝内は粘質土と砂が交互に堆積し、褐色砂内より古墳時代甕が1個体分出土した。

溝状遺構 幅1.4m、深さ0.4mで埋土は上層に黒灰色砂質土、下層に灰色砂質土であ

る。遺物の出土はない。

E．西2区 第1遺構面では、トレンチ南半で、東から西へ広がる河道が検出され、底から、弥生時代第V様式の壺・鉢とともに、円筒形の土製品が4個体出土した。円筒形の土製品は完形品であり、高さ15~18cm、径10~11cm、中空で厚さは上端で1cm、下端は2.5cmある。上端が少しづぼまって釣鐘形をしており、外面はヘラ削りと指によるナデで調整され、内面は指によって縦方向に粗くナデられている。

第2遺構面では、トレンチ北半で、西から東へ流れる細い河道と土壙2基が検出された。土壙からは弥生土器片が少量出土した。

トレンチ南半では、北東から南西に流れる幅の広い河道が検出された。この河道中には礫が多く、弥生時代第V様式の甕・鉢・壺が大量に出土した。この河道の上に堆積する淡褐色砂中にも、礫の連なる下に鉢などの弥生時代第V様式の土器群が存在した。

F．西3区 トレンチ東南部では、床土直下から北西から南東に流れる河道2、河道3、河道4を検出した。更に下層では、弥生時代の遺物包含層を削り込んで南北に流れる河道5、地山面を削り込んで流れる弥生時代の河道6、河道8を検出した。

トレンチ西部では、地表下0.8mで、東西に流れる河道2を検出した。また東側で、南北に流れる河道1を検出した。

河道2の河底及び暗褐色砂質土（包含層）を掘り込んだ、建物址4棟を検出した。

河道1 幅4.6m、深さ0.7m以上を測る南北を蛇行しながら流れる河道。河道内は砂礫層が堆積し、弥生土器片、鉄片が出土している。

河道2 調査区北西隅から東南方向に流れる河道である。幅3.5m~5.0m、深さ0.2m前後を測る。河道内は灰白色の細砂が堆積している。河底と細砂層内より、子持勾玉、須恵器器台片、土師器片が出土している。

河道3 河道2の東南部で確認した河道である。幅1.1m~0.9m、深さ0.1~0.4mで、河道2の南岸に沿って直線的に流れている。堆積土は褐色粗砂で、弥生土器片が多数出土している。

河道4 河道3に切られ、南北に流れる。白色細砂層が堆積し、弥生土器片が少量出土している。

河道5 河道2・3・4の下層を、南北に流れる河道である。弥生時代の遺物包含層を削り込む幅2.4~3.5m、深さ0.5m前後の溝で、粘土と粗砂が交互に堆積し、河底は流石がみられる。堆積土内から、須恵器坏身、土師器、高坏、甕が多量に出土している。

河道6 河道5の下層に、河道5と同様な流路の河道が検出された。幅2.7m~4.7m、

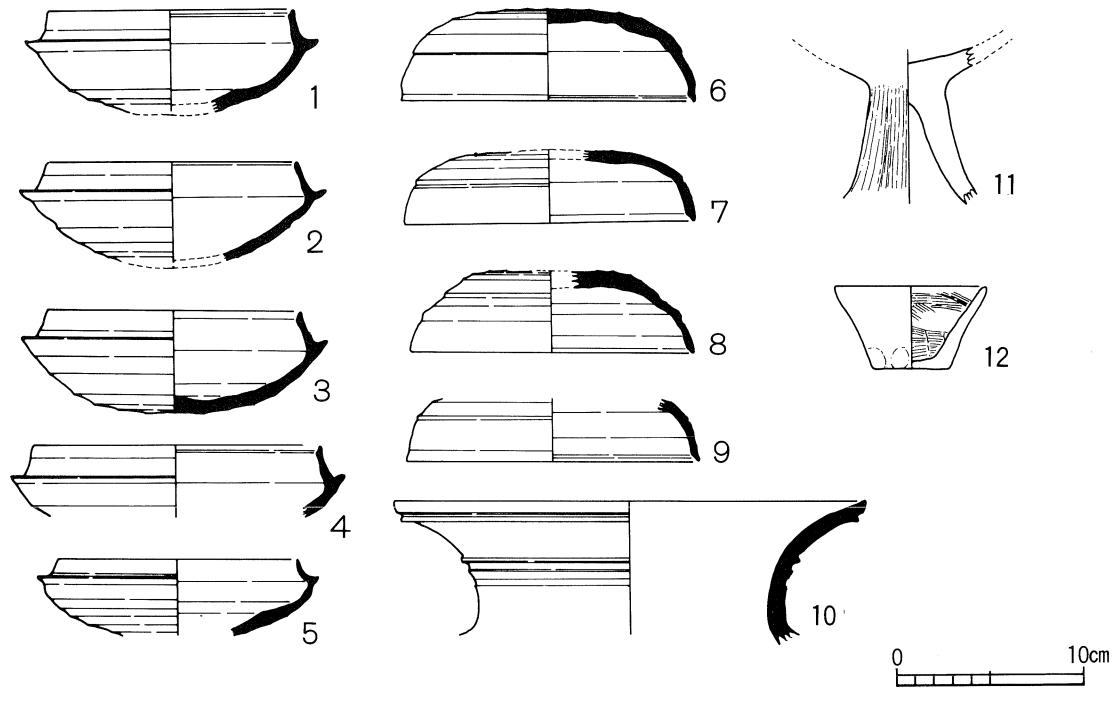


fig. 187 西3区河道2出土土器実測図

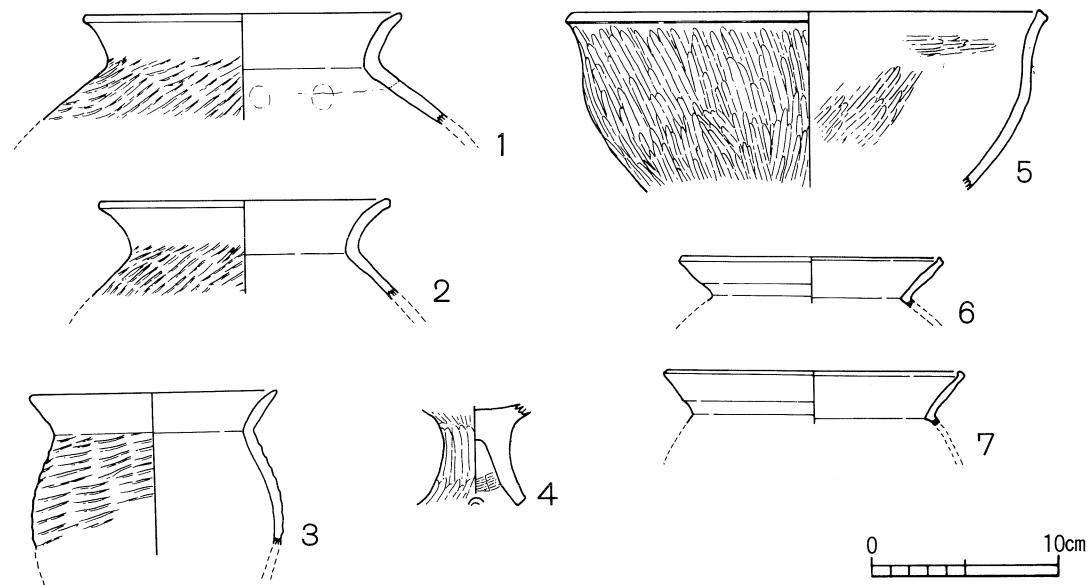


fig. 188 土壤出土土器実測図

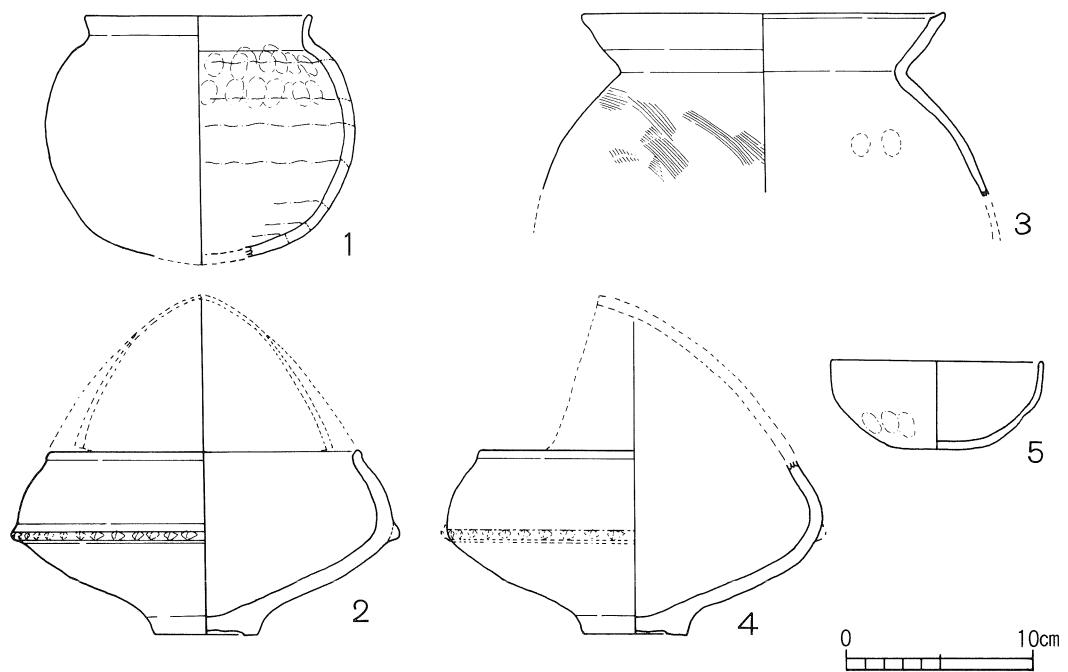


fig. 189 西3区河道5出土遺物

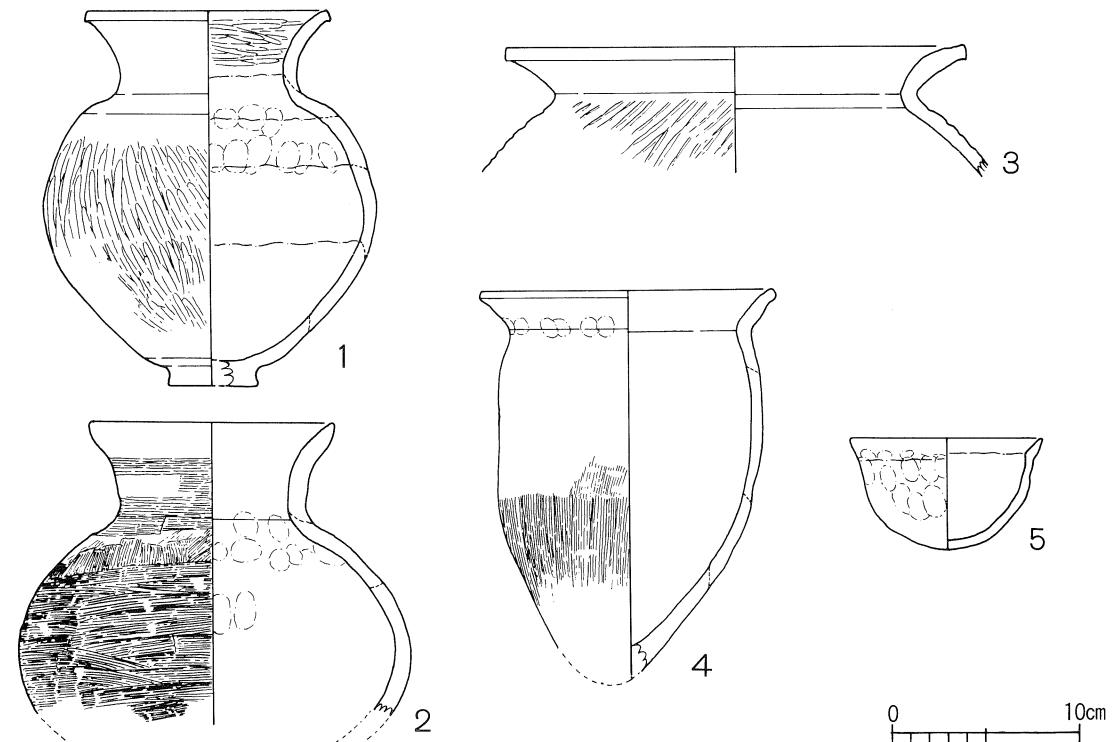


fig. 190 西3区河道8出土遺物

深さ 0.5m前後でトレンチ西南部で西方向に折れ曲がる。河道内は褐色粗砂と黃白色シルト層が堆積し、シルト層より手焙形土器が出土している。

S B01 トレンチ東南部中央に位置する南北棟の掘立柱建物である。南北2間、東西2間、桁行2.0m等間、梁間1.65m等間の規模を有する。建物中央に東柱をもつ。柱掘形はやや隅丸方形状を呈し、1辺0.5mから0.7m前後で、深さ0.3mである。柱痕を残すものもあり、直径0.2mの柱痕もみられる。柱掘形内より古墳時代の須恵器片が出土した。

S B02 調査地北西隅で検出した東西棟の掘立柱建物である。南北3間、東西2間で、梁間は1.2m等間、桁柱は北側で西に偏り、南側で東に偏る。各々1.7m、2.1mを計測する。東柱は検出されなかった。柱掘形は不定楕円形を呈し、桁柱は長径0.7m前後、深さ0.35m、梁柱は長径0.5m前後、深さ0.3mを計測する。柱痕跡は明瞭でない。

S B03 調査地北辺に沿って検出した東西棟の掘立柱建物である。南北3間以上、東西3間以上で、梁間は0.9m等間、桁行1.8m等間を計測する。東柱は検出されなかった。柱掘形は不定楕円形で長径0.5mを測り、深さは0.3m前後である。柱痕跡を残すものもあり、柱痕跡直径0.2m前後の円形である。

S B04 調査地中央東よりで確認した南北2間、東西2間以上の掘立柱建物である。建物の東側は、河道1によって削り込まれて不明である。南北・東西とも1.5m等間の柱間寸法である。直径0.3mの円形掘形をもつ東柱がある。柱掘形は長径0.6m前後の不定楕円形で、深さは0.25mを計測する。

S A01 調査地南東隅で検出した東西方向の柱列である。S B01と方向が一致し、南北に関連する柱掘形が存在しない。柱間の寸法は1.5mないし2.5mである。柱掘形は長径0.5m前後の楕円形で深さは0.1~0.3m前後を測る。柱痕跡を確認できたものもあり、直径0.2mの柱を用いたものと思われる。

G. 西4区 調査地は西3区の西隣にあたる。北東部では遺物包含層直下に赤褐色粘性砂質土の地山となり、遺構が掘り込まれている。一方、調査地東南部では淡褐色細砂が調査地のほぼ中半から南方向に堆積し、この前が遺構面となっている。淡褐色細砂層の中から5世紀中半頃のものと考えられる須恵器片が出土していて、なお下層にも遺構が存在する可能性がある。今回の調査は上層の遺構についてのみ実施し、下層遺構については次年度に持ち越すことになった。

第1次遺構面で検出した遺構は、柱穴約100箇所（掘立柱建物としてまとまるものは1棟）、長方形ないし長楕円形の土壙8基、竪穴住居址11棟、東西方向に流れる河道1箇所などである。

河道 遺物包含層を削り込んで東南方向に流れる河道を調査区北東隅で検出した。幅0.9m、深さ0.05~0.2mを測り、白色砂礫層を堆積させている。堆積土内から

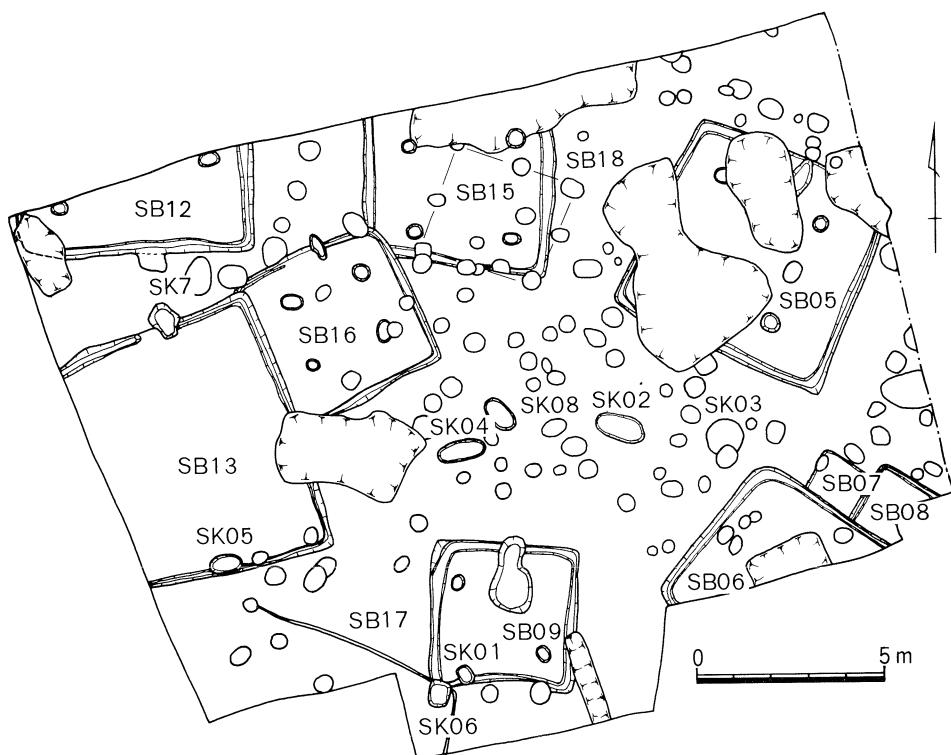


fig. 191 西4区東部遺構平面図

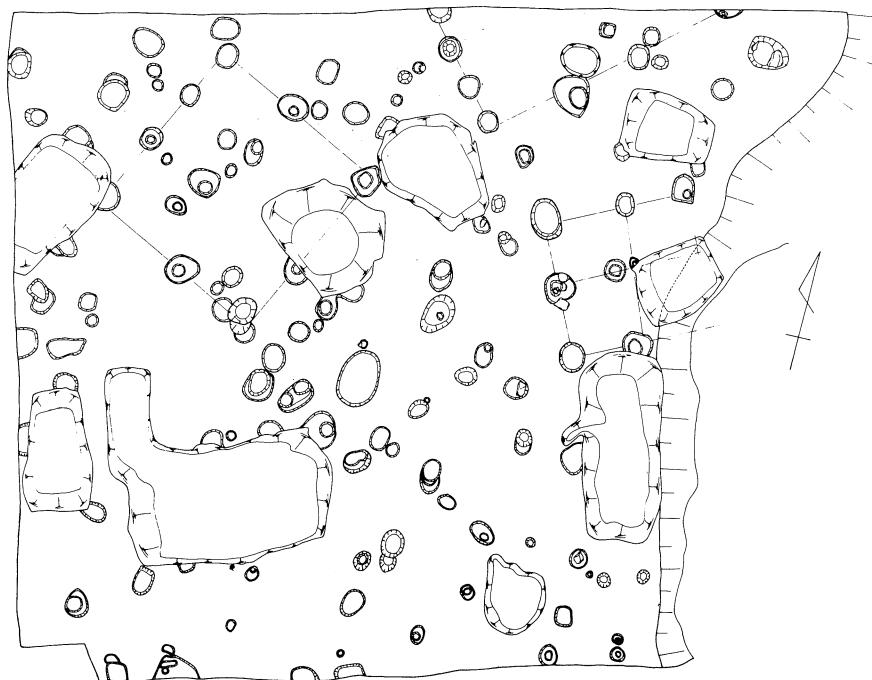


fig. 192 西3区西部遺構平面図

0 5m

古墳時代須恵器片、土師器片の出土がみられる。堆積土と位置から、西3区の河道1の北西部分と考えられる。

- S B18** 調査区中央北よりに検出した東西棟の掘立柱建物である。S B15が埋没した後、埋土を切り込んで建てられている。柱掘形は長径0.4~0.5mの楕円形を呈し、掘形底に河原石の根石を施す。東西2間、南北2間で、桁行1.5m等間、梁間1.5m等間である。
- S K01** 長辺1.0m、短辺0.7m、深さ0.3mを測る長方形の土壙で、掘形断面は台形状を呈する。掘形内は河原石が乱積され、河原石に密着してフイゴ羽口片、須恵器坏身片が出土している。埋土内は灰層が堆積し炭化材がまじっている。
- S K02** 長径1.35m、短径0.6m、深さ0.28mを測る長楕円形の土壙で、掘形断面は台形状を呈する。埋土内は炭まじりの灰層が充填されている。
- S K03** 長径1.15m、短径0.7m、深さ0.3mを測る長楕円形の土壙で、掘形断面は台形状を呈する。埋土は炭まじりの暗灰色土が充填されている。
- S K04** 長径1.65m、短径0.6m、深さ0.2mを測る長楕円形の土壙で、掘形断面は台形状を呈する。埋土は炭まじりの暗灰色土が充填されている。西側は柱穴によって切られている。
- S K05** S B13の南辺を切ってつくられた長楕円形の土壙で、長径1.35m、短径0.85m、深さ0.3mを測る。土壙の両小口には0.3mの偏平な河原石が埋置されている。埋土内から炭化材・須恵器坏蓋が出土した。
- S K06** S B09の南西コーナーを切ってつくられた楕円形の土壙で、長径1.0m、短径0.8m、深さ0.3mを測る。埋土は炭まじりの暗灰色土である。
- S K07** 長辺1.0m、短辺0.7m、深さ0.24mの長方形の土壙である。炭まじりの暗灰色土の埋土内より古墳時代須恵器片が出土している。
- S K08** 長径1.2m、短径0.8m、深さ0.3mの長楕円形の土壙で、上層の埋土内に炭化材が検出された。土壙底に密着して須恵器坏身片が出土している。なお、東南部の小口部を柱穴によって切られている。
- S B05** 調査中央部東端で検出した竪穴住居址で、床面の約3分の1は現代の攪乱によって失われている。東西5.6m、南北5.2mの方形の平面形をもち、北辺のやや東よりに煙出し部が明らかなカマドがつくりつけられている。床面は厚さ5cm~15cm程度、暗灰色土によって床が貼られている。支柱穴は3箇所確認した。南北・東西とも柱間距離3.0mで、南北の支柱穴は攪乱壙のため破壊されている。竪穴壁体の内側にはカマド造り付け部を除いて、幅20cm、深さ4cmの周壁溝が巡っている。
- S B06** 調査地南東部で検出した竪穴住居址で南部は調査地外となる。中央部は攪乱壙によって床面が欠失し、南北4.3m、東西4.0m以上の方形の平面形を呈す

- る。カマドは検出されていない。住居址床面は、下層の遺物包含層になっており、支柱穴は検出できなかった。幅15cm、深さ4cmの周壁溝が巡る。
- S B07** 南側はS B06、西側をS B08によって切られ、北西隅のみを検出した方形の竪穴住居址である。削平のため床面がのこらず、周壁溝も確認できない。
- S B08** 南側をS B06によって切られる方形の竪穴住居址である。西側は調査地外に拡がり、周壁溝が巡る。
- S B09** 調査地中央南端に位置し、南西隅を竪穴住居址S B17によって切られる方形の竪穴住居址で、東西3.7m、南北3.9mの規模を測る。北辺中央にカマドがつくりつけられ、住居址外に煙道部がのびる。煙道の幅0.4m、焚口幅1.0mを測り、カマド内には焼土、灰層が堆積し、カマド底面に須恵器甕片が敷かれた状態で出土した。竪穴の内側に幅12cm、深さ10cm前後の周壁溝が巡る。支柱は3箇所確認した。柱間距離は南北2.2m、東西2.3mを計測する。
- S B12** 調査地北西端で検出され、住居址の北半は調査区域外となる。東西6.3m、南北3.5m以上の方形の竪穴住居址で、幅5cm、深さ3cmの周壁溝が巡る。床面で、須恵器高环・土師器甕が南東部で散乱した状態で出土している。カマドは現在のところ検出されていない。
- S B13** 調査地西端で検出した南北6.7m、東西5.4m以上の方形の竪穴住居址で、住居址の西半は調査区域外となる。住居址壁体は北側で高さ30cm残存し、北辺にカマドがつくりつけられる。床は5cm~10cm程度の貼り土が施されている。周壁溝はカマド部分を除いて幅10cm、深さ5cm前後で全周する。北東隅で甕口縁部、南辺周壁溝で環蓋が出土した。
- S B14** 竪穴住居址S B15が埋没し、削平された後に埋土上面に黄褐色粘土を貼り、住居床面をつくっている。床土である黄褐色粘土は厚さ3cmに貼られている。南側に幅2.5cm、深さ5cmの周壁溝がコの字形に巡る。床面のひろがりと、残存周壁溝から復原される竪穴住居址の規模は1辺5.2mの方形竪穴住居址と考えられる。
- S B15** 調査地北辺中央で検出した

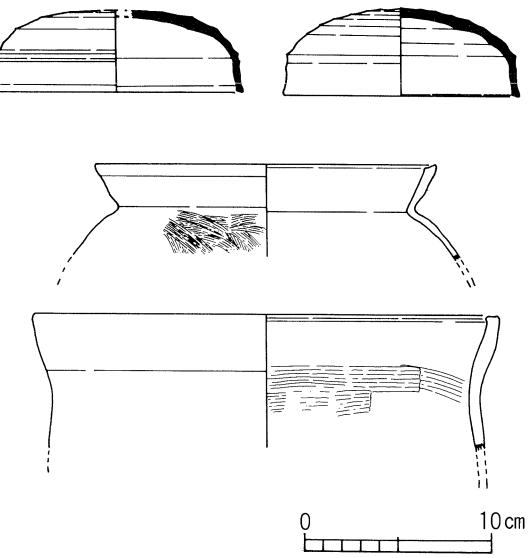


fig. 193 S B13出土土器実測図

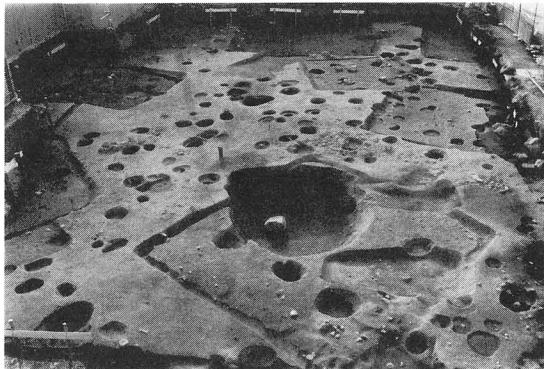


fig. 194 西4区調査地全景

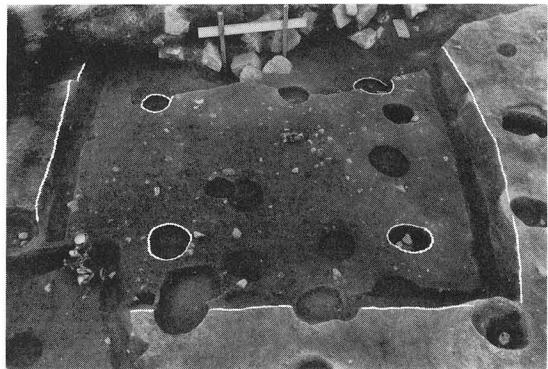


fig. 195 西4区S B15

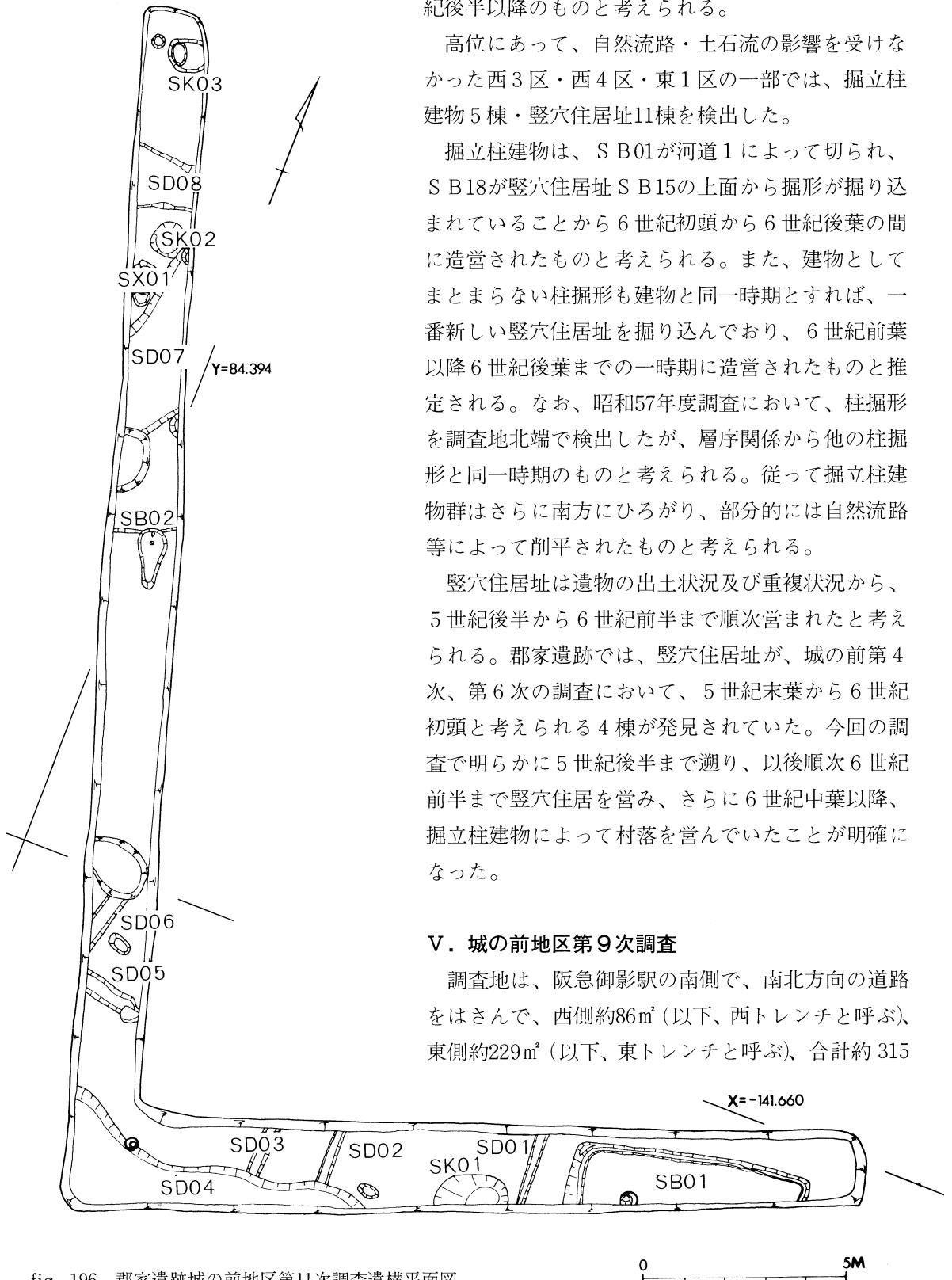
方形竪穴住居址で、西辺と床面中央を攪乱によって破壊され、住居址北側は調査区域外に広がっている。竪穴住居址西南隅部はS B16によって切られており、東西5.0m、南3.5m以上の規模を有する。カマドは検出されていない。周壁溝が幅20cm、深さ6cmで全周する。支柱穴は4箇所確認され、東西2.6m、南北2.5mの柱間距離を計測する。

S B16 S B15の西隣で検出された東西4.2m、南北4.3mの方形竪穴住居址で、S B15の西南コーナー部を切り、西辺S B13に切られる。北壁中央にカマドをつくりつける。周壁溝はカマド部分を除いて全周する。支柱穴は4箇所確認された。南北の柱間寸法1.8m、東西の柱間距離2.0mを測る。北東隅で古墳時代須恵器壺蓋、土師器甕の破片が集中的に出土した。

S B17 調査地北西隅で検出した方形竪穴住居址で、北西部は現代の攪乱壙によって全体的に削平を被っている。このため、床面まで削平され、竪穴住居址北辺と東辺の一部を検出できたに過ぎず、周壁溝は確認できなかった。北辺にナスビ形の土壙がつくりつけられ、土壙内には炭を含む灰色土が充填されており、カマドの痕跡と考えられる。現存する住居址の規模は、東西5.6m以上、南北1.6m以上を測る。

H.まとめ 城の前地区第7次調査地内では、南北に設定した弓場線予定地内の西1区・西2区・東2区・東3区の各調査区において、弥生時代後期～中世に至るまでの自然河道が北西から南東に向かって、重なるように流路を形成していた。特に昭和57年度天神川河川改修に伴う調査地の西隣にあたる西2区では弥生時代後期の土器が大量に出土した。また、わずかに残った自然流路の影響を受けていない部分では、西1区南部で中世の柱穴列を検出した。

東1区の北東部と西3区の北東部においては比較的新しい時期の土石流が遺構上面を削り込んでいる。しかし、流路の影響を受けていない東1区の南部では、細砂が被覆する水田状の畦畔を検出した。水田内からの出土遺物から6世



V. 城の前地区第9次調査

調査地は、阪急御影駅の南側で、南北方向の道路をはさんで、西側約86m²（以下、西トレーニングと呼ぶ）、東側約229m²（以下、東トレーニングと呼ぶ）、合計約315

fig. 196 郡家遺跡城の前地区第11次調査遺構平面図

m²について調査を行った。西トレンチでは、遺構・遺物は発見されなかった。

東トレンチ 東トレンチでは、トレンチ東半で南北に伸びる石垣が検出された。石垣はおそらく、近世以降の水田に伴うものと考えられる。

VI. 城の前地区第11次調査

1. はじめに 調査地は第6次調査地の東側に当たり、地形は西から東へ向かって緩やかに上っている。約1.5m幅で、南北方向に約30m、東西方向に約18m、計約74m²について調査を行った。

2. 基本層序 第1層灰色土、第2層淡褐色灰土、第3層黃褐色土、第4層灰褐色土、第5層淡褐色砂（東西方向トレンチでは淡茶褐色砂質土）の順に堆積する。第1層は中世、第2層・第3層・第4層は古墳時代と中世の遺物を含む包含層である。第5層は遺物を含まない層であり、これをベースにして遺構が構築されている。

3. 中世の遺構と遺物

S D 07 幅約3～4m、深さ約0.4mの溝で、肩がしっかりしており、人工的に造られたものと思われる。溝中から須恵器・土師器・瓦器片、土錐、釘が出土した。

S K 02 長径約0.9m、短径約0.8mの楕円形の土壙で、深さは約0.35mある。須恵器・土師器・瓦器片が出土した。

S D 08 幅約1.1～1.7m、深さ約0.3mで自然流路と考えられる。須恵器・土師器・瓦器片が出土した。

4. 古墳時代後期の遺構と遺物

古墳時代後期の遺構としては、竪穴住居址、溝、土壙、ピットが検出された。

S B 01 北辺約5.8mの規模を持つ方形竪穴住居址の北端部分である。南部は調査区外にあり、住宅によってすでに破壊されていると考えられる。深さは約0.35mで周壁溝が巡っている。西側のトレンチ壁ぎわで柱穴が1か所検出された。

住居址北端中央部には、カマドの支柱石と思われる石が2つあり、その周辺の床面から、須恵器壊蓋・壊身・短頸壺・甕・壺・土師器がまとまって出土した。須恵器短頸壺・甕・壺は割れて散乱した状態で検出された。この他、住居址床面では、須恵器高壺(3個体)・壊蓋・壊身・土師器・甕が発見された。これらの床面の遺物から、この住居址は6世紀初頭のものと考えられる。また、柱穴内からは、土師器・須恵器壊が出土している。

S B 02 約1.35×0.7mの規模を持つカマドで、深さは約0.3mである。支柱石が1個見つかっており、カマド内で、土師器甕・甕が検出された。住居址部分は土石流によって破壊されている。

S D 01・02 幅約0.3m、深さ約0.09～0.11mのほぼ平行に流れる細い溝で、人工的なものと考えられる。須恵器・土師器片が出土している。

- S D04 S D02・03が取り付く溝で、上層から6世紀初頭の須恵器壺身・甕が出土。
- S D05・06 S D05とS D06は上層ではつながっている。S D05は出土遺物がなく、S D06からは須恵器・土師器片が出土している。上層では6世紀後半の須恵器壺身その他、須恵器・土師器、土錐、炭が見つかっている。
- S X01 調査区外に伸び、S Dに切られる落ち込みで、形状がはっきりしない。脚部の欠損した須恵器無蓋高壺の上に、土師器甕が横向けにのる形で検出された。また、その横からは、5世紀後半の須恵器高壺蓋と滑石製紡錘車が出土している。
- 5.まとめ** 今回の調査は面積の狭いトレンチ調査であったが、残存状態のよい竪穴住居址が検出され、床面から今年度の調査の中で一番まとまった遺物が出土した。またS X01からも、城の前地区第4次調査について滑石製紡錘車が発見されたのをはじめ、良好な一括資料を得ることができた。
- 古墳時代後期の竪穴住居址が発見されたことにより、第4次調査区、第6次調査区に広がる古墳時代後期の集落が、今回の調査区まで伸びることが明らかになった。

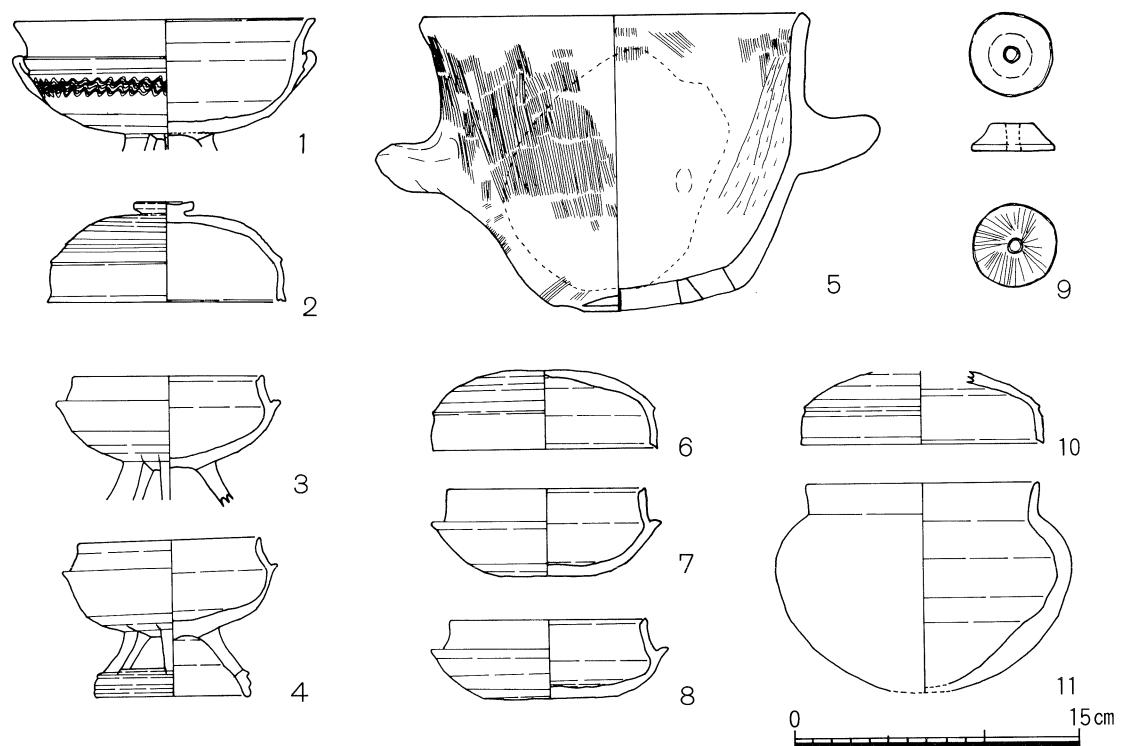


fig. 197 城の前地区第11次調査出土遺物実測図

(1.2.5.9 SX01、他はSB01)

17. 北神ニュータウン内遺跡

北神第4地点遺跡

1. 調査経過 第4地点遺跡は、昭和56・57・58年度の試掘調査により、弥生時代中期末～後期の集落址であることが確認された。遺構および遺物の分布する範囲は、約3haで、竪穴住居址・土壙・溝状遺構等を確認している。遺構は、保存状態を良好に保つため、精査せず、すべて埋め戻している。また、I-A・B地区では、奈良時代の須恵器片がわずかではあるが出土しており、これまでの例から、付近に蔵骨器が埋置されているものと思われる。

今年度の発掘調査対象地区は、都市計画道路長尾線の法面にかかるI-13～15地区、8期工事予定地区内のI-A・B、II-41～51地区の3ヶ所である。

2. 調査結果 標高209m前後を測る尾根上

(1) I-13～15地区に立地する。試掘調査時に、弥生土器（中期末）が土壙中より出土している。

調査は、尾根平坦部と比較的傾斜の緩やかな斜面を対象とした。遺構面までは、丘陵上であり比較的浅く、現地表下0.2～0.3mである。その間に顯著な遺物包含層は認められず、急斜面で、しかも遺跡存続期間の短かったことをうかがわせる。

遺構 遺構は、尾根平坦部よりやや西に下った部分に集中し、土壙4基（SK01～04）、段状遺構1基（SX01）を検出した。

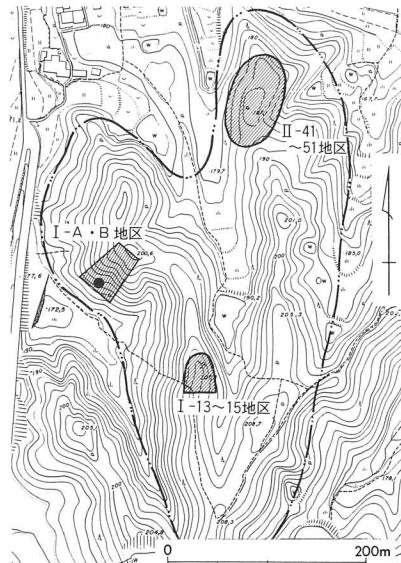


fig. 198 調査地区位置図

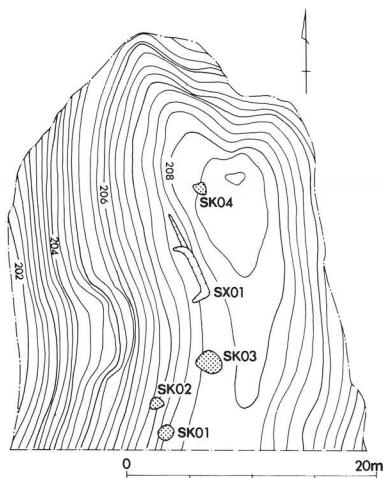


fig. 199 I-13～15地区遺構配置図

土 壤

土壌は、長径1~2m、深さ0.4~0.6mの不整形なもので、土器を多量に包含するもの（SK04）、焼土塊を包含するもの（SK03）、無遺物のもの（SK01・02）がある。それぞれの用途については明らかにし得ないが、調査区南方に住居址群の存在することをうかがわせる。焼土塊を包含する土壌については丘陵上の遺跡の場合、のろし場や屋外炉等の用途が考えられる

が、SK03については、その焼土塊が、土壌底面より浮いていること、壁面に火熱による赤化がみられないことなどから、どちらでもないようである。

段状遺構

段状遺構は、幅0.4~0.6m、深さ0.1~0.2m、長さ4.5mの溝を「コ」の字形に掘り、それに連接して、幅、深さとも同規模の溝を3.3mのばしている。溝の斜面下方側は0.5~1.2m程度の幅で、平坦面が造り出されている。これと類似する遺構は、丘陵上に存在するほとんどの遺跡で共通して見られるものであるが、その用途については、必ずしも明らかにし得ていない。

以上が検出遺構の概略であるが、これらの時期は、次に述べる遺物の検討から、弥生時代中期末（畿内第IV様式）に属するものである。

遺 物

土 器

土器・石器とともにその出土量は乏しい。土器は、SK04より広口壺、短頸壺、高壺、甕などが出土しているが、いずれも復元は不可能で、その全形を知ることはできない。しかし、その形態、文様等から弥生時代中期末（畿内第IV様式）であることが確認できる。

石 器

石器は、打製石器が皆無である。しかし、製作時に生ずるサヌカイトのフレイクは出土している。

磨製石器は、表土層直下から、太形蛤刃石斧、柱状片刃石斧が各1点出土している。いずれも完形品で、刃部には使用痕がみられる。斜面下方からの出土で、その出土層位とも合わせ考えると、SX01あたりから転落したものと推察される。

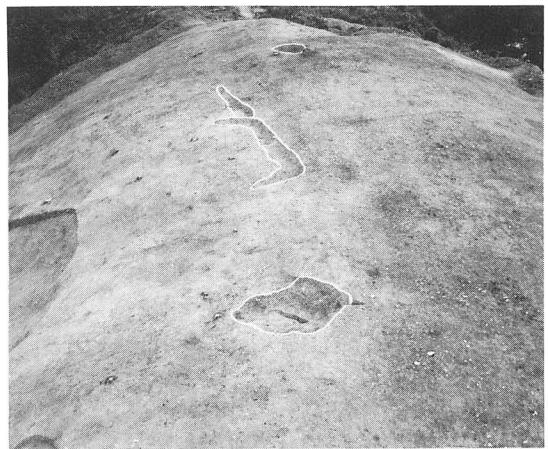
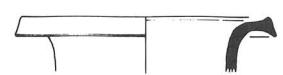
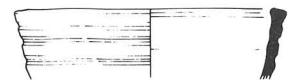


fig. 200 I-13~15地区全景



0 10cm

fig. 201 SK04出土土器

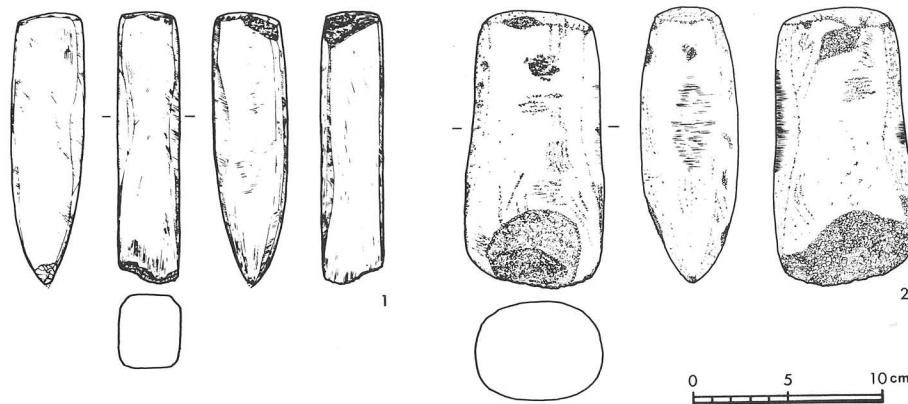


fig. 202 磨製石器実測図

(2) II-41～51地区 当遺跡の最北端で、標高 189m前後を測る丘陵先端部に位置する。尾根平坦部は、幅約30m、長さ約70mとかなり広い。

試掘に伴い樹木を伐採したところ、尾根中央部で3か所の大きなくぼみが認められ、竪穴住居址ではないかと考えられていた。そして、試掘時には、円形プランの住居址と推定される土の変化を確認している。

遺構 当地区でも遺構面までの深さは、現表土下0.2～0.3mと浅く、3基の住居址は、先述のように表土上からもその位置が確認できた。

竪穴住居址 竪穴住居址は、3基で、尾根先端部よりの平坦部に12～13mの間隔を置き存在する。

いずれも円形プランであるがやや方形に近いものもある。

S B01 S B01は、直径 4.9～5.3mで、周壁は、斜面の高い方で、0.5mと残存状況が良好である。幅0.15m、深さ 0.1m前後の周壁溝がとぎれることなく巡り、



fig. 203 北神第4地点II-41～51地区全景

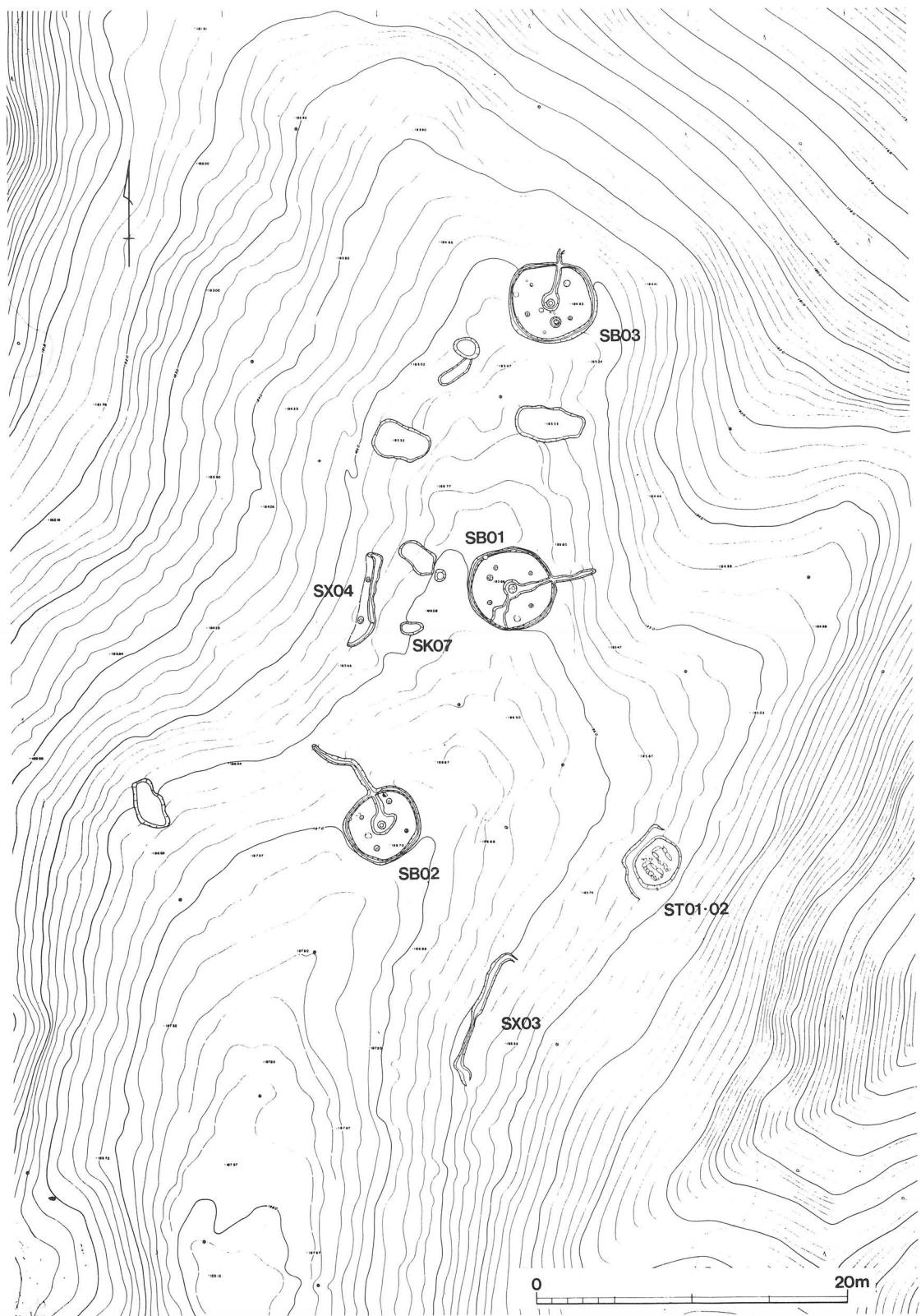


fig. 204 II-41~51地区遺構平面図

中央土壙より発した排水溝に連結する。中央土壙は2段に掘られており、上部での径は、1.2m、下部での径は0.6m、深さ0.7mを測る。埋土中には、炭・灰を含み、最下層では炭層が、約5cm堆積していた。

排水溝は、東側斜面に向かって、住居址外へ2.7mのびている。「排水溝」と呼称されるものの、住居址内に侵入した水は、中央土壙がほぼ満つる程度まで溜まなければ流出しない。中央土壙の性格とも関わり、今後検討されるべき遺構である。柱穴は、4か所存在し、柱間は2.0～2.5mでほぼ正方形である。床面には、建築材(垂木)と思われる炭化物が0.4～0.5mの間隔を置き、平行に並んでいた。このことから、当住居址は、火災により放棄された可能性が高い。

S B 02 S B 02は、直径4.0～4.5mで、形態はS B 01と同様である。排水溝は、西斜面向かって約5mのびるが、住居址から約2mの部分で「く」の字状に屈曲する。また、屈曲する部分までは、その断面形が「V」字形で、深さは約0.4mである。

S B 03 S B 03は、尾根最北端の斜面際に位置し、直径4.7～5.2mで、形態は先の2棟と同様である。排水溝は、北の斜面に向かってのびる。斜面までの距離が短いため、住居址外へは約1.0mにとどまる。当住居址は、北辺周壁際でサヌカイトのフレイク、チップの集積が見られた。その数は、約300点で、フレイクの接合も可能で、この場所で打製石器の製作が行われていたと判断される。

S K 05 また、当住居址中央土壙の一部と重なり、直径0.5～0.6mの土壙(S K 05)が検出された。埋土の大部分は、炭化物で、底面には土師器皿2点、炭化した柿の実と考えられるものが10数点出土している。当土壙は、土師器から12世紀代(平安時代末)に属すると考えられる。

墓 址 墓址は、箱式石棺2基(S T01・02)を埋葬施設とする方形台状墓的な遺構が検出された。周囲に平面台形状の溝を掘り、その内側に同形態の盛土を施し

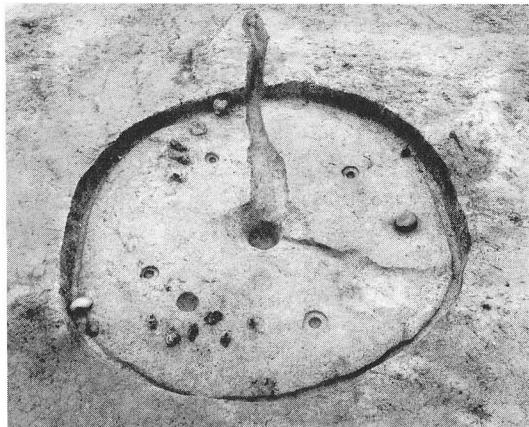


fig. 205 S B 01

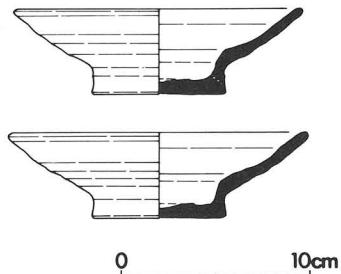


fig. 206 S K 05出土遺物

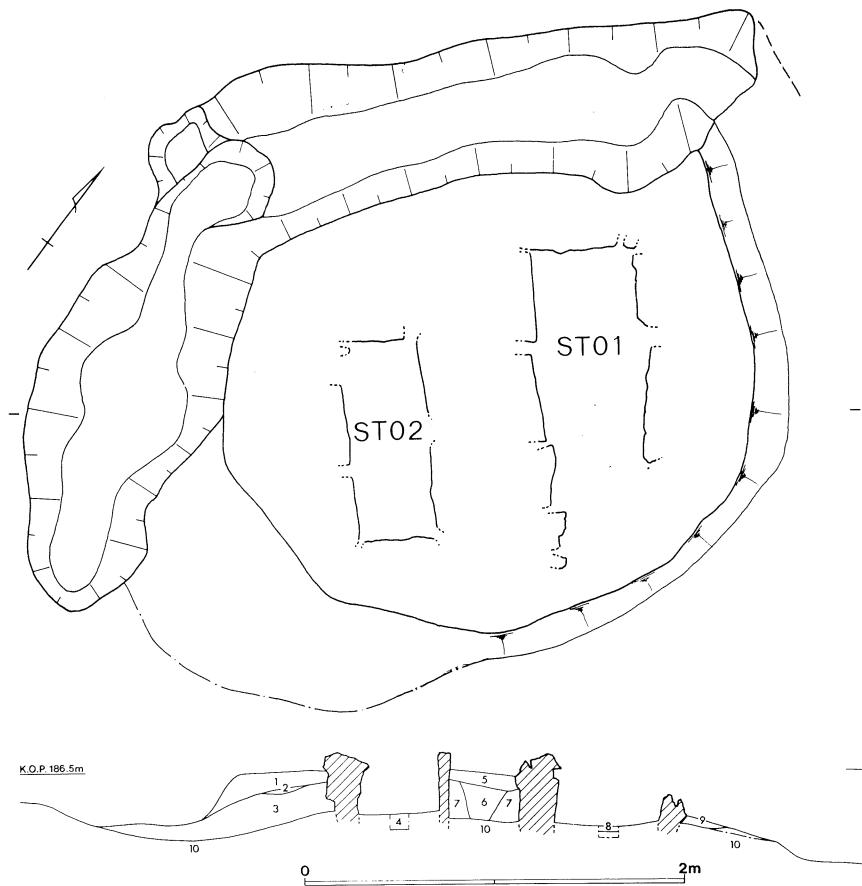


fig. 207 墓址実測図

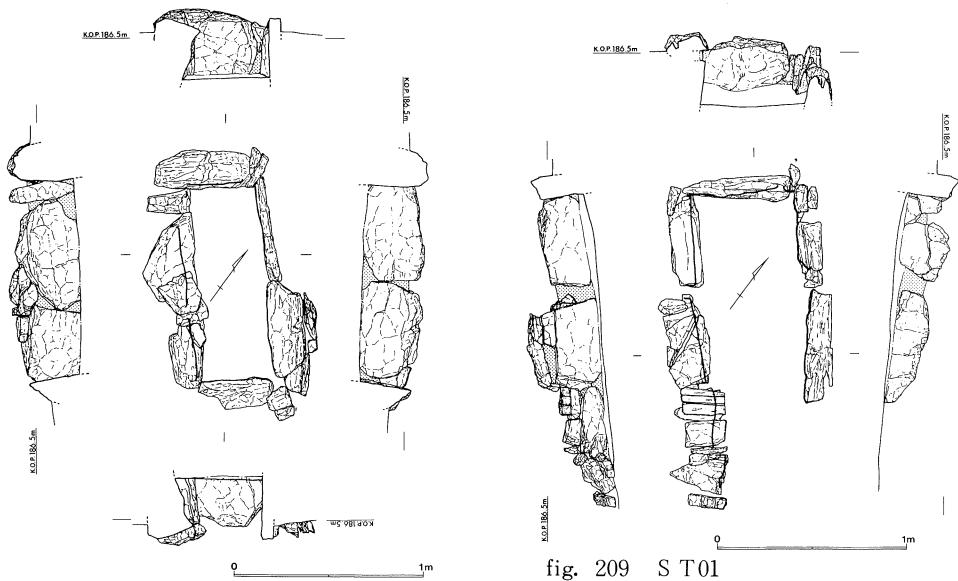


fig. 208 S T02

fig. 209 S T01

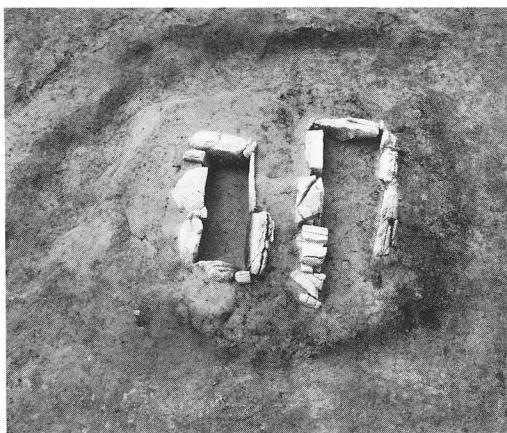


fig. 210 墓址全景



fig. 211 墓址近景

ている。箱式石棺は、2基が平行に築かれ、いずれも蓋石は破損して、内部に落ち込んでいた。

S T 01・02 S T 01は、長さ1.65m以上、最大幅0.64m、高さ0.37mである。S T 02は、小形で、長さ1.05m、最大幅0.43m、高さ0.37mである。いずれも、付近で産出する凝灰質砂岩の板石で造られ、掘形をもたない。その構築は、地山面に石を据え、盛土で支えることを基本とし、地山の低い部分は、盛土を施した上に石を置き、更に土を盛っている。

S T 01・02はその位置関係、盛土方法から、同時期に構築されたと考えられる。

被葬者については、限定することは困難であるが、周溝から出土した土器がS B 01～03出土の土器と同時期と判断できることから、それら住居址を営んだ人々と密接に関わりのある人物であろうことが推定される。

S X 03・04 S X 03・04は、共に「コ」の字形の溝状の遺構である。S X 03は、I-13～15地区出土のS X 01と同様の性格を有する段状遺構と考えられ、溝は、幅0.6m前後、深さ0.2m前後、長さ約9mで、1m程度の平坦面を造り出す。S X 04も同様の形態を示すが、長さ6.0mと規模が小さく、また幅0.7mの平坦面に柱間2.7mの柱穴を有することから、丘陵上の遺跡でよくみられる斜面下方に盛土を施した住居址と考えられる。

土壙は、8基存在したが、いずれも不整形で浅く、出土遺物もほとんどなく、その性格は不明である。ただS K 07は、幅0.6～0.8m、長さ1.5m、深さ0.2mの長方形の整った形をしており、埋土中には、火熱を受けた扁平な凝灰質砂岩や炭層が認められ、屋外炉である可能性が強い。

湧水点 以上の他に、遺構として把えることは難しいが、重要なものに湧水点がある。S B 02の西南約30mの斜面に、真夏もかれることなく水の湧出する地点があつ

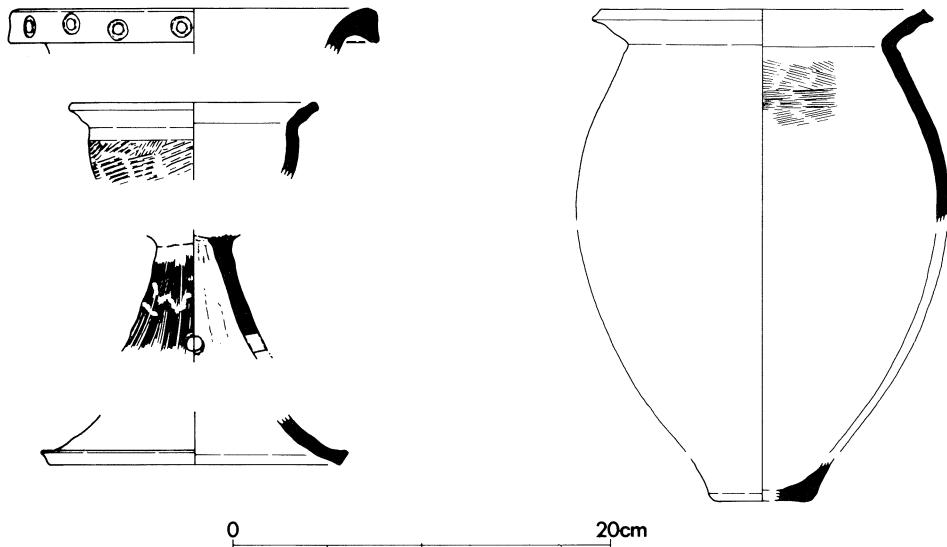


fig. 212 S B01出土土器

た。他の丘陵上の遺跡でも、住居址からさほど遠くない所に湧水点を確認できる例が多く、生活用水を取水していたと考えられる。

遺 物 土器・石器ともに、その出土量は少なく、遺構以外からの出土はほとんどない。

土 器 土器は、S B01で口縁部端面に竹管紋を施す広口壺、叩き目痕を残す小形鉢、甌や高壺などが出土している。

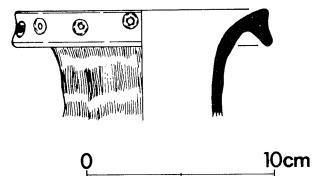


fig. 213 S B02出土土器

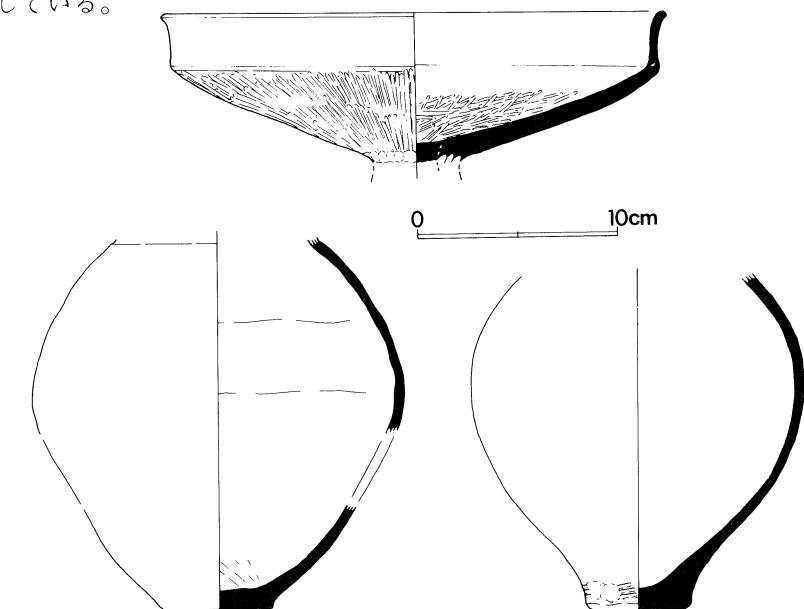


fig. 214 S B03出土土器

S B02でも、やはり口縁部端面に竹管紋を配した広口壺が出土している。

S B03では、短頸壺、高壺が出土している。

これらは、いずれも弥生時代後期（畿内第V様式）の前半に属するものであり、3棟の住居址は、同時に存在していたと考えられる。

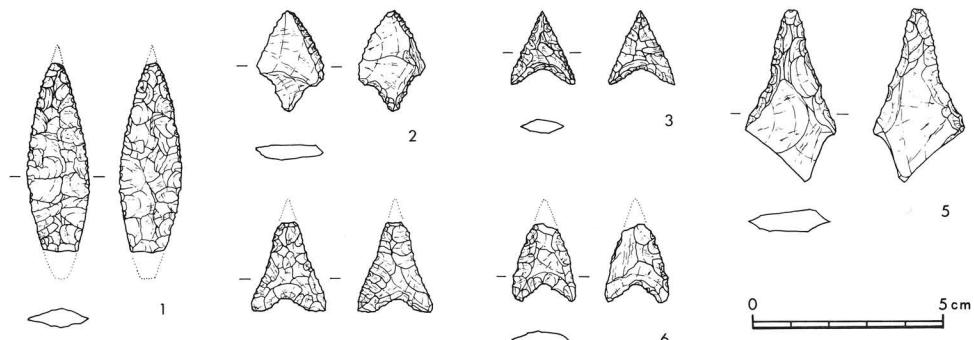


fig. 215 石鎌

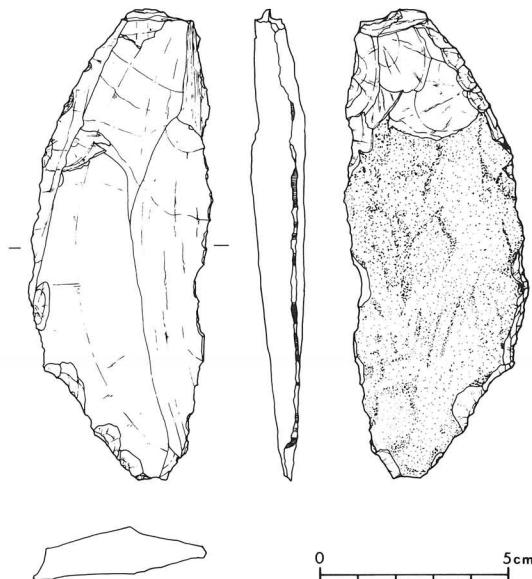


fig. 216 S B01出土打製刃器



fig. 217 S B03サヌカイト集積状況

石 器

石器は、石鎌が各住居址から1～2点と、遺構面から3点の計8点出土している。内訳は、平基無茎式1点、凹基無茎式4点、凸基無茎式1点、凸基有茎式1点、未製品1点である。以上の他に、縄文時代に属すると考えられるものが3点出土している。

また、S B01からは、石庖丁の形態を有する打製の刃器が出土している。刃部は、使用による磨滅が顕著に見られることから、石庖丁的な使用がなされていたと推定される。

一般的に、弥生時代後期は、石器が消滅するといわれているが、当遺跡では、S B 03のサヌカイト片の集積も顯著であることから、打製石器のみが残存していたようである。

ガラス玉 以上、土器・石器の他に、S B 03からガラス玉が5点出土している。3点はブルー、2点はコバルトブルーで、いずれもアルカリ石灰ガラスである。県下での弥生時代集落址出土のガラス玉はきわめて少なく、芦屋市会下山、氷上郡春日町七日市、神戸市今津遺跡に次ぐものである。

(3) I - A・B 試掘時に奈良時代の土器片が出
地区 土し、藏骨器の埋置が予想された
地点である。斜面中腹よりやや下
った標高188m付近に予想通り藏
骨器が埋置されていた。

藏骨器 藏骨器は、直径0.36mの土壌内に須恵器の短頸壺を置き、須恵器の壺蓋、土師器の盤で二重に蓋をしていた。短頸壺内には、頸部付近まで土に混り、骨片が入れられている。奈良時代前半に属するものであろう。

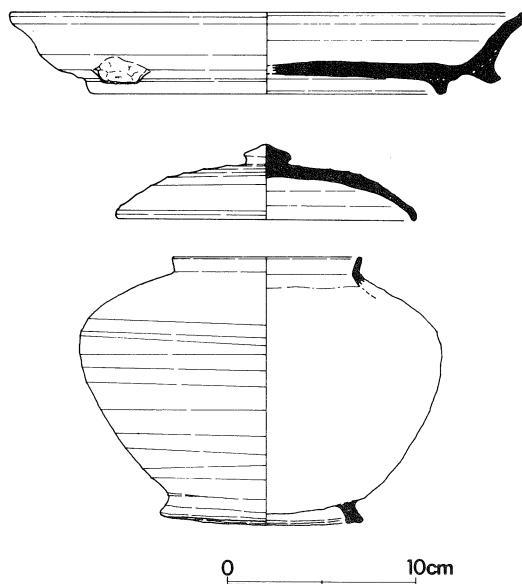


fig. 219 藏骨器遺物実測図

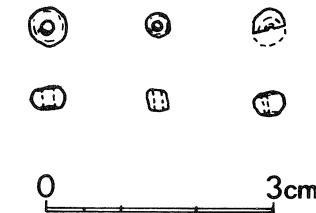


fig. 218 S B 03出土ガラス玉

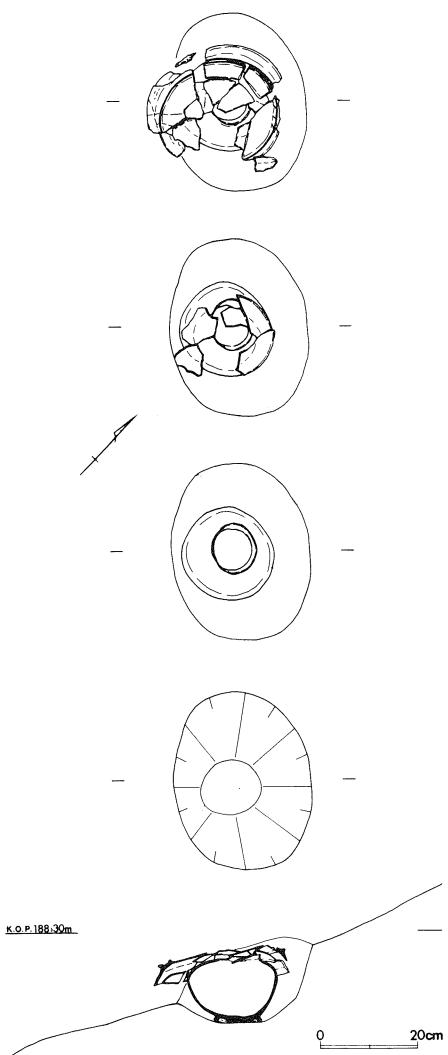


fig. 220 藏骨器出土状況

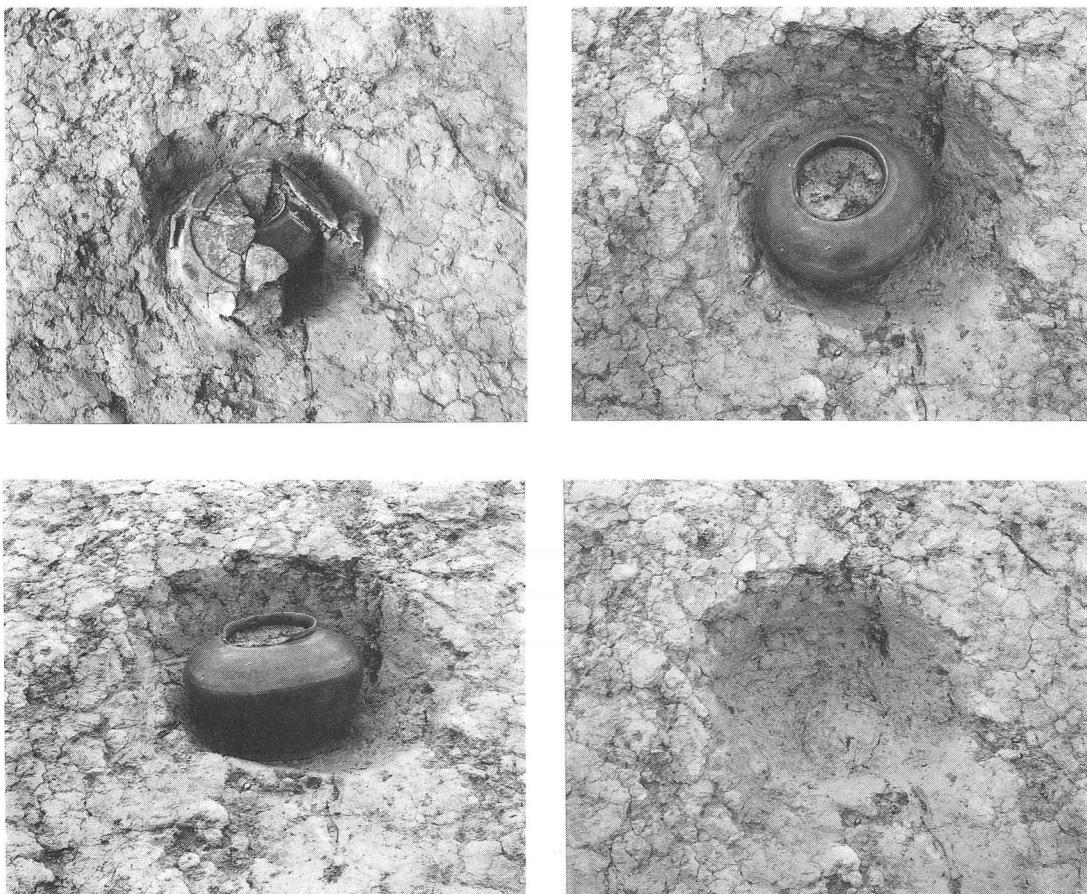


fig. 221 藏骨器

3.まとめ 以上が第4地点遺跡に関する今年度調査の概略である。以下、簡略にその成果をまとめてみる。

- ① 第4地点遺跡は、試掘結果から中期末を中心に存在した遺跡であろうと考えられていたが、後期にも継続することが明らかになった。
 - ② 住居と墓は、一般的に境界を有するか地区を異にするが、当遺跡では、居住域の中に造営している。
 - ③ 住居址の重複、建て替えなどがみられず、また遺物量もきわめて少ないことから、ごく短期間で居住地を変更していると考えられる。
 - ④ 一般的に後期には、石器の使用は激減するが、当遺跡では、打製石器の使用が認められる。
 - ⑤ 周辺の低地には、奈良～室町時代の遺跡が濃密に分布しているが、それらの時期における丘陵地の利用は、ほとんど認められない。
- 以上が、主要な成果であるが、今年度の調査は、当遺跡のごく一部であり、全体を言い表すことはできない。しかし、弥生時代集落址としては、北摂地域有数のものであることはいうまでもない。

北神第5・6地点遺跡

1. 調査経過 昨年度の試掘調査の結果、石材採掘址であることが判明したため、今年度発掘調査を再度実施した。なお、調査期間が限られていたため、範囲確認にとどめ、次年度以降改めて本格的な調査を実施することにした。

調査面積は両地点あわせて約300m²である。

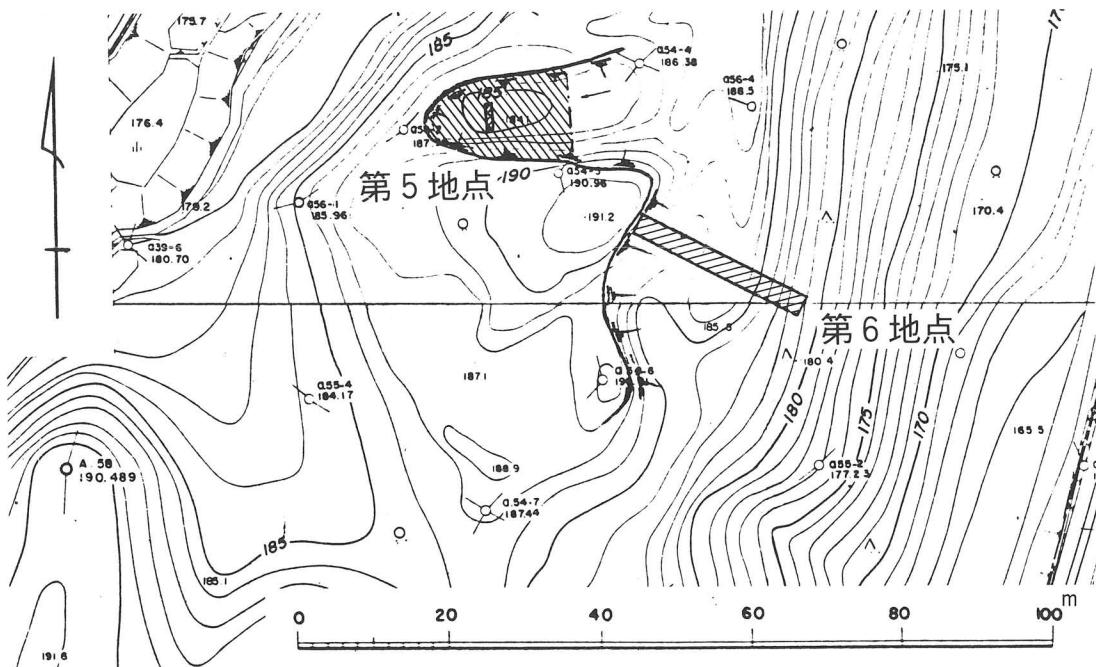


fig. 222 北神第5、6地点調査区位置図

2. 調査概要 第5地点は東方より入り込む小さな谷状を呈しており、調整石材が一点遺存するだけであった。調査はこの石材を中心に実施した。ここでは便宜的に遺存する石材より西方をA区、東方をB区と呼ぶ。

A区は腐植土（約0.2m）、岩盤の風化した粘性の強い黄灰色土（約0.3～0.4m）を除去すると、岩盤露頭の平坦面に到達した。この平坦面には採掘途中で放棄したと思われる石材が5個認められる。岩質は砂粒を多く含み、節理がそれほど顕著ではない凝灰質の砂岩である。採掘は横方向に走る岩の節理をうまく利用して行っている。岩盤の厚さは、石材の遺存する平坦面から約2mを測る。なお、遺存する調整石材の裏面はノミで削った細かい調整痕が認められる。

B区はA区と同様に節理を利用して採掘を行っているが、岩質があまり砂粒を含まない堅緻なもので、板状に割れやすいため、階段状に行った採掘が非常に顕著である。B区の埋土は腐植土（約0.2m）の後、碁盤大の石を中心に最大径3mもの岩を含むくず石で構成される層と黒褐色土層（厚さ0.2～0.3m）

が互層になっている。最も深い平坦面は面積約15m²で、先述したA区の平坦面との比高は約4.5mを測り、A・B区をあわせてかなりの量の石材を探掘していたことが想像できる。



fig. 223 第5地点調査前現況



fig. 224 第5地点全景



fig. 225 第5地点近景



fig. 226 第5地点全景

第6地点

幅3m×長さ25mのトレンチを設定して調査を行った。埋没状況は第5地点と基本的には同一で、腐植土(約0.2m)の後は大小さまざまなくず石で構成される層が続く。現地表面から約3.5mで岩盤の露頭する平坦な底面に至る。岩質は第5地点のB区と同一のものである。

トレンチの最奥部には底面よりそれぞれ約1.5m高い岩盤による平坦面があることから、トレンチに直交する方向で探掘していたものと思われる。また、底面の西北隅の部分には、いびつな浅いピット状を呈する岩盤から岩質の異なる円柱状の岩があたかも突き出ているかのような特殊な遺構(?)も検出された。



fig. 227 第6地点全景



fig. 228 第6地点ヤガネ出土状況

3. 出土遺物 両地点の出土遺物は鉄製品がほとんどで、いずれも石の採掘の際使用する道具と思われる。なお、腐植土層から古墳時代後期と中世の須恵器も出土している。古墳時代の須恵器については、昨年度実施した第7地点北方の試掘で出土した須恵器と接合可能なものがあるため、上部から後世に流れ込んできたものと判断される。

	第5地点	第6地点
ゲンノウ	1	0
ヤガネ	6	9
ノミ	3	0
円板(セリガネ?)	2	1
鎌	1	1
用途不明	1	0
その他	1	5
合計	15	16

4.まとめ 今回の試掘調査では、石の採掘の時期を直接限定できる資料には恵まれなかった。

道場川原から三田市境にかけての地域には、石の採掘址と思われる地点が散在し、その中には戦前まで続いていた場所もあるとされる。当地点は石を採掘したという古文献や伝承等が知られていない点やその埋没状況からみて、近代以降のものとして把えるのは困難である。また一方で、鉄製道具類の組み合わせからみると、単一形態の組成ではなく、多様化し、用途による分化が認められる。以上のような点を考慮すれば、その時期は、近世の範囲に収まるものとして大過なかろう。

やま だしょうがっこうない
18. 山田小学校内遺跡

1. はじめに 山田小学校内遺跡は、神戸市北区山田町中に所在しており、六甲山地と帝釈山地を水源として東から西へ流れる山田川の南河岸段丘上に立地している。

山田川の北側には、淡河との境をなす帝釈連山がそびえ、その山麓に平安時代中期・後期の仏像が安置された無動寺やもと無動寺の鎮守社である、室町時代前期の若王子神社がある。調査地の対岸に、室町時代後期の八幡神社三重塔を望むことができる。また山田川の中流域には、日本最古の民家である箱木千年家（室町時代）が残っている。

山田小学校の校舎建て替え工事に先立ち、試掘調査を行ったところ、中世の遺物包含層が確認されたため、昭和58年度、約800m²について第1次調査（校舎予定地）を実施した。

今回は第1次調査区の南側（運動場予定地）、南北40m、東西24mの約870 m²について第2次調査を実施した。

2. 周辺遺跡 山田町周辺の遺跡の中で最古のものとして、今から約1万年前（旧石器時代終末期）の沢遺跡（山田町下谷上）がある。沢遺跡からはサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。

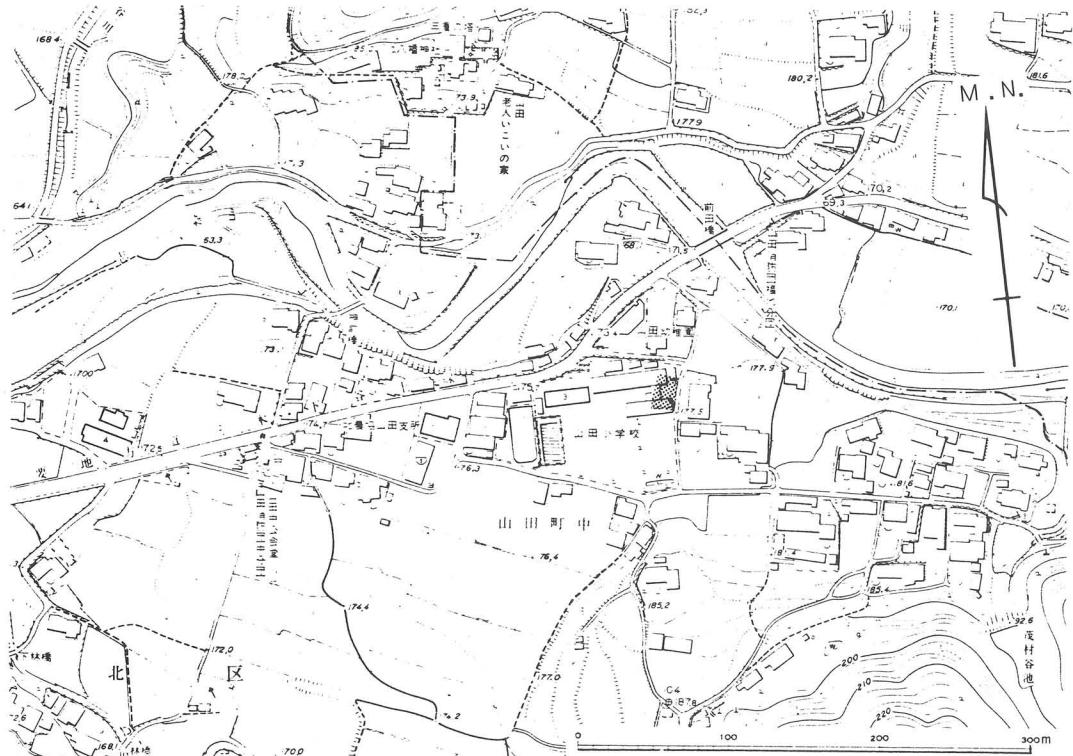


fig. 229 位置図

次の縄文時代には、小部ソバカ坂で遺跡が発見されているが、弥生時代の遺跡は、現在のところほとんど見つかっていない。古墳時代についても、上谷上の焼尾古墳群、原野の谷寺古墳群、下谷上の数ノ奥古墳群などの群集墳を除けば、数量的に少ない地域といえる。

また、奈良時代に属する遺跡もほとんど見つかっていない。

ところが、平安時代に入ると、「山田荘」の名で、文献上にも登場し、無動寺の三体仏などもこの時期に製作されるようになる。

鎌倉時代～室町時代にかけて、山田町の遺跡の数は、急激に増加する。山田町福地の若王子神社本殿や山田町中の八幡神社三重塔、山田町衝原の箱木千年家などの建造物をはじめ、山田川の谷筋に沿って、五輪塔や宝篋印塔などの石造物がつくられるようになる。

3. 前年度の調査概要

前年度の調査で検出された遺構は、掘立柱建物2棟・溝1条・焼土壙1か所である。

石敷遺構1か所である。遺物は土器片が多く、コンテナに26箱分出土した。

遺物の時期は、奈良時代の須恵器壺などもあるが、平安時代末期～室町時代初期（12世紀～14世紀）のものが中心である。

4. 調査概要

今年度調査区の基本層序は、第Ⅰ層表土・第Ⅱ層旧耕土・第Ⅲ層旧床土・第Ⅳ層淡茶灰色粘質土・第Ⅴ層灰褐色粘質土・第Ⅵ層暗灰褐色小礫層（中世遺物包含層）・第Ⅶ層茶灰色小礫層（地山）となっている。

土層は、東西方向にはほぼ水平に堆積している。南北方向では調査区北側の方が若干層位が低くなり、第Ⅵ層の上に中世の遺物を包含する第Ⅷ層暗茶褐色粘質土が堆積している。

検出遺構　　今回の調査で検出された遺構は、7世紀中頃の竪穴住居址1棟、平安時代末期～鎌倉時代（12世紀～13世紀）の掘立柱建物7棟・土壙墓1・木棺墓1・溝2条・土壙10か所・石敷遺構2か所である。

(1) 7世紀中頃の遺構

竪穴住居址1　南北4.8m、東西4.4mを測る方形の竪穴住居址で、調査区の南西隅で検出された。後世の攪乱により、上面がかなり削平されているため、柱穴・炉址・周壁溝などは確認できなかった。住居址内の南東隅において、焼土塊が出土した。また、覆土中より、須恵器壺身1・土師器甕1などが出土している。

(2) 平安時代末期～鎌倉時代（12世紀～13世紀）の遺構

掘立柱建物1　南北7.2m、東西6.4mを測る3間×3間の総柱の建物である。柱穴から土師器釜が出土している。

掘立柱建物2　南北6.8m、東西4.8mを測る3間×2間の総柱の建物である。柱穴から須恵器壺3・土師器小皿1が出土している。

掘立柱建物3　南北8.76m、東西6.72mを測る4間×3間の総柱の建物である。今回検出し

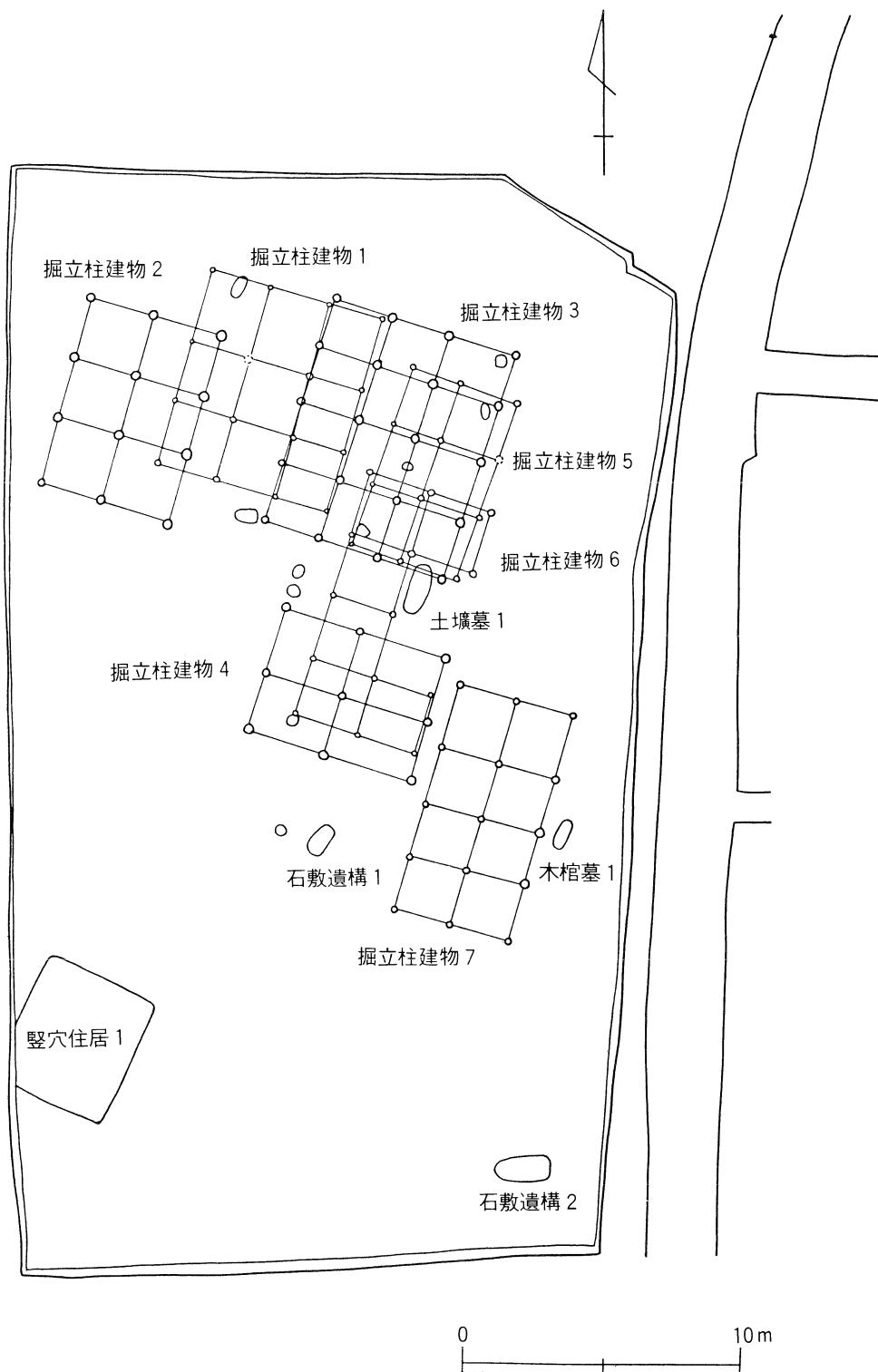


fig. 230 遺構平面図

た掘立柱建物の中では最大の規模をもつ。柱穴から土師器小皿1が出土している。また、柱穴の重複関係から掘立柱建物1よりも新しい時期のものである。

掘立柱建物4 南北4.5m、東西6.0mを測る2間×2間の総柱の建物である。

掘立柱建物5 南北6.8m、東西3.9mを測る3間×2間の総柱の建物である。柱穴から須恵器壺1が出土している。

掘立柱建物6 南北9.36m、東西4.5mを測る4間×2間の建物である。東側の2間目と3間目の間に柱穴が検出されないところから、「コ」の字形のプランをもつ建物の可能性がある。柱穴から須恵器壺6、須恵器小皿1、土師器小皿2、土師器鍋1、短刀（あるいは刀子）1などが出土している。

掘立柱建物7 南北8.4m、東西4.3mを測る4間×2間の総柱の建物である。柱穴の中には土器や礫の入ったものがある。

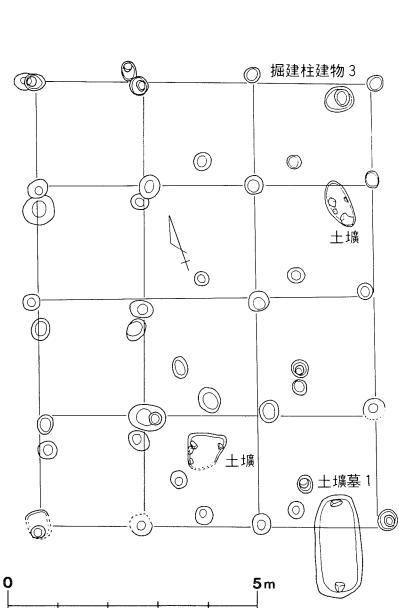


fig. 231 掘立柱建物3 平面図

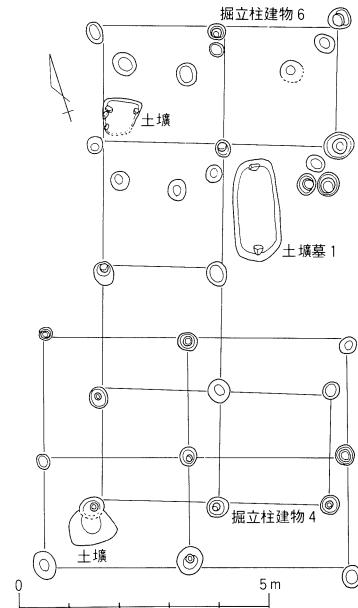


fig. 232 掘立柱建物4、6 平面図

土壙墓1 南北2.1m、東西0.9m、深さ0.3mを測る楕円形の遺構である。土壙墓の南端から、歯が数本検出されており、頭を南向きにして埋葬されていたことがわかる。そして頭のすぐ南側に人頭大の礫を置いていた。また、遺体の置かれていた墓壙底面が黒褐色に変色していた。埋土から白磁碗1、土師器小皿2、鉄塊1などが出土している。

木棺墓1 南北1.7m以上、東西0.5m、深さ0.1m以上を測る長方形の遺構である。墓壙内には、頭蓋骨や足の骨などの人骨がかなり良好な状態で残っていた。人骨は、幅0.3m、長さ1.0m以上の底板の上に頭を北向きにして埋葬されており、

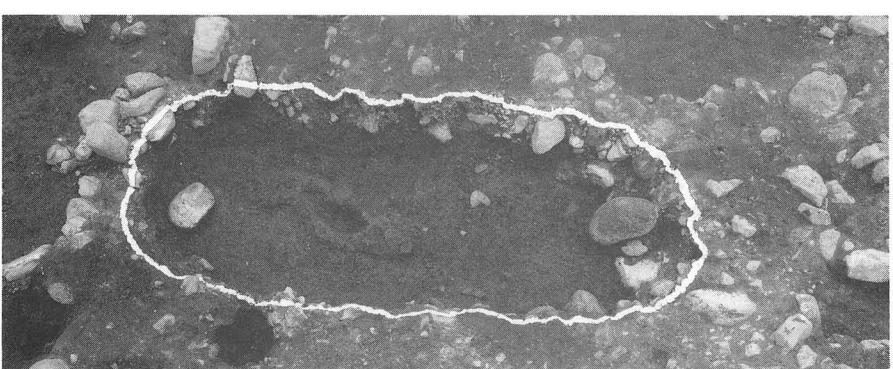
fig. 233 調査区全景
(北から)



fig. 234 竪穴住居址
(北から)



fig. 235 土壙墓 1
(西から)



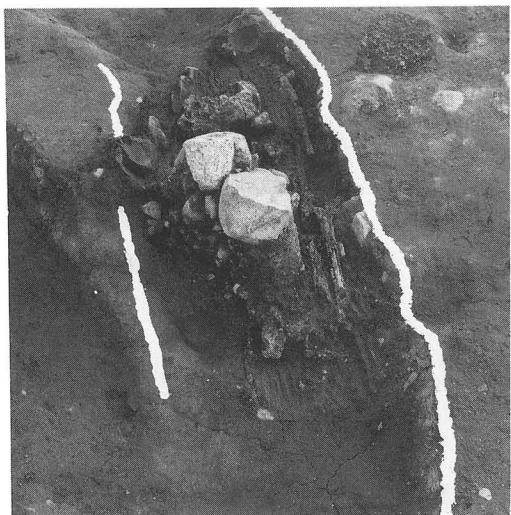


fig. 236 木棺墓1検出状況(南から)

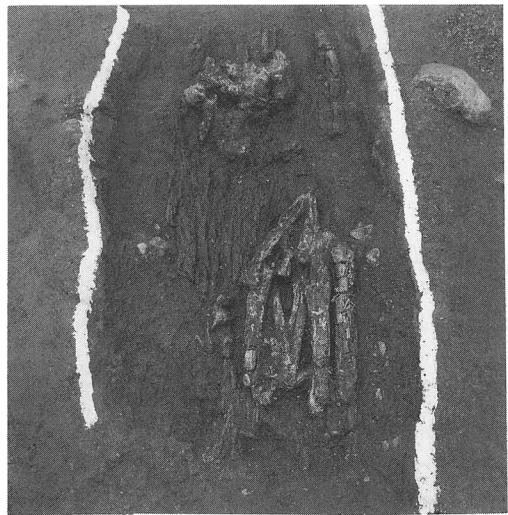


fig. 237 木棺墓1棺底の人骨(南から)

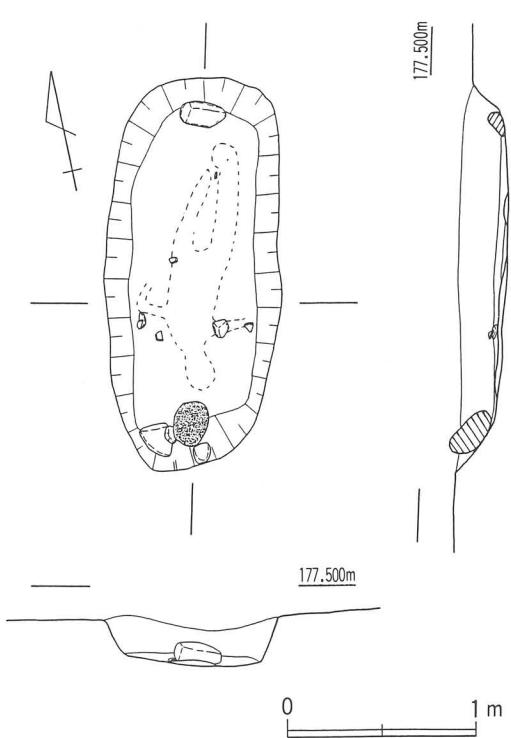


fig. 238 土壇墓1平面図

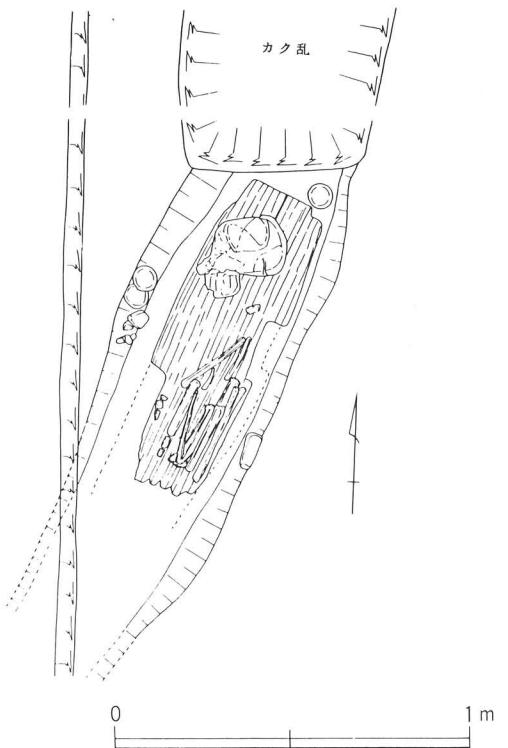


fig. 239 木棺墓1平面図

底板の西側には側板の一部も検出されている。板目はいずれも墓壇長軸に沿っている。また胸の上の辺りにこぶし大よりやや大きめの礫が2つ置かれていた。頭蓋骨の北東から土師器小皿1、墓壇の西端から土師器小皿2、足の骨付近から須恵器壺の破片1などが出土している。

溝1

掘立柱建物4の西側で検出された東西方向にのびる溝で、全長3.2m、幅0.3m～0.4m、深さ0.1mを測る。

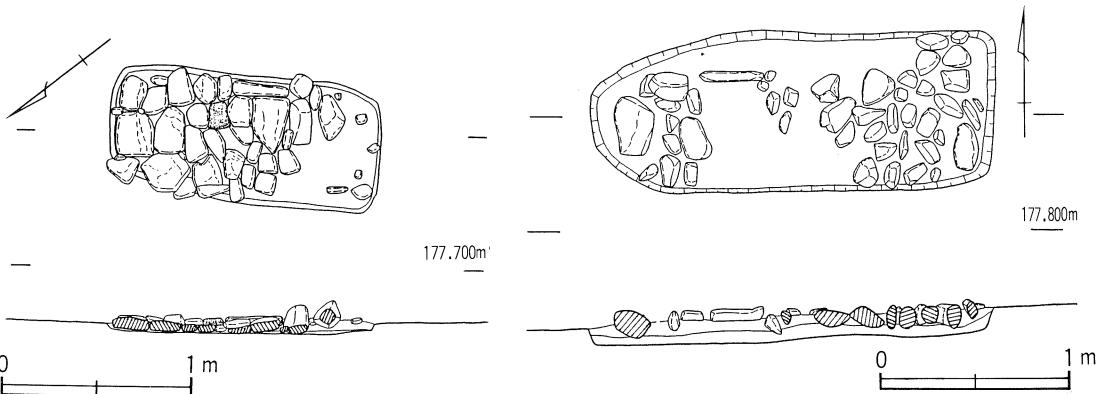


fig. 240 石敷遺構1 実測図

fig. 241 石敷遺構2 実測図

溝2 掘立柱建物1の南側で検出された東西方向にのびる溝で、全長4.8m、幅0.4m～0.8m、深さ0.1mを測る。

土壙1～10 長径0.5m～1.0m、短径0.4m～0.9m、深さ0.1m～0.3mを測る楕円形の土壙である。土壙7から土師器羽釜1、土壙9から土師器小皿5が出土した他はいずれも土器の小片が出土したにすぎない。

石敷遺構1 南北1.4m、東西0.7m、深さ0.1mを測る楕円形の遺構である。地面を掘りくぼめた土壙の底に、一辺が0.1m～0.2mのやや角ばった花崗岩質の板石を敷きつめていた。石材の一部には、火を受けた痕跡をもつものがあった。

石敷遺構2 南北0.85m、東西2.15m、深さ0.15mを測る楕円形の遺構である。石敷遺構1同様、地面を掘りくぼめた土壙の底に、一辺が0.1m～0.3mのやや角ばった花崗岩質の板石を敷きつめていた。

出土した遺物はいずれも小片で、これらの遺構の性格については現在のところ不明である。

出土遺物 竪穴住居址1から出土した須恵器・土師器を除くと、ほとんどの遺物が、平安時代末期～鎌倉時代にかけてのものである。最も多いのは須恵器で碗・皿・鉢・甕などがある。その他に土師器の皿・鍋・甕をはじめ、白磁碗などの磁器や短刀などの鉄器がある。

5.まとめ 北を帝釈山地、南を六甲山という二つの自然の要害に囲まれたこの地域は、古くから西国街道の裏街道として、淡河道とともに東西を結ぶ交通上の要所であった。しかし、これまであまり発掘調査が実施されていなかったため、その実態については明らかでなかった。

ところが、前年度及び今年度の調査により、中世の建物址・墓址などが発見されたことは、この地における中世の生活を考えるうえにおいて非常に意義深いことといえる。

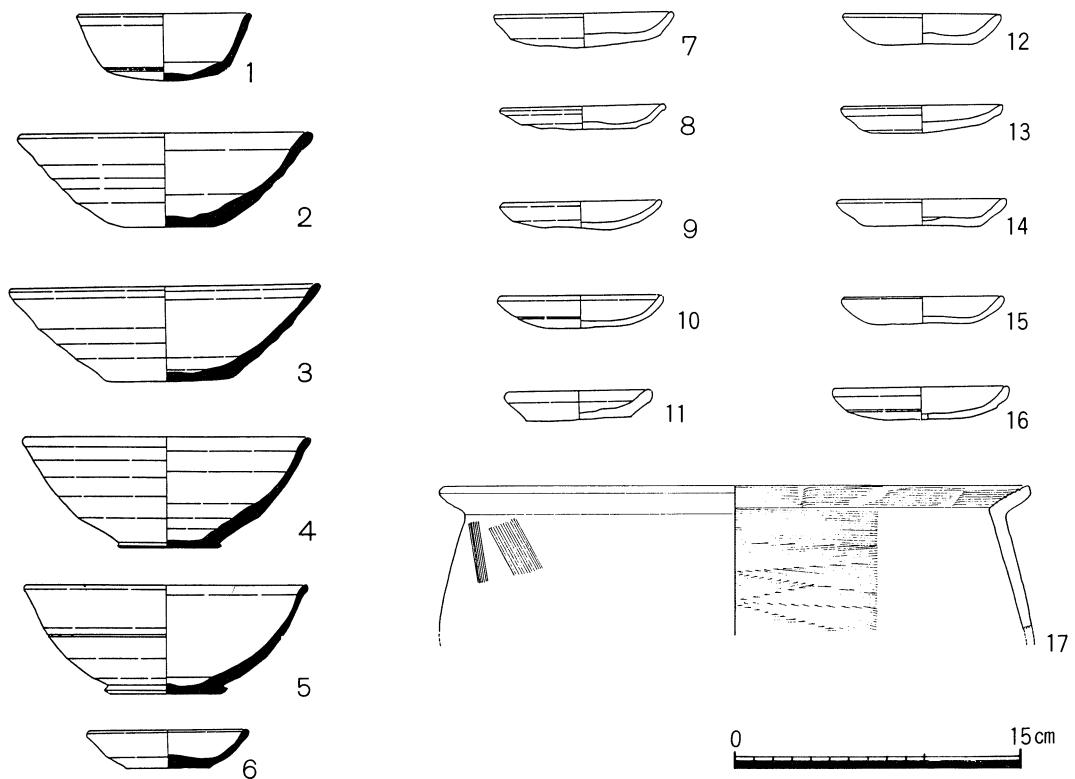


fig. 242 出土遺物実測図

(1. 穫穴住居 2. 3. 17. 掘立柱建物 6. 4~6. ピット内埋土)
 (7. 土壙墓 1. 8~11. 木棺墓 1. 12~16. 土壙)

しもえいばら おおまえ
19. 下宅原遺跡（大前Ⅱ地区）

1. 調査経過 下宅原遺跡は北区長尾町宅原に位置する遺跡で、宅原1号線建設事業に関連して調査を実施した。今回の対象地区は昨年度の調査で弥生時代から鎌倉時代にわたる住居址群が検出された辻垣内地区、大前地区の北側の鹿の子川以北にあたる部分である。昨年度調査した大前地区との煩雑さを避けるため、今回の調査区は大前Ⅱ地区と呼ぶ。調査面積は約360m²である。

2. 調査概要 当地区からは中世・近世のそれぞれの遺構を検出した。

(1) 中世の遺構 当該期の遺構には、調査区の北端に近い部分で検出した東西に延びる水路が1条（S D01）と若干のピットがある。

S D01 S D01は、幅1.5~2.3m、深さ0.8~1.0mを測るもので、鈍いV字形を呈する。

遺物は、埋土の中層から上層にかけて多く、鎌倉時代後半～室町時代前半の須恵器（壺、鉢）、土師器（皿、釜）、磁器（碗）などがある。

(2) 近世の遺構 当該期の遺構には、調査地区の中央よりやや南に検出した石敷遺構（S X01）と、土壙状遺構や溝状遺構（S X02~13）がある。

S X01 S X01は、南北約8m、東西約7mを測る石敷遺構で、プランは主軸をほぼ真北にとり方形を呈するが、東南隅が若干欠損している。敷きつめられた石材の上面レベルはほぼ均一で、K. O. P. 161.1~161.2mの範囲に収まる。石材の配列をみると、西半分と東半分ではやや様相を異にし、西半部約4.5mは扁平な石材を中心に構成され、整然と敷かれているのに対し、東半部3mはやや角礫が多く、雜然としている。さらに、東半部のうちでも、その西半部1.2mはレベルが両側よりやや低くなっている。使用石材の大部分は凝灰質砂岩であるが、河原石も若干混っている。

S X04 S X04は、幅約1m、深さ約0.1mの溝状遺構で、底面に厚さ1~2cmの炭層が堆積している。当遺構より東側では若干の酸化赤色土を検出している。

その他の遺構はいずれもその性格が明確ではない。遺物の出土状況等の観察からすれば、当該期のゴミ捨て穴の可能性が高い。

(3) 出土遺物 出土遺物の主なものには、S D01より出土した中世の須恵器、土師器、磁器と、近世の多量の陶磁器と少量の鉄製品、銅製品、瓦などがある。

陶磁器は、17世紀～19世紀にわたるもので、備前焼・丹波焼等の無釉陶器、唐津焼等の施釉陶器、伊万里焼・三田青磁等の磁器から成り、様々な地方の製品が含まれている。

3. まとめ 今回の調査地区は江戸時代末期に当地方で私札を発行するなど、財力を誇った鳴屋五兵衛の屋敷址と伝承される所である。しかしながら、今回の調査では、

確實に屋敷址に伴うと認められる遺構は検出できなかった。特に、S X01については当該期の類例もなく、性格の究明は今後の課題である。

以上のように、今後に残された課題は多いものの、近世における当地域の様相の一端でも知り得たことは意義深いと言えよう。

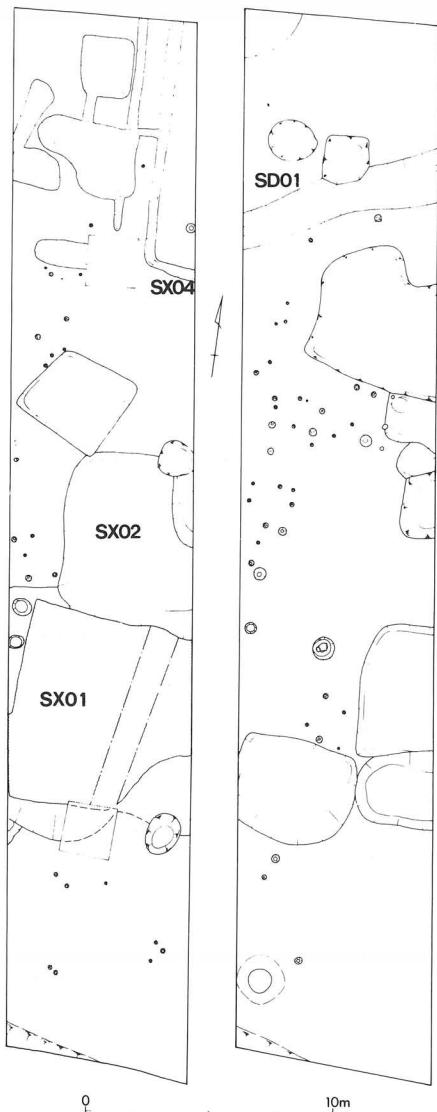


fig. 243 遺構配置図

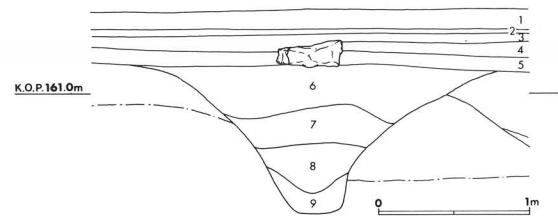


fig. 244 S D01断面図

fig. 245 S D01



fig. 246 S X01全景

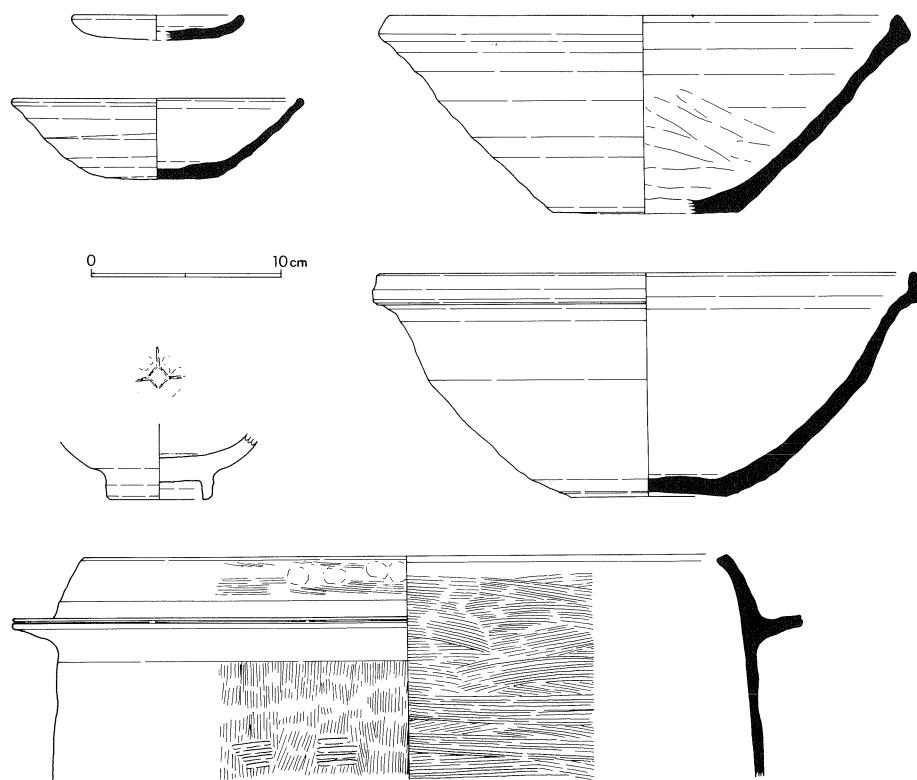


fig. 247 S D01出土遺物

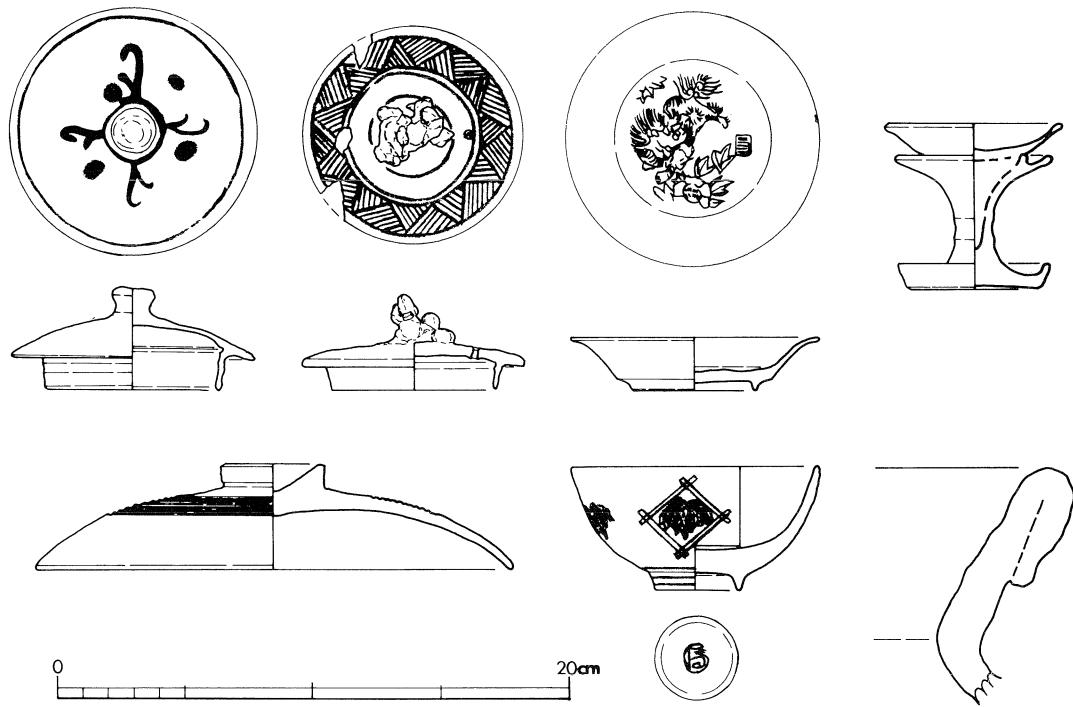


fig. 248 近世の遺物

えいばら 20. 宅原遺跡

1. 調査経過 前年度から圃場整備事業が開始され、工事に先立ち発掘調査を行っている。

前年度の調査結果では、古墳時代集落址・溝、鎌倉時代集落址・溝等大規模な遺跡を想起させる遺構・遺物が検出された。また北神ニュータウン関連事業宅原1号線の発掘調査（下宅原遺跡）で、大規模な古墳時代及び鎌倉時代集落址が発見された。

今年度は、昭和59年5月から、圃場整備工事施行範囲の試掘調査を行った。調査の結果、中世の遺構を現状維持するための設計変更が行われた。しかし、設計変更を行っても一部の水田と排水路及びパイプラインは遺構面を切ることになるため、この部分の発掘調査を実施した。

2. 調査概要 1トレンチ

調査方法 幅6m、長さ94mのトレンチを設定した。耕土・床土は、重機で掘削を行い、以下の土層は人力で掘削を行った。調査区を5mごとにグリットを設け、18区画に分割し、遺物等のとりあげを行った。

基本層序 耕土・床土下に、中世遺物包含層（灰色砂泥）があり、この下面是中世遺構面となる。この中世遺構面の南半部（1～8区）は、地山面となるが、北半部（8～18区）は、古墳時代遺物包含層となる。古墳時代遺物包含層（黄色粘質砂泥）下が、古墳時代遺構面となる。

検出遺構 中世遺物包含層は、調査区ほぼ全域に存在する。出土遺物は、土師器・須恵器・青磁・白磁・瓦器・陶器・焼土等であった。土師器は、少量で小破片のものがほとんどで、器種等を判別できるものはほとんどなかった。須恵器は、塊・鉢・小皿・甕・壺等が出土している。出土遺物の時期は、ほとんどが鎌倉時代のものであるが、古墳時代の壺・甕等が含まれている。

a. 中世遺構 中世遺構は、溝7条、落ち込み6か所、ピット約30か所である。

S D01～06・10 S D01は、18区で検出された東西方向に走る幅約1.5m、深さ0.5mの断面V字状の溝である。北側の肩部に3か所のピットが検出されている。溝内の堆積土は暗褐色の炭を含む粘質砂泥である。出土遺物は、土師器の小破片のもので、時代を特定できるものはなかった。

S D02は、S D01に切られており、17区で検出された幅約2.0m、深さ約0.1mたらずの浅い溝である。遺物の出土はなかった。

S D03は、15区で検出された幅約2.0m、深さ約0.1mの浅い溝である。溝内の堆積土は、砂質土であった。

S D04は、9～11区にかけて検出された幅約11m、深さ約0.2mの溝状の遺



fig. 249 宅原遺跡調査地位置図

A. 下宅原遺跡大前II地区
他は、宅原遺跡の各トレンチ

構である。10・11区でSD04を切るピット群が検出されたことと、少量ではあるが、出土した遺物より、鎌倉時代以前の遺構であると考えられる。遺構内堆積土は、炭を含む灰褐色の粘質砂泥である。

SD05・06は、西から東へ深くなる溝状遺構である。SD05は、幅約0.7m、深さ約0.1m、SD06は、幅約0.2m、深さ約0.1mである。遺構内堆積土は、ともに灰色砂泥である。ともに顕著な遺物の出土はなかった。

SD10は、2～3区にかけて検出された溝状遺構である。幅約0.3m、深さ約0.1mである。

ピット群 17区でピット群が検出されたが、建物としてのまとまりはなかった。No.18杭の南約1mのピット内から、鉢の口縁の破片が出土している。13世紀代のもの

fig. 250 1 トレンチ全景



と考えられる。

また、10・11区でもピット群が検出された。それぞれのピットは、直径約0.2m、深さ約0.2m程度の規模のものをあ。17区で検出されたものもほぼ同規模のものである。このピット群も建物等としてのまとめは示さなかった。

S X01・02 16区、14区で検出された楕円形の落ち込み状遺構である。遺構内堆積土は、褐色の砂質土である。それぞれの規模は、S X01が長径約1.0m、深さ約0.2m、S X02が長径約1.2m、深さ約0.2mである。

S X04・05 6・4区で検出された舌状の形状をなす、浅い落ち込みである。遺構内埋土は双方とも灰色砂泥である。S X04より少量の土師器・須恵器が出土した。

S X06 1区で検出された落ち込みである。規模は調査区隅で検出されたため、不明である。遺構内埋土は、灰色の砂質土で、特に出土遺物はなかった。

b. 古墳時代 基本層序の項でも述べたように、8～18区にかけて厚さ約0.1～0.2m堆積し遺物包含層た黄色粘質砂泥層が、古墳時代遺物包含層である。出土遺物としては、土師器小破片少量と須恵器壊・甕等が出土した。遺物の特徴から6世紀代のものと考えられる。

c. 古墳時代 古墳時代の遺構は、溝3条・土壙ピット約20か所である。

遺構 S D07は、幅約1.2m、深さ約0.2mの溝でやや弧状をなす。溝内堆積土は黃灰色砂層で、少量の土師器が出土した。

S D08は、幅約1.5m、深さ約0.1mの溝で、溝内堆積土は炭混じりの褐色砂泥である。特に出土遺物はなかった。

S D09は、幅約6m、深さ約0.8mの自然流路であると思われる。遺構内堆